

---

# 魔法少女まどか マギカ ~ 幻想殺しと魔法少女

作戦参謀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ〜幻想殺しと魔法少女

### 【Nコード】

N0613X

### 【作者名】

作戦参謀

### 【あらすじ】

それが異能の力であれば、神の奇跡だって打ち消してしまう右手を持つ少年 上条当麻。彼は一週間前に御坂美琴や妹達を助ける為、学園都市の頂点に君臨する一方通行と戦い勝利した。しかし、その事が原因で彼は学園都市の外へ行くことになってしまい、彼とインデックスは行き先である見滝原へ向かった。この知らない街で上条達に待ち受けていたモノとは……？ 科学と魔法少女が交差する時、物語は始まる！ この物語は原作4巻で行き先が見滝原で当麻が父親と会わず、御使墮しも起こらず見滝原でまどか達と会っ

た場合のもしもの物語です。

## プロローグ 学園都市の外（前書き）

どうも、作戦参謀と言つたものです！

二次創作は初めてです。作者ド素人故散々な所もあるとは思いますが、頑張っていきますのでよろしくお願いします！

## プロローグ 学園都市の外

8月28日、天気は晴れ。

黒髪のツンツン頭な高校生、かみじょつてつしま上条当麻と銀髪の暴飲暴食シスター、インデックスはどういうわけか学園都市の外に来ていた。

近年になってから都市化が進んだここ みたきはら見滝原には、とても日本の風景とは思えない西洋チックな町並みが広がっており、イギリス出身のインデックスは目を輝かせていた。

「見て見てとうまー！ 日本にもこんなところがあるんだねー！」

「なんで俺ヨーロッパにいるんだっけ？ あ、そっか……ここは『外』だったな」

通常、学園都市の外に学生が出るのは難しい。何故なら、機密保持と各種作業員による生徒の拉致を未然に防ぐべく、外に出る為には許可書だの血液採取だの、さらには保証人まで用意しなくてはならないという面倒臭い手続きがある……のだが。

上条の場合は一週間前に超能力者レベル5の第1位、一方通行アクセラレータを倒している。

この噂は爆発的に学園都市内に広がり、じゃあ上条の地位が向上したか……と、言えばそれは大嘘になってしまう。上条は無能力者レベル0だ。その無能力者を倒してしまえば、俺が学園都市最強だと考えた腕自慢の不良達が、一斉に上条狩りを始めたのである。

この騒ぎに頭を抱えた学園都市上層部は、上条を一時外へ退避させる事を決定。こうして上条当麻とついでにインデックスは、学園都市の外に出る事になったのだが……。

（しかし、西洋風の街つてのが悪意を感じられるんだよねー）

上条にとって西洋とはあまりいい思い出がない。そもそも、上条は一ヶ月ほど前以前の記憶は失っているのだが、記憶を失った後も三沢塾やヘビースモーカー不良神父の事もあり、西洋に魔術師と勝手に脳内変換されるようになってしまった。

見滝原（こ）に来て嫌な予感がすると思ったのは、まさに今までの騒動のせいである。

と、ここで上条はインデックスの顔色を伺った。なにやら嬉しそうだが、上条にはインデックスが嬉しそうにしている理由がすぐにはわかった。

このシスターは単純大食い娘だ。そして今、上条の鼻にもいい匂いを感じている。

大体の理由がわかった上条はため息をつき、

「食べるのはお世話になる家についてからな」

「そ、そんなことわかってるんだよ！」

「へいへい、精々鹿目（か）さんに迷惑掛ねえようにな」

上条達がお世話になる先は鹿目さんという家らしい。なんでも、上条の父親とこのお父さんが知り合いらしく、しかし上条の父親は海外出張で忙しいとの事で、そこで上条の父親はしばらく上条がお世話になる家を用意した。そこが鹿目家というわけである。

（父さん……か。結局会えなかったけどどんな人なんだろう……？）

くどいようだが、上条は一ヶ月上前の記憶を完全に失っている。それはつまり、自分を生んだ親の顔や自分の生まれ故郷、自分が学園都市に入った経緯すら覚えていないというわけだ。

親や故郷の事を覚えていないとは、なんとも複雑な気分させるものだが……。

（まっ、考えたって仕方ねえか。とにかく、鹿目さんに迷惑かけねえようにしねえとな）

そんな事よりも、もっと重要な事が目前に迫っていた。上条は、いかにインデックスのお腹を満たして鹿目家の負担を最小限に抑えるか、真剣に悩んでいた。上条家の財政はただでさえインデックスの食費に消えているのに、今度お世話になる鹿目家は育ちざかりの子供もいるらしい。

学費や食費も半端じゃないだろう。そこにまた、腹ペコ上条ともっと腹ペコで大食いなインデックスが加わるのだ。きっと、鹿目家は1日もしないうちに財政難になるだろう。

長い事お世話になる予定はないが、自分達が去った後の鹿目家が心配だ。

なので上条はインデックスに我慢を覚えさせるか、それとも自分の有り金を叩いて何かを食べさせてあげるべきか、真剣に悩んでいたのだ。

前者は多分無理だ。インデックスは我慢ができない子である。なら後者、それは上条家の財政がさらに悪化するという意味だが、鹿目家を財政難にさせたくはなかった。

仕方ない。辛い日々が続くかもしれないが、人様に迷惑を掛けない為だと思い、上条は笑いながら振り向いてインデックスに声をかけ、

「よし、インデックス。鹿目さんの家に行く前に何か食って」

言いかけた言葉が止まる。

さっきまで隣にいたハズのインデックスがいないのだ。

魔術師……なわけがない、そんな気配は全くなかった。それにインデックスが姿を消した理由として最もそれっぽいものがある。食べ物。

そう、さっきから香る食べ物のいい匂い。インデックスは多分、このいい匂いに釣られて上条放置で何処かに姿を消したのである。

「早速インデックスさん迷子!? くそっ! 何か地元の学生がいっぱい歩いていて食欲シスター発見できねえし。ちくしょう不幸だ、やっぱりお前は脳に食い物しかねえじゃないか!」

道行く近所の見滝原中学校の生徒達が、上条のことを不審者を見る目で見っていたが上条はそんな事などお構いなし。思う存分頭を掻きながら叫びまくっていた。

「おーいインデックス!」

いつまでも騒いでいるわけにはいかないと、とりあえが上条はインデックスを探すべく見滝原を走り始めた。大通から小道に恐る恐る入り、インデックスがいまいか目を凝らす。しかしインデックスの気配はおるか、この小道には人の気配すら感じられなかった。

それでも上条はインデックスを見つけ出すべく、小道を突き進んだ……が、

「うわ、このままだと俺が迷子になりそうだっ」

冷や汗が出てきた。知らない街で上条が迷い始めたのだ。

と、ここで馬鹿な上条も一つ　いい事を思いついたようだ。

(そうだ、携帯だ!)



慌てた様子でポケットから携帯電話を取り出し、それをガバツと開く……が、悲惨な事に携帯電話に電源が入っておらず、ボタンを押しても電源が入らない。

電池切れ。

そういえば、と上条は思い出す。三日前から充電した記憶がない。あんまりメールはしないタイプの上条だが、昨日は悪友の青髪ピアスつちみがどもとはるや土御門元春と、スク水少女について熱い議論を交わしていた気がした。

そのせいで4日は持つはずだった充電が、一気になくなってしまったのだらう。

「……不幸だっ」

上条はいつもの口癖を呟き、深いため息をついた。

……瞬間。

世界が世界が一変した。

単なる路地裏だったはずのそこは、不気味な色で彩られた奇妙な空間へ変貌した。

（なんだ……？）

不思議に思った上条はキョロキョロと、顔を左右へ振りまわす。

ステイルの人払いのルーン……とも違うようだ。ステイルのソレとは違い、世界そのものが変わってしまったような摩訶不思議な雰  
囲気。

思わず、上条の拳に力が入る。

「まさか……魔術か？」

アクセラレータ 一方通行の仕業なわけがない。御坂美琴みさかみことと言う超能力者レベル5の第3位

だってこんな事はできない。

あの常盤台のお嬢様（？）は精々、自身の能力である超電磁砲レールガンでコインをふっ飛ばしたりビリビリと電撃を放ってくるだけだ。

そもそもソレは超能力のものとは何かが違う。やはり魔術、それもステイルのルーン魔術とはまるで別物な感じである。どう考えてもお友達になりましようと言う空気ではない。

そこで、上条は一つの大切な事を思い出す。

「ッ！ インデックス！」

不気味な空間を走り回り、上条はインデックスの名を叫んだ。しかし、白い修道服を着た少女の姿はおるか、インデックスの独特の声すら全く聞こえない。

ここにはインデックスはいないのか。

それとも、インデックスは既に何者かに襲われてしまったのか。インデックスが消えた原因を考えていた。その時。

「、」

ケタケタケタと、上条の周りで不思議な生命体のようなものが、聞いているだけで背筋が凍る不気味な笑い声をあげていた。

さらに上条の頭上では誰にも持たれていないハサミが、勝手に動いて重そうな鎖をチヨキチヨキと切刻んでいた。細かく切断された鎖の中の数本が、勢いよく上条目がけて降ってきた。

当たれば、人間などペシャンコにしてしまう鎖の大群。

「くそっ！」

上条は咄嗟に右手を頭上へ突き出す。逃げても無駄だと思ったんだろう。そのせいか上条は逃げずに右手を頭上へ突き出したのだ。

普通に考えれば自殺行為であった。しかし……降り注ぐ鎖の中の本が上条の右手に触れた瞬間。

ガラスが砕けるような音が響き、鎖は粉々に砕け散った。  
イマジンプレイカー  
幻想殺し。

それが異能の力なら神の奇跡だって打ち消す、上条の右手に宿る能力だ。特別喧嘩が強くなるわけでも女の子にモテるわけでも、成績がよくなるわけでも幸せになるわけでもない。むしろ神の奇跡を打ち消すので、不幸を呼ぶ右手であるのだが、それでも異能の力を打ち消せる。

つまり、魔術師や超能力者と対等に渡り合える事が出来るのだ。

「右手で打ち消せた……やっぱり魔術か！」

驚きの直後、確信した。これは魔術だと。

上条はキョロキョロと、周囲を見回した。周囲には異形の生命体に、再び上条を押しつぶそうと宙を舞う鎖の数々。鎖を相手にしてはキリがないだろう。なら、と思った上条は、

「おオアああつ！」

ダツ！ と駆け出した上条は拳を握り締め、一体の異形の生命体に狙いを定める。

得に反撃しようとする素振りは見せない。チャンスと感じた上条は、その主砲である右拳を一気に異形の生命体へと叩きこんだ。

バキン！ と生命体はバラバラと崩れて姿を消した。だがその後、数百と戯れている生命体が一斉に上条に襲いかかってきた。後方へ一歩ずつ跳躍しつつ、時々右腕を振るい、拳を当てて生命体を打ち消していくが、上条一人で相手をするにはあまりにも数が多すぎた。

「く、そ キリがねえっ！」

そんな上条を襲うかのように、頭上から鎖が何本も落下してきた。それらは上条には直撃しなかったものの、上条のすぐ前に落下した鎖が埃を舞い上げた。

「ぐっ！」

そのせいで視界が遮られる。

咄嗟に上条は腕をクロスさせ、右目だけは閉じず最低限の視界を確保しながら、自分の身を守ってみせた。上条自身にダメージはなかったが、舞い上がった埃のせいで視界は悪い。霧の日に峠道を走るよりも視界が悪く思えた。それでも、時間が経つにつれて埃は何処かへ飛んでいく。

ようやく視界が回復し、上条は咳き込みながら両目を開けた……が、

「……っ!？」

上条の眼前に異形の生命体達が迫って来る。四方で戯れる生命体に完全に囲まれ、こんな状況では頼りの幻想殺イマジンプレイカーしても対処は難しい。幻想殺イマジンプレイカーはあくまで右手のみの能力だ。

数の前には優れた能力も無力なのである。

どうしようもないと判断した上条は、咄嗟に身を屈めて防御の態勢に入った。

……次の瞬間であった。

「な、なんだ ?」

包み込むような何かが上条の周囲で巻き起こり、彼を包囲してい

た異形の生命体や彼を押し潰そうとしていた鎖が、一瞬にして一斉に数十メートルほど吹き飛んだ。

何事か。驚いた表情になった上条は周囲を見回す。

吹っ飛ばされた生命体以外には誰もいない、いるハズがない。

「危なかったわね」

「っ！」

それなのに背後から 全てを包み込むような優しげな声が聞こえてきた。

身体ごと振り返ると、奇妙な背景から伸びている不気味な階段から、やや大人びてはいながら上条よりは少し幼く見える、どこかの学校の制服を着た少女が現れた。縦ロールの金髪に、インデックスとは対症的な胸を持ち、左手に不思議な物体を持つ少女は微笑みながら上条に近づく。

優しくも怪しげな雰囲気を放つ少女を眼前に、上条は自然と後退りをする。

その態度は初対面の人に対し 失礼極まりないものだ。

「でももう大丈夫」

にも関わらず 金髪の少女は安心感ある言葉を掛けてきた。

見た所、悪いヤツには見えない。そう思った上条は勇気を振り絞り、

「お、オイお前、ここは危な」

「さて、ちょっと一仕事片付けちゃおうかしら」

少女は上条の言葉など聞かず、怪しげな動きを見せる。すると、次第に制服姿だった少女の衣服が変化してゆく。インデックスが普段見ている、マジカルバウード超機動少女カナミンのように。

少女は余裕そうな笑みを浮かべたまま、一気に何十メートルも飛び上がる。手を一振りすれば無数の単発式マスケット銃が、少女の周りに次々と現れる。

ソレは上条が知っている、ステイルマグヌスのルーン魔術とは明らかに違う。どちらかと言えばアウレオルスアルスイザードの黄金練成グネにそっくりであった。

上条が啞然とする中、無数のマスケット銃が一斉に火を噴いた。無数の弾幕が異形の生命体へと降り注ぎ、大地を揺るがすような大爆発を起こす。

赤い炎に黒い煙が立ち込める中、金髪の少女は優雅に着地してみた。それと同時に奇妙な世界は崩壊し、上条が気付いた時には元の路地裏に戻っていた。

「世界が……戻った？」

「魔女は逃げたみたいね」

「お、お前は一体？」

「そうね、自己紹介がまだだったわ　ともえ巴マミよ」

イマジンプレイカー幻想殺しを持つ少年　上条当麻。

不思議な魔術のようなものを扱う少女　巴マミ。

この2人が交差した今　物語は動き始めた。

## プロローグ 学園都市の外（後書き）

どうも、作者です！

正直その日のノリと思いつきの勢いのみで書いたので、この先のストーリーはあまり考えていません（オイ！）

それでも力尽きないよう、週一ペースで頑張っていきますのでよろしく願います！

第1話 記憶にない知り合い（前書き）

ようやく第1話です！  
ただし駄文注意です！



## 第1話 記憶にない知り合い

バ MMI。

その金髪縦ロールの少女は、上条が見滝原で最初に知り合った人物である。とりあえず危険な所を助けてくれた彼女にお礼をすると、今度はMMIが上条に話をかけた。

それも、少しばかり不満げな表情を浮かべながら。

「それにしても貴方、どうしてあの場所にいたのかしら？」

「ああ、ちょっと連れと逸れちゃったから、その子を探していたんだ」

「そ、そう……」

あまりにも普通すぎる回答が、かえってMMIにとっては不思議に思えた。それは彼女が上条の事を普通の人間ではない、何らかの組織に雇われた特殊な人種とでも考えたからだ。MMIがそう考えた理由は言うまでもなく、上条の右手 イマジンブレイカー 幻想殺しの力である。

(おかしいわね、魔女やその使い魔は魔法少女にしか倒せないはず……それなのにつ)

MMIは再び上条の右手を凝視する。一見なんてことのない右腕だ。細くてそこそこ筋肉はあるかもしれないが、とても鍛えているとは思えない、ごく普通の高校生の腕である。だが、MMIは上条と使い魔の戦いを最初から見ていたので知っている。

上条の右手は、使い魔やその攻撃を打ち消していた。それだけでも十分、MMIにとって上条はイレギュラーな存在に思

えた。

さつきから右腕を凝視するマミの視線に、どうやら上条は気付いたようで、

「ん、俺の手がどうかしたか？」

「いや、なんでもないわ。それより最近はどういう事も多いらしいから気を付けて」

「ああ、わかった。お前も気を付けるよ」

「ええ、またいつか会いましょう」

そう言い残し、マミは髪を靡かせながら路地裏の奥へ消えていった。マミの後ろ姿が見えなくなるまで彼は同じ方向を見続けた。マミはマミで上条の事を不思議がっていたが、上条もまたマミの事を不思議な目で見ている。

マミが何らかの力で創り出した無数のマスケット銃。

結局彼はマミの事について聞きはしなかったものの、上条はマミの事を、どこかの魔術師だと思いこんでいた。彼にはアレが魔術にしか見えなかった。アウレオルスの黄金練成アルス・マクナに似ているような気がしてならなかった。

何より一番気になるのは、仮に魔術師だとして 巴マミはインデックスの敵か味方か。

それこそが一番気になる所であり、最も重要な事である。

(……って、情報が少なすぎて考えてもわからねえな)

しかし、全てを決めつけるにはあまりにも情報が少な過ぎた。

結局マミの正体がわからぬまま、上条はインデックス探しに戻る

事にした。あの食欲シスターを見つけない限り、これからお世話になる家に行く事が出来ないのだ。

インデックスは意外にもわかりやすい場所にいた。

最初こそ彼女を探すのは不可能だと思っていたが、大通りに出てみると、最初に目に入ったカフェの野外席に、見覚えのある修道服に身を包んだ少女の姿が見える。上条はよく目を凝らして怪しげな少女を見てみると……その子は探し求めていたインデックスだった。

「あ、とうまだ！」

見知らぬ人と楽しみに会話をしているインデックス。その姿を見て、散々彼女を探した挙句不幸な出来事に巻き込まれた上条は、一気に気が抜けて地面に転ぶ。

突然の物音に、インデックスともう一人の赤髪の少女が反応した。

「ごらあああああああ！ キサマはこんな所でなにやってんだ！ 散々探しまくった挙句面倒くさい事に巻き込まれた俺の苦労はなんだっただんだ！？」

「私はこの人にお菓子を食べさせてもらってたんだよ！」

上条はインデックスの言う、この人をもう一度よく見てみる。

赤い髪のポニーテールの少女だ。口にケーキか何かを銜えており、八重歯らしきものがキーキにしっかりと刺さっている。

どうやら、インデックスはこの人に菓子を奢ってくれたらしい。

必死に彼女を探し、途中で不幸な出来事に巻き込まれていた間に

……。

「はあ……つまりアレか。てめえの脳には食い物しかなくて、上条さんという人物の検索結果は0ってわけですか」

「とうま」

「あ？」

「お菓子、食べる？」

上条の言葉をスルーし、太陽も驚くような笑顔を浮かべるインデックスを見て、

「……不幸だ」

上条は今までの不幸を全て吐きだすように、お決まりの一言を言った……が、上条が不幸に浸っていたまさにその時。バン！と、勢いよくテーブルが叩かれた。衝撃でテーブルに乗っていたコーヒ―がコップから零れる。

恐る恐る、上条は左側へ首を向けると……。

食べ物を銜えた奢り少女が、不機嫌そうに立ち上がった。そして、加えていたケーキをお皿に戻して、キツと上条の事を睨み付け、

「アンタ！」

「は、はい！」

上条は何故か恐怖を覚えた。インデックスにお菓子を奢った少女

は、どういっわけか鬼のような形相を浮かべ、上条の事を敵のように睨んでいたのだ。

思わず上条の背筋がピンと伸びる。次第に冷や汗が吹きだしてきた。

「アンタ……食い物を粗末に扱うなよ」

「……はい？」

「だから、折角食い物をくれるって言うてくれたのに、それを不幸だつて言うな！ 世の中には食い物が食えないヤツだつているんだ」

「す、スミマセンデシタア！」

なんだかよくわからないが、とりあえず謝っておこう。

上条はそう思い、実際に頭を下げた。

ここで謝っておかないと、インデックス並に食意地の張った女の子に、右腕が切れて無くなるまでポコポコにされそうな予感がしたからだ。

「わかればいいんだ。ほれ、これアンタも食べよ」

さつきまで白熱していた少女は、一気に大人しくなった上にケーキを差し出してきた。

なんだつたんだ？ と上条は思いながらも、そのケーキを受け取る。受け取ったケーキに彼女の歯型がついているが、上条はそんなものを気にする人間ではなかった。同時に、ケーキを差し出した少女も間接キスなど気にしない人のようである。

最も、お互い意識していない事も理由の一つかもしれないが……。

「あ、これつめえな」

「とうま……とうまは私のお菓子は食べないんだ」

「えっ？ い、インデックスさん？」

「つまりとうまは私のお菓子は嫌なんだね」

「あの〜インデックスさん？ これはその、色々ありましてですね……っつて」

セリフを切った瞬間 猛獣インデックスが思いっきり上条の頭に噛みついた。

カプリ、と。

インデックスの歯は上条の頭皮に刺さっていた。

「びゃ、びゃあああ！ ちょっと待てインデックス！ こっちはさっき色々あつて超お疲れモードなんだよ！ だから噛み付くのは勘弁してくださいお願いします！」

「色々？ 色々って何！？ まさかとうまはまた私に内緒で魔術師と戦ってきたの！？」

「違うの！ 違います違うんです三段活用！」

「一体何様なのかなとうまは！ 見え見えの嘘についても無駄なんだよ！ とうまの行動パターンは単純だから必死に否定する時は怪しいかも！」

「いててて！ くっそ〜ああもう！ 不幸です不幸すぎますー！」

シリアスな場面でも出なかつた大声を、上条はギャグのような場面で出していた。こんな光景は上条とインデックスにとっては日常茶飯事。

しかし、そんな事を知っているハズもない赤髪の少女は、

「おもしれーヤツらだなあ」

なんだか羨ましそうな表情を浮かべ、一言そう呟いていた。

ちなみに、上条の頭からインデックスが離れたのは、この5分後の事である。本日の噛み付きは今までで2番目くらいの長さであった。

顔や頭には歯型だらけ、可哀想な上条である。

上条とインデックスは赤髪の少女と別れ、今度こそ目的地の鹿目家を目指し、ゆっくりと見滝原の風景を楽しみながら歩いていた。もう一度眺めてみると、ここは本当に日本ではなく、ヨーロッパのどこかの国の都市のように見える。

不思議と心が落ち着く風景だ。

やがて、2人は閑静な住宅街に足を踏み入れ、その中の一軒家の前で足を止める。

現代的な造りの立派な家であった。

とある番組で匠が設計、建築した雰囲気放了家。その表札には『鹿目』と、しっかりとしながらもやや可愛らしい字体で刻まれていた。

「ここが鹿目さんの家かあ」

「わあ、とうまの家より広そうなんだよ!」

「てめえにだけは言われたくねえけど、でも本当そうだろうから別にどうでもいいや」

しかしこれだけ大きいと、インターホーンを押すのに緊張するものだ。それを押そうとしていた上条の右腕も、不思議とビクビク震えていた。

「とうま、度胸が足りないんだよ」

「うつせ黙れ！」

ツツコミを入れたインデックスに、上条はイライラしながら怒鳴り返した。その勢いで一気にインターホーンへ指を押しつけ、ピンポンと言う機械的な音を鳴らす。

外部と内部が通じ、女性の『は〜い』と言う返事が聞こえる。

「すみません、上条ですけど……」

『ああ当麻君ね。待ってて、今あけるからさあ』

この馴れ馴れしさ……もしや知り合いか？ と、上条は思う。記憶喪失の上条はクラスメイトの名前さえ一部を除いて覚えていない。そんな上条が、学園都市の外にいる知り合いの顔や名前なんて覚えているはずがない。やっぱり、鹿目さんは知り合いのようである。と、その時不意にドアが開く。

玄関にはショートヘアの美しい女性と小さな少年。さらに眼鏡の男に、上条よりも年下であろう小柄な少女が立ち並んでいた。

「やあ、いらっしやい。久しぶりだね当麻君」



眼鏡の男　おそらく上条の父親の知り合いであろう男が、いかにも上条の事を知っていますという感じで挨拶をする。その隣で小さな男の子もニコニコと笑っており、さっきの声の主であろう女も笑みを浮かべていた。

その影で一人、学校から帰ったばかりなのか、まだ制服を着ていた少女はチラチラと上条の事を何度も見ている。そんな4人の姿を見て、とりあえず上条は推測する。

（上条さんは知っている。こういう反応をする人達は大体知り合いだってな）

普通に考えればそうなのだが、上条の普通の感覚は地味に狂い始めている。なんせ彼の主な知り合いは隣にいる不思議シスターさんや、ヘビースモーカーの不良神父。そして、常盤台中学に通うビリビリ中学生など、普通じゃない人達ばかりだからだ。

そのせいで、上条はそこまで深読みをしまったのである。とりあえず上条は笑顔を浮かべて、

「どうも、お久しぶりです」

「こんにちはなんだよ！」

インデックス……その挨拶はねーだろ、と思いつつ、上条は笑顔を崩さず、ずっと4人に対してニコニコしている。しかし、若干顔が引きつっているのはここだけの話だ。

「他人行儀だなあ、昔みたいに本当の親だと思ってもいいんだよ」

「そつだぞ当麻君。ほら、まどかも……ね？」

「ま、ママっ！」

意味あり気に言う女 鹿目詢子かなめじゅんこに対し、その娘である鹿目まどかなめかは恥ずかしそうに叫んでいたが、例によって上条はそれほど気にしていなかった。

むしろ、まどかの反応が気になっているのは、上条の隣にいる穀潰し。

「とうま。とうまの影響はこんな所にまで及んでるんだね」

「ちょ、ちょっとインデックスさん？ 何故貴女は怒ってるんですか？」

「やっぱりとうまはとうまなんだよ！」

「意味がわからねえ！ お前は何で怒ってんだよ！？」

「うぎぎ、と〜と〜ま〜っ！」

インデックスがキラリと輝く歯を見せた瞬間。

それがカプリ、と上条の頭に突き刺さる。本日二度目の噛みつき攻撃である

いつもの事とは言え、毎度毎度噛みつかれるのはやっぱりゴメンだ。

「ぎゃあああああっ！ 理不尽だ理不尽です不幸だアああああっ！」

インデックスを振り払おうと頭を振りまくる上条を、まどかの父親である鹿目知久かなめともひさは突然の事に驚いているようで、詢子はニヤニヤ。

まどかの弟である鹿目タツヤは3歳児なので上条が噛まれている理由など、知っているハズがない。

だが、2人やりとりが面白いので、きゃっきゃと笑い声を上げていた。

そしてまどかは……、

（あの子……誰なんだろう？ も、もしかして彼女とかじゃないよね……？）

なにやら一人、上条とインデックスの事で不安に思っている様子であった。

どうやら上条は タツヤ以外の3人とは面識があるようだ。

## 第2話 上条当麻

「不幸だ……」

またしても、お決まりの文句を呟く彼 上条当麻。

頭や顔どころか、服にまで歯型がしつかりと残っている。それは全部、上条家の財政を悪化させている穀潰し インデックスのせいである。

インデックスは怒ると噛みつく癖があるらしい。全く迷惑な癖である。そして、上条はほぼ毎日その癖の犠牲になっているのだ。慣れているとは言え、やっぱり髪付き攻撃は痛い。それ以上に同居人に噛まれる事がショックなことかもしれない。

「そろそろ寝る時間かあ……」

時計を見て確認する。

今日はマトモな晩御飯を食べて幸せであった。これまで、上条家の食卓と言えば安いレトルト食品のオンパレードであったが、今日はごく普通の生鮮食品を使ったマトモな料理。インデックスも「とうまの作ったご飯より500倍はおいしいかも!」と大絶賛のご飯であった。

だが、あれだけ大量にあったご飯の大半は インデックスのお腹の中に消えたのだ。

はあ、と上条はため息をつく。その時、コンコンと言う物音が響いた。

「ん、入っていいぞ」

ドアをノックされたようである。インデックスか……と思ったが、

あの不思議シスターさんが礼儀正しく部屋に入ってくるわけがない。いきなり豪快に扉を開け、上条の名前を叫びながら突撃してくるだろう。

なら、詢子あたりが妥当なものかと上条は思った。しかし、

「当麻お兄ちゃん、お邪魔するね」

「えっ？ か、鹿目？」

部屋に入ってきた意外な人物を視界に捉え、上条は思わず声を上げる。

「当麻お兄ちゃん、それじゃまるで初対面の人だよ？ 今まで通りまどかでいいんだよ？」

「えっ、ああ悪かった。久々だから俺も緊張してたんだ」

「ティヒヒ、当麻お兄ちゃんも相変わらずだね」

上条は肝心な事を忘れていた。鹿目家の父と母が上条と面識があると言うことは、当然娘のまどかとも面識があるというわけだ。つまり、記憶にない昔のこと。上条とまどかは何処かで会っているということになる。それが何時、何処で、そこで何があったのか。細かい事はおろか、まどかがどういう子なのかすら彼は覚えていないのだが。

(とにかく、知り合いだってんなら演技しねえとな)

記憶喪失であることは決してバレてはいけない。記憶のない上条

は、覚えていない以前の上条を演技する必要があるのだ。

あの子の悲しそうな表情を見て、彼はそう決意したのである。

「ほらこれ、去年のお正月の写真だよ」

まどかが上条の隣に座ると、突然携帯電話を取り出し、画面を上条に見せつける。

温かく、柔らかくて甘い匂いのするまどかの感触も気になるが、それ以上に上条の興味を引いたのは携帯に映っていた写真である。写真はどこかの神社の鳥居をバックに、ジャージ姿の上条にしがみ付く桃色の髪の少女が移り込んでいた。

写真が映っている携帯の画面を、上条は本の僅かに頬を赤く染め、まどかのほうをチラチラ見ながら写真を見る。やっぱり……写真に写っているのは隣にいる子　まどか本人だ。

「ああ、そういうえば去年行ったよなあ」

本当は行った記憶なんてないのだが、写真が何よりの証拠だ。それに、自分が記憶喪失である事をバラせばまどかは悲しむか、あるいはインデックスのようにお怒りになるか。

どちらにしても、好ましい展開とは言えない。

それに上条はようやく、自分とまどかの関係が理解できたようである。

(そっか……俺とコイツは幼馴染みたいなモンだったのか)

そう、まどかは上条の妹分のような幼馴染。義妹とまではいかなくとも、彼の悪友である土御門元春が喜びそうなポジションにいる子　それが鹿目まどかという少女である。

「今年もまた一緒に行けるかな？」

「そうだなあ……今もこうして再開出来たんだし、今年も行けるんじゃないか？」

「……うん！ 私、楽しみにしてるね！」

それから、上条とまどかの会話は続いた。何気ない日常会話である。ただし上条は学園都市の人間で、まどかは学園都市の外の人間である。その違いは非常に大きく、故にまどかは学園都市の話に興味を示し、上条も学園都市の外の話に興味を示していた。

さらに、2人には高校生と中学生という違いもある。その違いがあるだけで、無限に話題が湧いてきて2人の会話は留まるところを知らなかった。

そうしているうちに、上条にとって一日目の夜は更けていく、

「あつ、いけない！ そろそろ寝ないと明日学校に遅刻しちゃうよ」  
「っ」

「学校？ そつかあ、外の世界はもう夏休みが終わってるだったな」

「当麻お兄ちゃんはまだ夏休みなの？」

「今月の31日までが夏休みだな」

「いいなあ〜夏休みが長いつて、羨ましいー！」

「そうか？ ぶつちやけ補習受けてた記憶しかねえけどな」

「当麻お兄ちゃん、もしかして勉強苦手なの？」

「ぐはっ！　今の上条さんは心にマリアナ海溝より深い傷を負いましたよっ！？」

「はわわっ！　ご、ごめんね！」

無能力者<sup>レベル</sup>と言っても様々な人種が存在するが、上条は学園都市の中でもレベルの低い高校に通っており、その高校でさえ赤点を取る程度の学力しかない。つまり、上条は世間一般で言うおバカな高校生なのである。

最も、能力が全てという空気が充満している学園都市において、たとえ勉強が出来たとしても能力が使えなかつたら、地位が向上することなんてありえないのだが。

「別に事実だからもういいよ。それよりまどか、そろそろ寝ないとまずいんじゃないか？」

「う、うん！　そうなんだけど……っ」

「……？　どうした、顔赤いぞ？」

「きゃうっ！？　な、なんでもないよ！　おやすみ当麻お兄ちゃん  
「！」

「あ、ああ……っ」

バタバタと、まどかは逃げるように上条の部屋（仮）から去っていった。なんだか恥ずかしさのあまりに逃げ出す感じだったが、そんなものが上条に伝わっているわけもなく、



「……なんだ、アイツ？」

ただ、一人でまどかの様子がおかしかった理由を悩んでいた。最も、まどかの様子がおかしい理由は、誰が見たって悩むほどの事でもない。それでも上条当麻と言う男にはわからなかったのである。

まどかの胸に隠れている　ある莫大な感情の正体が。

S G B

上条当麻や鹿目まどかが寝ようとしていたその頃、見滝原のとある建物の屋上にて三人の人物が秘密裏に話し合いを行っていた。

「へえ、それで必要悪ネセサリウスの教会の協力を仰ぎたいってわけかにゃー？」

語尾ににゃーという、大変ふざけた口調で話すこの男。

短い金髪に青いサングラスをかけた、アロハにハーフパンツの少年は、妹と大きく記されたうちわを仰ぎながら喋っていた。

つちみかぢもとはる  
土御門元春。

普段は上条当麻や青髪ピアスといった、悪友達との会話に花を咲かせる彼も、本来の姿は裏の社会で暗躍する必要悪ネセサリウスの教会の一員である。

それも大変怪しいものだが……。

「ええ、2人はその筋のプロだと聞いてるわ」

「確かに、我々は対魔術師の技術に特化した人材を数多く抱えてい

ます」

土御門の近くには2人が立っている。

一人は少女だ。長い黒髪を掻き分ける仕草を頻繁に見せる容姿端麗な少女は、ネセザリウス「どうやら必要悪の教会の噂を聞いて相談しに来たらしい。」

一方、それに対して2メートルを超える日本刀を腰に下げる女。後ろで束ねた長い黒髪、しなやかな筋肉を覆う肌は白く、絞った半袖のシャツに片足だけを強引に立ち切ったジーンズとウエスタンブーツ。この露出度の高い衣服は、どうやら「左右非対称のバランスが術式を組むのに有効」という理由があるらしい。

かんざきがあり  
神裂火織。

彼女も土御門と同じ、ネセザリウス必要悪の教会の一員である。

「しかも、ねーちゃんは世界に20人といない聖人の一人ぜよ。騎士団の一部隊程度なら余裕のよっちゃんて倒せる腕前を持つてるぜい？」

「ええ、だからこそそのお願いよ。一緒にワルプルギスの夜と戦って欲しい」

長い黒髪の少女　あけみ「曉美ほむらは、土御門達にそう頼んだ。」

通常、魔女やその使い魔と呼ばれる者達を倒すためには、魔法少女の魔力を込めた武器が必要なのであるが、その魔法少女に近い存在　魔術師ならどうであろうか？

種類こそ違うとは言え、魔法を使うと言う点では魔法少女も魔術師も共通している。

「その話はステイルから聞いています。ワルプルギスの夜と呼ばれる魔女はスーパースセルを起こし、周囲に甚大な被害を齎もたらすらしいで

すね」

「しかも、今回は見滝原（こい）に発生する可能性が高いらしいが、歴史を辿ればソイツはどこにでも登場するモンらしい。下手をすれば学園都市 いや、世界を混乱させる存在だぜよ」

「ということとは……あなた達っ」

ほむらは目を見開き、神裂と土御門をチラチラと交互に見る。

まさかとは思った。だけど、現実そんなに上手くいくものなのだろうか？

何があっても巻き込まず、それでもって守りたい対象がいるほむらにとつて あまりに都合が良すぎる話が、果たしてあるものなんだろうか？

今まで絶望（く）のみを経験してきたほむらに、奇跡なんてものは信じられない。

それでも 絶望ばかりを見てきた少女を、彼らは見捨てなかった。

「ああ、俺たちこの問題を解決する為に、イギリス清教（せい）から派遣されてきた 魔術師なんだぜよ」

「それじゃあ……っ」

「はい、あなたと我々の目的は概ね一致するようです」

「それに、お前にだって守りたいもんがあるんだろ？」

「私は……っ」

守りたい。

その為にアイツと契約して魔法少女になった。

魔法少女の本質やアイツの正体を知り、あの子を魔法少女にさせずにあの子を守ろうと私は決意した。

ほむらはその強い決意を表すように、鋭い目つきで土御門達の事を見つめた。

「共にワルプルギスの夜と戦いましょう、私も協力します」

「それに今回の件には、イマジンプレイカー幻想殺しや禁書目録も関わっている。俺たちとしても無視できる軽い問題じゃないぜよ」

「……っ、恩に着るわ」

こうして、魔法少女と魔術師の利害関係が一致した。

ネセサリウスイギリス清教必要悪の教会所属の魔術師2名と、守りたいものの為に何度でも挑戦する魔法少女、暁美ほむら。

災いを齎すもたひと言われるワルプルギスの夜。

そして、今回の件に関わっているとされるイマジンプレイカー幻想殺し。

今まさに 新たな戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

## 第2話 上条当麻（後書き）

ぶっちゃけどうでもいい話：

小説中にあつたSGBとは、本編で機会がなかったのでここでその意味を紹介！

「そのひんをさす  
SGB!」

当麻「なんだこの無意味な企画？」

インデックス「というか、私の出番が早速なくなつたんだよ!？」

これはとうまのせいかも!」

当麻「なんで俺!？　つか痛いす噛みつかないでください不幸だ  
あああ!」

### 第3話 鹿目家の朝

「ここは白と黒の世界。

なにもない、ただ2色が存在するのみの、果てしなく寂しく悲しい世界だ。

ただ、この空間には廊下のようなものがあつた。白と黒の2色で彩られた、空間に存在する通路を駆ける人の少女 鹿目まどか。彼女はひたすら駆ける。何かを目指すかのように 慌てた様子で走っている。

桃色の髪を靡かせながら走る彼女は、やがて行き止まりにぶつかる。白と黒の空間を貫くような廊下がある場所で終わった…… と思ったが、

(…………いや、これ…… ドア?)

広場で【EXIT】と言う緑色に輝く看板を見かける。不自然に階段が伸び、その奥は真っ暗でよく見えないが、まどかにはドアのようなものが見えるらしい。

恐る恐るまどかは階段を上り、変な構造のドアに手をかける。重い。

開けようと押したドアは予想以上に重たいものであつた。中学生のまどかでも、思いつきり力を入れないと開けられない。

それでもドアは開いた。異常に重たいドアを開け、まどかは静かに開眼する。

「ッ！」

その瞬間、恐ろしい光景が目に入り まどかはその場で固まってしまった。

まず整理すると、ここはどうやら大きな木の上らしい。空は暗く、輝きを失った無数の金色の歯車が空を舞っていた。何よりまどかが驚いたものは、空に浮かぶ巨大な物体。それはドレスを着た巨大な歯車の化け物であった。

都市は化け物を中心に破壊され、化け物は不気味な声を上げている。

まどかは静かに前に進み、もっと化け物の姿が見やすい場所へ移動した。

「……………ッ！」

荒れ果てた街の中に、一人の少女がいた。左腕に盾のようなものを装着した、まどかとは対照的な雰囲気を持つ黒髪の少女である。

少女は何かを決意したかのように跳躍し、歯車の化け物へ飛びかかった。だが、大きく飛び上がった少女に何故か、巨大なビルが降ってきた。

ビルとビルが衝突し、ドロドロとした黒煙と、ガラスの雨が降り注ぐ。

だが、それでも少女は生きていた。

黒煙の中から颯爽と姿を現し、少女はビルから飛び降りるように降下する。そんな少女を狙う七色の太い光線のようなものが伸びてきた。何発も、何発も……しかし少女は倒れない。避けたというよりは光線をかき消しているようであった。

左腕に装着している盾が、効力を発揮しているのだろう。

「ひどい……………ッ！」

地獄のような光景を見ていたまどかが一言、素直な感想を叫んだ。

「仕方ないよ、彼女一人では荷が重すぎた」

しかし、まどかに釘を刺すような一言が何者からか放たれる。ソイツは人間ではない。声は人間のようなもので、女性に近い者だったが……白い外見のマスコットのような4足歩行動物。

それが何かはわからない。どんな生き物かさえも　そもそも生き物なのかすら。

「でも、彼女も覚悟の上だろう」

そう語る白い生命体と、それを聞いているまどかの上空では今も少女が戦っている。

戦況は最悪だ。黒髪の完全に押され気味、このままでは命さえ危ないだろう。突如放たれた赤色の一撃に少女は耐えられず、飛ばされて背中を何かに強打する。

「そんな、あんまりだよ！　こんなのつてないよ！」

あまりにひどすぎる光景に、まどかは感情的になり、気がつけば叫んでいた。

一方、大木の吹き飛ばされた少女は静かに瞳を開け、起きあがろうとする。それでも身体へのダメージが大きいようで、おそらく目もぼやけているのだろう。

意識はあっても、立ち上がれない。

「……っ」

少女とまどかの目が合う。大木の上で、少女は必死に何かを叫んでいるが、騒然たる空間のせいでまどかの耳に少女の叫びは入ってこない。

まどかはただ、少女のいる場所を見ていた。



だ、そんな時　隣の小さな白い生き物がまどかに話をかける。

「諦めたらそれまでだ」

その言葉に、まどかは小さく見上げる。

白い動物はまどかの行動が終わるのを確認した後、言葉が続ける。

「でも、君なら運命を変えられる」

「……っ」

小さく驚くまどか。その時、近くの赤く光る街灯が不気味な音を発し、まどかは恐怖と驚きから咄嗟に目を瞑り、両手で耳を塞いでしまった。

それでも白い動物は構わず　話を続ける。

「避けようのない滅びを、嘆きを、すべて君が覆せばいい。その為の力が君には備わっているんだから」

「……ホントなの………？ 私なんかでも………ホントに何かできるの？ こんな結末を変えられるの？」

まどかは小さな歩幅で少しずつ進みながら、半信半疑で白い動物に問う。

白い動物の答えは簡単だ。

「もちろんさ、だから」

一言告げると、くるりとまどかのほえへ振り返り、小さく頷きながら、

「僕と契約して魔法少女になってよ」

一瞬戸惑った。

本当に自分が力になれるのか。この白い動物の言うことが本当なのか。

それでも何かをしたい。目の前で少女が苦しんでいるのに。それ以前に、あの化け物が発生したせいで多くの人々が死んでいるというのに。今までだって、多くの友達を失ったのに。

みんな頑張っていた。あの化け物を倒す為に必死だった。でも自分分は？ 自分はあるの化け物を倒すために何かをしたのだろうか？ いいや、していない。していないからこそ、あの少女は化け物に一人で立ち向かっているのだ。だからあの少女は負けそうになっているのだ。

まどかは その事実が許せなかった。

「……………」

何かを決意し、真顔でまどかは白い動物のことを直視した。

S G B

「……………」

目が覚めた。

布団が気持ちいい。カーテンの隙間から太陽の光が入りこんでいる。ピンク色の動物の抱き枕の抱き心地は極上であった。

「……ふああ、夢オチ？」

起きあがり、抱き枕を抱きながら一言そう言った。

そう、夢オチ。

今までまどかは 夢を見ていたのである。

天変地異の中、一人で化け物と戦う少女をバツクに、魔法少女にならないか？ と勧誘を受ける不思議で意味不明な夢であった……。

S G B

まどかの朝が早いように、居候の上条当麻の朝も早かった。

「いてええエえええエえええッ！」

「う、かつぷあっ！ 朝からなんてモノを見せているのかなとうまは！」

「ちょ！ インデックスさんアレはですね！ 男の生理現象だから仕方ない事です……って、そもそも人の布団に勝手に潜り込むお前はどのなんですかああアああアッ！？」

「とにかくとうまは配慮が足りないんだよ！ とうまのエッチ！」

「朝からなんなんだよ！ ああもう、不幸だああああアッ！」

馬乗りされた上条は、インデックスに頭をガブガブと連続で噛まれていた。格闘ゲームで体力ゲージが三本、一気に青から赤に減ったような気分である。

「それで、とうまはどんな夢を見ていたの？」

「え？ ゆ、夢って……ハハッ！ 上条さんが変な意味の夢を見るわけがないでしょう！」

本当は寮の管理人とアハハウフな展開になる夢を見ていたのだが、噛み付き癖という嫌な悪癖を持つインデックスに、そんなトンデモな告白が出来るわけがなかった。

既に服が何着かダメージを受けているし、こんな若いのに頭皮のダメージについて真剣には考えたくない。とにかく、彼は噛まれな選択肢を選ぼうと必死である。

「ホント？ 天にまします我らの父に誓って言える？ 変な夢を見ていなかったって」

「誓います絶対見てないです！ アレはホントに生理現象で仕方ないモンなんですー！」

「やっぱりとうまはとうまなんだね……仕方ないから特別に許すんだよ」

「えっ？」

洪々、インデックスは上条から降りると、静かに部屋の外へと向かっていった。

「お、おかしい……っ」

本気でそう思った。

あのインデックスが　あの程度の言い訳で納得するはずがない。にも拘らず、インデックスは割とあっさり退き、上条の部屋（仮）から退室。噛み付かれも怒鳴られもしなかったのだ。

上条にとっては幸運かもしれない。しかし、それはそれで気持ちが悪気がした。

（それにしても……）

部屋の中を見回し、自然が背景のカレンダーを見る。今日は8月29日、上条とインデックスの学園都市の外滞在2日目。滞在は明日までであり、8月31日……要するに、夏休み最後の日は学園都市に戻って、翌日から始まる学校の準備をするというわけだ。

「……さて、そろそろ起きるかあ」

滞在2日目。学校もないし、何かに巻き込まれる心配もない。

今日は何をして過ごそうか。そんな感じで上条の朝も始まったのである。

## 第4話 転校生

朝。

鹿目家の食卓は早速力オスなことになっていた。

「んん〜！ このピンク色のたらんとしたものおいしいかも！ と  
うまーこれなに？」

「何って……タラコに決まってるだろ？」

「はぐふおぐんぐつ！ 外はツヤツヤしていながら中身はツブツブ  
とした触感がたまらないかも！ ご飯がいつも以上に進んでお箸が  
止まらないんだよ！」

「一応言っとくけど、ここは俺の家じゃねえんだからな。少しは遠  
慮しろよ……っーか、我が家の家計も苦しいから出来ればうちでも  
自重してくれ」

朝っぱらから上条当麻は、食欲旺盛シスターの超自然的な姿を見  
て、はあ、と大きなため息をつきながら彼女に注意をしていた。一  
応ここは他人の家だし、なにより……インデックスが食べ過ぎて鹿  
目家が財政破綻しないだろうか。

上条はそのことがとつても心配であった。確かにこのまま放置し  
ておけば、間違いなく朝食はインデックスに食いつぶされるだろう。  
しかし、それでもまどかの父 知久は一切笑顔を崩さず、

「ああ、当麻くんもインデックスちゃんも好きだけ食べていいか  
らね」

「ホント!? わーいありがとっ! 今の私には貴方が輝いて見えるんだよ!」

専業主夫の優しい笑顔と優しい言葉。

インデックスは彼を神の用に崇めていたが、どうやら上条は違うようである。

「ちょ!? いいんですか知久さん!? コイツ何もかも食い尽くしちゃいますよ!?!」

「むう、とうまは相変わらず意地悪すぎるかも」

「そっだよ当麻お兄ちゃん。インデックスさんに冷たくし過ぎだよ」

「彼女、成長期でしょ? 食べさせないと育つ所も育たないぞ」

折角忠告をしてあげたというのに、鹿目家の人達の反応は予想外。むしろ、インデックスに食事制限を加えようとする上条が悪い方向で話が進んでいた。

そんな悲し過ぎる現実を目の当たりに、上条は心の底からこう思う。

「なんで俺だけ悪者!? ああもう、やっぱり不幸だあ!」

結局、インデックスは炊飯器のご飯を全て食い尽くし、若干遠慮していた上条の分も少しだけ食べてしまうという、凄まじい大食いぶりを鹿目家の人間に見せていた。

ここで、鹿目家の人間もようやく気付いたのだ。

彼女、インデックスの食欲は 常識を遥かに超えるものだと  
いう事に。

それから、数十分後に詢子が仕事に出かけた後のこと。制服に着替え、詢子に勧められて新しいリボンで髪を結んでみたまどかも、今から学校に行くようである

「いつてきまーす」

「いつてらっしやーいー!」

食パンを銜えたまま外へ飛び出したまどかへ、家族が温かい声を投げかける。とつくの昔に朝食を食い終えた上条とインデックスも、まどかを見送る為に玄関まで来ていた。

「まだ8月なのに学校か……外つてのも以外と大変なんだな」

「あれ、当麻くんはまだ学校始まってないのかい？」

「はい、学校は9月からです」

知久の質問に、上条は軽い感じで答える。  
しかし、

「そうかあ、そういえば宿題は終わったのかい？」

「えっ？ しゅ、宿題……?」

終わってねーじゃん！と上条は心の底で叫んだ。まずい、このままでは小萌先生に何をされるかわかったものではない。上条はいまいち状況がわからず、きょとんとしているインデックスの事を放置してダッシュで階段を上り、自分の部屋に駆けこんで鞆の中を漁



つてみた。

「宿題！ 宿題！」

思い出してみれば、夏休みの宿題をやった記憶が一切ないのだ。

そもそも夏休みが始まった頃の記憶は失っているし、その後もステイルと共に三沢塾へ襲撃を仕掛けたり、その件で右腕を切断されたので例によってカエル顔の医師の世話になった。

その後も、御坂美琴や妹達<sup>シスターズ</sup>、実験の件で大忙し。一方通行との戦<sup>アクセラレータ</sup>闘で負傷し、つい先日まで入院をしていたのだ。

上条の夏休みは戦いと入院の繰り返し。

そんな状況で 宿題なんてものをやる暇はなかったのだ。

しかも鞆の中を漁っているうちに、上条はとある事に気付いたのだ。

「……………宿題ねえじゃんっ」

学園都市の第7学区にある、上条が暮らしている寮の部屋。そういえば宿題を鞆の中に入れた記憶もないし、おそらくあそこに宿題があるのだろう。

学園都市に戻るのは明日のこと。今戻っておそらく不良の餌食。

飯に不良に狙われなくても学園都市のお偉いさんに追放されてしまっただろう。

「……………不幸だ」

上条はまたまた頭を抱え、いつもの口癖を呟いてしまっただけであった。

8月29日の朝は雲1つない快晴であった。

独特な風景を持つ見滝原の、小川が流れるとある公園をまどかは駆けていた。この公園はまどかも登校する際によく通る場所で、さらに友達との待ち合わせ場所でもあった。

まどかを待つ2人の少女が、微笑みながら走っているまどかのほうを向く。彼女達も胸元の赤いリボンが特徴の、独特な制服に身を包んでいた。

「おはよー！」

「おはようございます」

「まどか遅い。お、かわいいリボン」

清純そうな大人しいお嬢様タイプの女の子が挨拶をした後に、青い髪のイマドキ中学生な感じの女の子が、からかう様にまどかのリボンを褒めた。

「そ、そうかな。派手すぎない？」

「とても素敵ですわ」

まどかは親友の褒め言葉に顔を赤らめたが、もう一人の親友の褒め言葉を聞き、どうやら少し安心してホッと、安堵のため息をつく。こうして、朝の公園で出会った2人の親友。今日もまた、3人で楽しそうに恋バナか何かをしながら登校していた。これが彼女鹿目まどかの日常の風景である。

「でね、ラブレターでなく直に告白できるよつでなきゃダメだって  
るんるん、と楽しげに足を踏みながら、まどかは今朝の話を2人  
にしていた。

その話を聞いた直後、まどかの後ろを歩いていた青髪の少女が急  
に駆けだし、楽しそうに憧れの表情を浮かべながらまどかの横に並  
んだ。

「相変わらずまどかのママはカッコいいなあ。美人だし、バリキヤ  
リだし」

「そんな風にキツパリ割り切れたらいいんだけど……はあ」

「羨ましい悩みだねえ」

「いいなあ、私も一通くらい貰ってみたいなあ、ラブレター」

2人の話を聞いていたまどかが、うつとりした表情でそんなこと  
を呟く。脳裏にはあの人の姿が浮かんでいたりするのだが、そんな  
事は他の2人が知る由もない。

「ほお、まどかも仁美みたいなモテモテな美少女に変身したいと。

そこでまずはリボンからイメチェンですかなあ」

「ち、違うよ！ これはママが」

「さては、ママからモテる秘訣を教わったあ〜けしからん！ そんな  
なハレンチな子はこうだあ！」

そう言ったあと、いきなり青髪の少女がまどかへ飛びかかった。それはもう、ただ襲うのではなく愛情タップリかつ、百合百合ラブとした感じで。

まどかは少女から逃げようとするが、結果は最初から決定したようなもの。例えるなら肉食動物に見つかった草食動物が、必死に逃げようとはするが、それは抵抗だったというものだ。

しかし、まどかは笑っていた。

青髪の少女はまどかを捕まえた瞬間、彼女の弱点に攪り攻撃くすりくをし掛けたのだ。

「や、ちょ、やめて……にやははへへっ！」

「可愛いヤツめえ、でも男子にモテようなんて許さんぞ。まどかはあたしの嫁になるのだあ！」

と、朝から凄いい勢いで馬鹿騒ぎをする2人に、お嬢様 志筑仁しすきひ美がゴホン、と静かに咳払いをすると、それに気付いた2人が動きをピタリと止めた。

あ、という声を漏らす。

よく見るとここは学校の目の前 同じ学校の生徒にガン見されていたのだ。それを考えると2人は急に恥ずかしくなり、少しだけ赤くなるのであった……。

S G B

ここ見滝原中学校はかなり特殊な校舎だ。街の中では歴史があるものの、最近になって近代化改修が行われ、教室の壁も全てガラス張りになっている。その特殊さは、おそらく学園都市でもお嬢様ば

かりが集まる、常盤台中学に勝るとも劣らないかもしれない。

白を基調として制服に身を包んだ生徒達が、白い教室の白い席に座り、ホワイトボードの前で眼鏡をかけた頼りなさそうな先生の話を聞いている。

早乙女和子。

色々と悩み多き女性教師であり、まどか達の担任でもある。

「目玉焼きとは固焼きですか、それとも半熟ですか。はい、中沢君！」

「ええっ！？ えっと……どっちでもいいんじゃないかと……」

「その通り！ どっちでもよろしい！ たかが卵の焼き加減なんかで、女の魅力が決まると思ったら大間違いです！ 女子の皆さんはくれぐれも半熟じゃなきゃ食べられないとか言う男と交際しないように！」

と、力強く和子は言いながら、持っていた指示棒を勢いに任せて折ってしまった。

「ダメだったかあ……」

と、まどかの親友である青髪の少女 美樹<sup>みき</sup>さやかは後ろを振り向いて呟く。それに合わせるようにまどかも頷き、愛想笑いを浮かべながら「ダメだったんだね」と返す。

同時に、頭の中であの人はどっち派なんだろうとも考えていた。そんな時 卵にケチをつける大人になると、男子に説教を終えた和子が、いきなり開き直ったように笑顔になり、ようやく本題を語ろうとした。

卵の焼き加減なんかよりもずっと重要な 本題に。

「はい、あとそれから、今日転校生を紹介します」

「そっちが後回しかよ……っ！」

さやかへの反応は常識的に考えて当然の反応であろう。彼女にとっても、やっぱり卵の焼き加減なんかより転校生のほうが重要だ。いや、普通の人なら転校生のほうが重要だと思うだろう。

「じゃ、暁美さんいらっしやい」

和子が転校生の名前を呼ぶと、教室に一人の少女が入ってきた。

黒髪で、胸は残念な感じながら背はそこそこ高くて、整った顔つき……いわゆる美少女というヤツが入ってきたのだ。

生徒たちの反応は揃って単純。かわいいだの、美人だの言う当たり前の単語。

そんな中、ただ一人のみ 大衆とは違うふうに感じている人物がいた。

「うわあ、すげえ美人」

「ッ!？」

まどかにとっては、その転校生が別な意味で驚きの存在であった。夢。

そう、夢だ。たったいま教室に現れた転校生の美少女は、今朝みた夢の中で歯車の化け物と戦っていた少女にそっくり……いや、外見から雰囲気まで本人そのものであった。

「うそ……まさか……っ」

教室の中でたったり一人　まどかだけがある意味でショックを受けていた。

夢の中の少女が何故、転校生として現れたのであろうか？

「はい、それじゃあ自己紹介いつてみよう！」

「暁美ほむらです、よろしくお願いします」

それは物凄く簡潔かつ、表情が全く変わらない無感情な自己紹介であった。その横で和子が彼女の名前を書こうとしているが、何やら迷っている様子だ。

暁美ほむら……という所で迷っている。その先何を書けばいいのかわからないのだろうか。

そんな時、ほむらは鞆の中から携帯電話を取り出し、それを和子に見せる。

それでようやくほむらの字がわかったのか、和子の手が進み、ホワイトボードには【暁美ほむら】という名が描かれた。

和子が書き終わると、ほむらは生徒達に静かに礼をする。

あまりの威圧感に、生徒たちも困惑している。とりあえず歓迎しないと、ということ誰かが空気を呼んで拍手を始め、それに合わせる形で次々と拍手が沸き起こった。

「……………えっ!？」

そんな時、ほむらとまどかの視線が合った。どういうわけか、ほむらはまどかにガンを飛ばしているように見えた。まどかは思わず視線を逸らし、俯きながら迷っている。

それでも恐る恐る、彼女の姿を見ようとはしていた。

「え、えつと……暁美さん？」

和子まで困惑しており、どうすればいいのかよくわかっていない様子だ。それでもなんとかほむらに声をかけた所で予鈴が鳴った。どうやら、ホームルームの終了時間であるらしい。

この転校生……一体何者なのであろうか。

不思議かつ威圧的な転校生はその後、静かに指定された自分の席へと向かった。

S G B

学園都市第7学区。

8月29日の早朝、多くの学生たちは夏休みも未な為か、まだ終わっていない宿題を済ませる為に自宅に引きこもっている。その為今日の学園都市はいつもより人が少ない。とは言え、まだ夏休み終了まで今日を含めると3日ほど残っている為、遊んでいる学生は思いつきり遊んでいた。

そんな中、宿題でも遊びでもない 仕事に明け暮れる者もいる。

「こちら白井黒子<sup>しらゐくろこ</sup>。初春、例の侵入者は第7学区のどの辺りですの？」

第7学区の路地を走りながら、初春という人物と通話をしているのは、学園都市における警察的な組織の一つ、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の第177支部所属の白井黒子。小柄な茶髪ツインテールの女の子は噂の常盤台中学の制服を着用し、独特な腕章を右の袖に巻いている。

『その路地の突き当りを左へ、5メートル先を更に左です』



電話から甘ったるい声が聞こえてきた。初春飾利もまた、白井黒子と同じ第177支部所属の風紀委員ジャッジメントなのである。

「了解ですの！」

言いながら、大きく膨らみながら路地を左折する。今回、彼女は学園都市都市に侵入してきた外部の人間を拘束する為に、態々愛するお姉様の事を置いてまで出勤してきたのだ。

黒子は携帯電話をチラリと確認する。

そこに映っているのは一人の少女。赤い髪のポニーテールを持つ、八重歯が特徴的な見た目はとってもキュートな女の子だが、やることとはえげつないらしい。なんでも、真正面から学園都市の「門」を突破して、多数の負傷者を出して強引に学園都市内に侵入してきたらしいのだ。

この時点で、対テロ用の警戒レベル「コードレッド特別警戒宣言」が発令。学園都市内外の出入りが完全に封鎖され、風紀委員や警備員アンチスキルに、面々には公欠と共に侵入者の搜索・索敵の命令が下された。

かくして黒子は遊びたいのを我慢し、何時間も歩いていたのだ。

（あの人……ですの？ 間違いありませんわね、写真と全くの同一人物ですの）

向かった先で見かけた少女は、確かに赤髪ポニーテールの女の子。雰囲気こそまるで別物だが年代は黒子に近い雰囲気だ。赤いフリフリの衣装に、槍を持つ物騒な少女は、黒子の気配を察知したかのように槍を構え、こちらを厳しく睨みつけている。

そんな少女の威嚇に驚かず、黒子は決めポーズを取って、

「ジャッジメント風紀委員ですの！ 貴女を不法侵入及び暴行傷害の現行犯で拘束

いたします!」

当然、槍で武装した物騒な少女の反応は薄い。ただ、薄くフツと笑いながら、黒子を馬鹿にして嘲笑うかのように、三下を見るような目で彼女を睨みつけた。

「ふん、折角魔女を倒してやったっていうのに、恩知らずな街だなあ学園都市って」

「魔女……?」

「素人に説明するのは面倒くさい。それにさあ、そうやって敵意を向けられるとこっちも色々とムカついちゃったりするんだよなあ」

口を歪ませ、槍を持つ物騒な少女は薄い笑みを浮かべる。  
その時、黒子の眉が僅かに動いた。

「あら、それはこちらと同じ事ですの。どうやら、わたくし達は気が合いそうですわね」

「悪いけど狎れ合う気はねえ。アタシに得はなさそうだし、アンタもそんな気ないんだろ?」

「物分かりがよろしくて助かりましたわ。それでは、さっさとお縄にかかってくださいませ」

「つーか、超ウゼエ……いいよ、少しだけ相手してやるよ 能力者」

学園都市に侵入した赤髪の少女。

果たして、どういう経緯で学園都市に侵入したのだろうか？

学園都市にまで広まる魔女の脅威？

それとも……彼女の個人的な理由？

そして、能力者と呼ばれる白井黒子と 槍を持つ赤髪の少女の

戦いの行方は？

## 第4話 転校生（後書き）

・後書き！

なんとなく科学サイドを登場させたかったから書いてみましたけど……ぶっちゃけこの先あんまり考えていません（オイ！）  
とりあえず、これで科学サイドの方々も今回の話に登場、参加、活躍できればな～と思います！  
それでは次回、また会いましょう！

## 第5話 魔女狩り

暁美ほむら。

この日、見滝原中学校に転入してきた謎の少女である。転校生という存在は大抵は注目を浴びるものであり、ほむらも例外ではないようだ。ほむらの席の周りには多数の女子が集まり、「前の学校はどこなの？」だの、「髪すごく綺麗だね」と、彼女を褒める者もいた。

ところが、彼女達の質問をほむらは聞いていない……。

「……ごめんなさい」

と、言葉を区切ると、いかにも苦しそうな表情で頭を抑えながら、「ちょっと緊張しちゃったみたいで気分悪くて……保健室に行かせてもらえるかしら？」

「大丈夫？ 連れてってあげるよ！」

「いえ、係の人をお願いするわ」

ふらつきながら、ほむらは席から離れてある場所へと向かう。そこには、まどかとさやかか仁美の席に周りにいるが、ほむらはその集団に割って入るように近づく。

なにかな、と思った集団。

やがて、目の前まで迫ってきたほむらはまどかと視線を合わせる。

「鹿目さん」

「……へっ？」

「あなた、保健委員よね。保健室、連れてってもらえる？」

どうして、彼女は自分が鹿目という名前である事を知っているのか。どうして、彼女は自分が保健委員である事を知っているのか。まどかはその事が不思議でたまらなかったが、保健委員としての役目を果たすためか、あるいは彼女の良心か、まどかは静かに首を縦に振る。

その奇怪な光景を、さやかと仁美は啞然としながら眺めていた。

その後、2人はガラスだらけの廊下を歩いていた。

本来保健委員であるまどかが保健室への行き方を教えるべきなのだろう、しかし何故かほむらがまどかを案内する感じになっている。まどかも内心、自分が案内されているみたいだと思っていた。

「あ、あの……暁美さん？」

「ほむらでいいわ、何？」

「あ、え、えっと……あのねっ！」

どうしよう、「何で知ってるの？」なんて……やっぱり怖くて訊けない……。

脳内でそんな事を考えながら、まどかはあたふたと慌てながら両手を振った。

それでも聞きたい。何故彼女が自分の事を知っているのか知りたい。

そんな想いが　自分自身を動かす。

「ほむらちゃんと私って、前に何処かで会った……かな？」

まどかの質問に、一瞬ほむらの目が見開かれたような気がした。  
何故だか空気が沈む。

「あ……なんちゃって……そんなわけないよね？」

余計な事を言ってしまったのかもしれない。どうにか誤魔化せないものかと、まどかは必死に今の発言を無かった事にしようとする。それでも、ほむらの表情に 変化はない。それが余計にまどかを緊張させる。

「鹿目まどか」

「は、はいっ！」

「あなた、家族や友達のこと、大切だと思ってる？」

「え……」

突然の質問にまどかは困惑する。

そもそも、今の流れでどうしてそんな話になるのか、そこから意味不明だ。

「どうなの？」

「……もちろん、大切だと思ってるよ？ 家族も友達もみんな好きだもん！ あと当麻お……っ！？ な、なんでもないっ！」

「当麻……？」

一瞬、ほむらの表情が曇ったように見えた。

何故か彼女は家族や友達ではなく、当麻という名前に反応したのだ。

まるで、ありえない言葉を聞いてしまったかのように。

「……………そう、なら忠告しておくわ」

とりあえず、当麻という言葉はスルーすることにしたようだが、さっきのまどかの返事に続けるようにほむらは語りだす。強く、何かが籠められた視線をまどかに向ける。

「その気持ち<sup>ココロ</sup>が本当ならこれだけは守って。この先何が起ころうとも、自分を変えようだなんて決して思ってはダメ」

言いながら、ほむらはまどかに背を向ける。

保健室のドアに手を伸ばし、ドアを開けて中に入ろうとしながら、  
「……………でなければ、あなたの大切なものを　すべて失うことになるわ」

「……………ほむら、ちゃん……………?」

ハッキリ言うと、ほむらの言葉は理解不能であった。まどかも中学生だ、決してその言葉の意味がわからないわけではない。要は友達や家族を大切にしなさいと言う事であろう。

だが、自分を変えちゃダメとはどういう意味か。

そもそも、どうして彼女はあんな忠告をしてきたのだろうか？

その意味を考えているのか、まどかはしばらく保健室の前に佇んでいた。



見滝原という街は広い。最近になって都市開発が進められ、新興住宅地には人工的な景観の緑地や小川が整備され、郊外には風力発電施設や水門、工場などが置かれている。ここは後者の工業地帯の一角なのだが、どう見ても工場関係者とは思えない少年が一人、佇んでいる。

少年の身長は2メートルを超えており、加え煙草にバーコード。髪は長めで、ただしその色は赤という不思議な色である。神父のようにも見えるが、誰も彼を神父とは呼ばないだろう。

「さて、ここら辺から強い魔力を感じただけだね」

言いながら、少年は工業地帯を奥へ奥へと進む。

「ヤツらは結界を張り、通常の間人には目視出来ない状態で暗躍する……全く、最大主教も面倒な注文をしてくるものだ」

少年はとある倉庫の前で立ち止まる。比較的綺麗で真新しいを見ると、近年の都市開発で建てられた新しい倉庫のようである。少年は倉庫の大きなドアに手のひらを当てて。

「ここだね……魔術師、いや、魔女だったかな？ 気配　つまり莫大な魔力を感じる。中々上手い潜伏方法だけど、僕達魔術師って生き物には殆ど無意味なものかな」

魔女。

それは魔法少女、あるいは魔術師たちが追っている異形の生命体だ。その正体の詳しい事はこの少年は理解していないが、どうやら彼は魔術師で、その魔女を追っているようである。魔女を追う魔術師の少年は倉庫の扉を開ける。眼前に広がるのは比較的物が少なく、広々とした空間。

しかし、ある一点に 明らかに違和感のある場所があった。

「見つけた……さて、と。仕事を始めるとしようか」

違和感のある一点、謎の円形のカラフルな所へ少年は飛び込んだ。瞬間、世界が一変。

工事現場のような空間に、無数の髭を生やした毛玉のような連中がたわむけている。

そんな中、少年は 。

「事前にルーンのカードは配置してある。結界内であればアレを自在に使えるね……ならば」

少年はニヤリと薄く笑う。

「一応名乗っておくよ。スタイル〓マグヌス……とりたい所だけど、ここはFortis931と名乗っておくよ。最も、魔女には理解できないかな？ 魔法名……まっ、僕らの間では殺し名だ」

独り言を言い終えた後、少年 ススタイル〓マグヌスは笑いながら右手を開いた。

決してそれに意味があるとは思えない動作。しかし、スタイルには余裕がある。

この奇怪な光景を見てもなお 彼は余裕でいる事が出来た。  
その理由とは、

「<sup>M T W O T</sup>世界を構築する五大元素の一つ、<sup>I H G O I H O F</sup>偉大なる始まりの炎よ」

ステイルはいきなり詠唱を始める。相手がいくら異形の生物であるとはいえ、これには耐えられないであろうと、彼の余裕はさらに増してゆく。

「それは生命を育む恵みの光にして、<sup>A I I I</sup>邪悪を罰する裁きの光なり。  
<sup>I I I</sup>それは穏やかな幸福を満たすと同時、<sup>A I I</sup>冷たき闇を滅する凍える不幸  
<sup>D I I N F I I M S</sup>なり、その名は炎、<sup>I I I M S</sup>その役は剣。<sup>I C R</sup>顕現せよ、<sup>M M B</sup>我が身を喰らいて力と  
<sup>P</sup>為せ！  
<sup>I I I</sup>魔女狩りの王！」

ステイルの胸元が大きく膨らんだ瞬間、轟！ という凄まじい音が炸裂する。その音と同時に彼から放たれた灼熱の炎。渦を巻く火炎がある一点に集まってゆく。炎が集まるその一点に重油のように黒くドロドロしたモノが芯になり、その芯は人の形を作り出していた。

それが消える事はない。むしろ、勢いを増すかのように延々と燃え続ける。

名は【<sup>I I I</sup>魔女狩りの王】、その意味は【必ず殺す】。

必勝の巨神は両手を広げ、まるで笑っているかのように激しい燃焼を続けた。

「行くぞ、<sup>I I I</sup>魔女狩りの王。その意味通り 魔女を殺しに」

煙草を吸いながら、ステイルはそう呟いた。

ステイル「マグヌス。」

彼もまた、今回の魔女退治に加担した【魔女狩り】、【宗教裁

判】などの、対魔術師の技術に特化したイギリス清教の組織  
セサリウス  
要悪の教会所属の魔術師である。 必<sup>ネ</sup>

SGB

学園都市は様々な学区に分かれ、それぞれ特徴を持っているのだが、ここ第7学区は学園都市の中心でもあり、故に人の数も多い。それだけに大規模な戦闘は避けたい所である。だが、第7学区と言えども路地裏の人口は非常に少なく、精々夜間に不良達がたむろする程度である。

ここなら、多少暴れる程度なら問題ない。

白井黒子も赤髪の少女も お互いにそんな事を考えていた。

(まっ、いくら学園都市の正門を突破したとは言え、所詮は外部の人間。能力者を前にしてどこまでやれるか 見物ですわね)

頭の中でそう思った瞬間、白井は軽い調子で駆け出して赤髪の少女へと迫る。赤髪の少女は槍を構えながらニヤリと笑った。いや、それ以上に吹きだしそうである。どうやら、白井の単純かつ無謀とも思える行動が面白いようだ。素人か、などと思ったのだろう。

その時、杏子の槍が複数に分裂した。

分裂というよりは、ヌンチャクのような形状となったと説明する方が正しいだろう。

彼女はそれを振りまわし、宙でうねる多節棍の槍を白井へ放つ。

(まさか、外部の人間の癖に能力者ですよ!?)

赤髪の少女が持つ槍が変化したことに、白井は驚きを隠せなかった。

が、

白井が驚いていたのは、ほんの一瞬のみである。

「まあ」

と、一言を区切って、ほんの僅かにヒュン、という音が聞こえた瞬間　赤髪の少女の前から白井黒子の姿が完全に消えたのだ。

少女は目を見開く。無理もない、素早く動いて姿が見えないわけでもなく、何らかのトリックというわけでもない。白井は本当に空間から消えたように見えたのだ。

赤髪の少女は戦闘開始早々、やや焦りを見せ始めている。

「チツ、どこだ!？」

「こっちですわよ」

「ッ!？」

声を聞き、反射的に後ろへ振り返ると　そこには白井黒子の姿があった。

白井は余裕の笑みを浮かべながら、路地裏に放置されている廃車の屋根で、相手を見下すように目を細めて座っている。赤髪の少女は槍を元の槍の形状に戻し、刃先を白井へ向ける。これで白井も迂闊に攻撃は出来ないだろうと判断し、赤髪の少女は脳内で白井の事について考え始めた。

魔術……いや、そんなはずがないだろう。彼女はある程度ではあるが、学園都市に侵入する前にこの街の事について情報を手に入れ

ていた。

「どうやら、この街には能力者と呼ばれる超能力を扱う者がいるらしい。」

「詳細は未だに不明だ。」

「だが、その正体を掴む一つのキーワードとして、彼女が咄嗟に思い浮かんだものは、」

「それが噂の超能力か、生で見たのは初めてだわあ」

「ええ、わたくしの能力は【空間移動<sup>テレポルト</sup>】です。お次は攻撃しますが、覚悟はよろしくて？」

白井黒子はただの風紀委員ではない。瞬間移動<sup>テレポルト</sup>を扱う、大能力者<sup>レベル4</sup>の空間移動能力を扱う高位能力者なのだ。超能力者<sup>レベル5</sup>ほどではないにしろ、それでも軍隊で戦術的価値を得られる程の力を持っているのだ。

移動限界質量130・7キログラム、最大飛距離は81・5メートルと、決して万能な能力とは言えないものの、そこらの能力者を相手にする分なら、むしろチートなレベルである。

その性質上、余程の強者でない限り 勝利は難しい。

「上等だ、アタシもアンタを殺す気で行く！」

赤髪の少女は再び槍を変形させ、鎖で繋がれた多節棍の槍を大きく振り回す。白井へ向けてそれを振り下ろし、押し潰すように直撃する。轟！ という凄まじい音とともに、白井が座っていた廃車の破片が四方八方に飛び散る。破片に当たっただけでも重傷を負いそうであった。

ところが、廃車の残骸には血痕が一つも残されていない。

いくら車を木端微塵に破壊する一撃だとしても、肉体の一部は残

るハズだ。そうなると白井は直撃の寸前に空間移動を行い、多節棍の槍を回避したのだろう。

しかし、白井がその手を使ったのは二度目だ。

「おおオらああっ！」

赤髪の少女が再び多節棍の槍を振り回す。今度は空中へ向けてそれを放った。

理由は単純、そこに白井黒子の姿があったからだ。構えを見る限り、どうやら白井は後頭部へドロップキックをし掛け、地面へ無理やり押し倒そうとしていたようだ。赤髪の少女は特別白井を狙っては振り回さず、あくまでドロップキックを防ごうと、がむしゃらに多節棍の槍を振り回す。

「甘いすわ！」

避けようのない状況であるにも関わらず、白井に多節棍の槍は当たらない。白井は空中で空間移動を行うことにより、多節棍の槍の直撃を回避したのである。

離れた位置に白井が現れた瞬間、白井は両手を交差させる。スカーフトが少しだけ捲れ上がった際に赤髪の少女が見た物は、大股に潜めてある大量の鉄矢があった。

素人なら見逃してしまうレベルだが、赤髪の少女は決してそれを見逃さない。

「チャラチャラ踊ってんじゃねえよスノロ！」

赤髪の少女が持つ多節棍の槍が一直線に伸び、白井の懐へと飛び込む。白井は大量の鉄矢を空間移動させようとしている最中で、ほんの僅かに隙が出来ていたのだ。

赤髪の少女はそれを見逃さず、その隙を突くように槍を放つ。ぐるり、と多節棍の槍が白井の周りを渦巻きながら、次第に白井へ迫っていく、

「あ、ぐあっ！」

まるで鎖のように、多節棍の槍が白井の体に巻き付いてくる。ぎゅう、と骨が碎けるほどの勢いで締め付けられ、白井はその苦しみに思わず表情を歪める。

鉄矢を放たれてからでは遅いが、空間移動にはタイムラグが存在する。

赤髪の少女は僅かな時間でそれに気づき、座標を指定する前に攻撃を実行。まさに0.1秒にも満たない無防備な瞬間を突き、白井を行動不能へと追い込んだのだ。

赤髪の少女は白井を巻いた多節棍の槍を振り回す。その近くには建物の壁。そこに直撃する寸前に多節棍の槍から白井を解放したが、慣性が働いている白井の体はそのまま突き進み、白井は背中を建物の壁に強打してしまった。

「……………あ、ぐっ！」

地面に落ち、仰向け状態だった白井の腹部に、赤髪の少女の足が下ろされた。

ドス！ という鈍い音が炸裂。メリメリという嫌な音が白井の耳に入ってくる。

「容赦はしねえよ。下手に動ける状態にしておくと、反撃を受けちゃうしね」

「ま、さか……………隙を突かれるとは、想定外でしたわね」



「想定外を常に想定しておくのがプロってヤツだよ。確か風紀委員ジャッジメントだったっけ？ 風紀委員はトーシロを戦闘員にしてのね？」

「随分……調子に乗っていますわね」

「調子に乗って負けたのはアンタでしょ？ アタシをシメンならもつと経験を積みよ。アンタ、実力はあるみたいだけど、経験不足のトーシロがアタシに勝てるわけないよねえ？」

この時、ようやく白井は気付いたのだ。

相手はプロであると。

これまで白井は風紀委員ジャッジメントの治安維持活動で、様々な無能力者レベルの不良や能力者と渡り合ってきた。

ソイツらの中には目の前の赤髪の少女よりも、派手で強力な技を使う者もあり、正直能力的には目の前の少女よりも強かったであろう。それでも白井は勝つことが出来た。

だが、自分を踏んづける少女は違う。

能力的には白井のほうが上なのに、それでも白井は負けてしまったのだ。

「どうよ、今回は引き下がってくれない？ でなきゃアンタを殺すけど？」

言いながら、赤髪の少女は形状を元の肩に戻した槍を、白井の首筋へ突きつける。

差は1ミリ。

少しでも白井が動いたり、少女が槍を進めれば白井の首に刃が突き刺さる。

まさに、死の寸前だ。

「ふっ」

しかし、白井は口元を歪ませて静かに、薄く笑みを浮かべた。

「あなたのほうこそ、現実を甘くしておりませんか？」

「……な、に？」

白井は首だけを動かし、左を向いている。赤髪の少女は左方向を鋭く睨みつける。所々にゴミや廃品が散乱している狭い路地だが、大体10メートルほど離れたあたりだろう。

そこに。その先に、

どこかの制服を着た、肩まである茶色い髪の少女が立っていた。

見た所、白井と同じ学校の生徒のようだ。灰色のプリーツスカートに、半袖はんそでのブラウスにサマーセーターという格好は、白井の服装と全く同一のものである。

背丈や雰囲気からおそらく、赤髪の少女や黒子と同年代。茶色い髪が揺れる度に青白い火花が発生しているあたり、彼女も白井と同じ能力者のようである。

キン、という小さな金属音。

少女の親指が、一枚のコインを弾いた音である。ゆっくりとコインは頭上を舞い、ひらひらとゆっくり指先へ落下してゆく。

「アンタさあ、一つ文句だけ言ってもいいかしら？」

少女が言うと、丁度落下してきたコインが親指に乗った。

「私の知り合いに手え出してんじゃないわよ!」

瞬間。

音はなく、いきなりオレンジ色の眩い閃光が、赤髪の少女の顔のすぐ横を突き抜けた。

その閃光は全体に行き渡るものではなく、どちらかと言えばレーザー光線。細いオレンジ色の光が一直線に伸びて、凄まじい轟音が炸裂する。あまりの速さに、雷がどこかに落下したかのように一瞬遅れて轟音が響く。さらにその直後、背後からも凄まじい轟音が聞こえてきた。

恐る恐る、赤髪の少女は後方を確認する。

アスファルトに一直線の深い傷がある。その傷を確認した直後、今度は先程の光線の余波みたいな烈風が巻き起こり、赤髪の少女は生温かい風の感触を感じていた。

「お姉様!」

「待たせたわね黒子。やっぱり来ておいてよかったわ」

「な、なんだ……アイツ?」

赤髪の少女は後退りをしながら、突然現れた少女のことを睨み付ける。ただし、その表情には一切の余裕がないように見える。先程とは違い 震えているような気もした。

「あら、ひょっとしてあなた、知らないで学園都市に侵入しましたの?」

「ど、どつという意味だっ」

「超電磁砲レールガン、御坂美琴みさかみことお姉様。常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫  
ですの」

そう、彼女こそが超能力者レベル5の第3位 超電磁砲レールガンこと御坂美琴みさかみことで  
ある。

赤髪の少女は絶句している。  
超電磁砲レールガンのあまりの凄まじさに 言葉さえ思い浮かばなかった  
ようだ

「さて、観念したほうが身のためですわよ？」

赤髪の少女は後退りをしていた為か、白井はいつの間にか自由の  
身であった。白井は言いながら立ち上がり、鉄矢を構えてニヤリを  
笑った。

その横で電撃姫 御坂美琴も能力使用に備えて構えている。

「チッ、ウゼエ……超ウゼエ！」

だが、その時 槍を变形させた赤髪の少女が、多節棍の槍を勢  
いよく振り下ろした。

白井と美琴は構えるが、多節棍の槍が狙ったのは2人ではない  
地面である。

アスファルトを砕かれた事により、狭い路地に粉塵が立ち込め視  
界が遮られる。

「うっ！」

「な、なにを企んでいますの!？」

目を守るように、2人は腕を上げて目を覆い隠した。やがて粉塵

は風に流され、どこかへ消えて行ったのだが、次に2人が目を開けた時には。

「……いないわね」

「どうやら、わたくし達が視界を奪われている間に　逃走を図ったみたいですよ」

赤い髪の、不思議な槍を持つ謎の少女。結局、彼女は何の為に学園都市へ侵入し、何の為に白井と戦ったのであるうか。今の白井と美琴には、それが全く理解できなかった……。

彼女達はその後、警備員や応援の風紀委員ジャッジメントが到着するまで、しばらく学園都市の路地裏から青い空を眺め続けていた。

SGB

「チツ、風紀委員ジャッジメントの方はともかく、御坂ってのはヤバいわね」

戦線離脱に成功した赤髪の少女は、ビルの上から学園都市を眺めている。気持ちのいい風が吹きつけてくるなか、彼女は先程の御坂美琴という少女の事を思い出していた。

彼女の戦闘力は普通ではない。今まで戦った魔女より強いかもしれない。

彼女　佐倉杏子さいくらあけこは素直にそう感じていた。

「まっ、学園都市のグリーンフィードは手に入ったし、もうここには

用なしさ」

御坂美琴も気になるが、今の彼女には目的が存在している。

「次は マミのヤツが居る場所に行くか」

その目的を果たすため、杏子は再び飛び立った。

## 第6話 頭の中に響くような……

その後の暁美ほむらはすごいの一音であった。

先生に当てられても、どんなに難しい数式でも簡単に解いてしま  
い、体育の時間では体育教師に「県内記録じゃないの？」と言われ  
るほど、凄まじい身体能力をご披露。

もはや、彼女は注目の的となっており、周囲には必ず女子の黄色  
い声。一方男子も彼女の美しい外見に見惚れており、早速惚れちゃ  
いましたと言っヤツもいるらしい。

そんな完璧超人、暁美ほむらだが……。  
何故か、さつきからまどかばかりをチラ見しているのだ。

放課後、まどか達は人々で賑わうショッピングモールへ向かい、  
そこにあるお店でポテトとジュースを頼み、男子禁制のガールズト  
ークを展開している……と思いきや、

「ええ！？ なにそれ、ちょ……つまどか！ マジでなにそれっ！」

「笑い過ぎですわ、さやかさん……」

「言っんじゃなかった……」

胸を押さえながら大声で笑うさやかに、仁美も呆れ返っている。  
まどかは完全に脱力しており、頼りない腕を伸ばしながら呟いて  
いる。

「文武両道で才色兼備かと思いきや、実はサイコな電波さん！ く  
うう、そういう電波な子は学園都市だけで十分だっつーのぉー！」

「さやかちゃん、学園都市を知ってるの？」

「えっ？ 一応超能力者がいるって話は聞いたことあるけど？」

「学園都市ですかあ、私もお話程度になら聞いたことがありますわ」

「仁美はアレだよな。絶対超能力者だったら常盤台にいそうだよな」

「常盤台？ さやかちゃん、常盤台中学のことまで知ってるの？」

「ええ〜常識じゃん。確かに学園都市の情報って、見滝原にいたらあんまり入ってこないけど、それでも常盤台とか長点上幾ながてんじょうきとか、有名どころの学校はネットで検索すれば出てくるんだよねえ〜」

「さやかさん……もしかして、学園都市に憧れていますの？」

「ないない、と首を振るさやか。」

しかし、学園都市は自分達の知らない世界な上に、超能力を扱うほどの科学技術が存在するというのだから、当然日用品や医療技術も進んでいるはずだ。

もしかすると とさやかは心の中でとある期待を膨らませていた。

その期待が何なのか、まどか達には恐らくわからないだろうが……。

「ていうか、なんでまどかが学園都市や常盤台の事を知ってるの？」

「そうですね、一番知らなそうでしたのに」





「ぬがあああつ！ 許さん、その類人猿は許さん！ まどかはあたしの嫁になるのだー！」

さやかはテーブルに額を何度も、釘を打つように打ちつけている。これではまるで、どこぞの空間移動能力者テレポーターと全く同じである。

仁美はそんなさやかに苦笑いを向けた後、意識をまどかのほうへと向けて、

「まどかさんは、その殿方が好きですか？」

「ちちちち違うよ！ と、当麻お兄ちゃんはその、お、幼馴染とどうかお兄ちゃんみたいなものというか、はわわわっ」

「ああああ、べた惚れみたいですよ」

その時だった。

ぐわん、と、さやかが瞳を星のように輝かせ、両手を手長猿のように伸ばし、まどかの肩をガシリと力強く掴んだ。あまりの迫力と、さやかの腕力にまどかは圧倒される。

「今週、まどかの家でガールズトークだあ！」

「さ、さやかちゃん！？ わ、私の家は、その……」

「なあにい！ そうか、まどかはもうウワサの当麻さんと同棲している仲なのかあ！」

「ち、違うよ！ あ、合ってるけど違うよ……」

「あの、私そろそろ習い事があるので、行ってもよろしいでしょうか……？」

仁美は本当に慌てた様子で、突っ込み難い状況に突っ込んで用件を言う。そこでまどかとさやかは動作が停止し、2人はコクリと首を縦に振ったのであった。

一方、他のお客さんはそんな三人を　迷惑そうな顔で睨んでいた。

その後、店を出たまどかとさやかは2人で肩を並べ、人々で溢れかえり、大変賑わっているショッピングモールを歩いている。これから帰るのかな、とまどかが思ったその時だった。

「あ、まどか。帰りにCD屋寄ってもいい？」

「いいよ、また上条君の？」

上条。

まどかにとってもピンと来る名字だが、それはさやかにとっても同じである。

ただし、どうも当麻という人物とは別人のようだが……。

「まあね」

なんだか嬉しそうな表情を浮かべ、さやかはそう答える。その後、2人はCDを買う為にいわゆる【いつもの場所】へと向かったのであった。

さやかの言う、上条と言う人物の為に　。

SGB

ここは何処か、真っ暗で細い空間。

所々に自転車や箱があり、それを避けて行く謎の生命体がいる。それは白く、小さくてマスコットののような生命体だ。何という種類の、なんて名前の動物でどういう習性を持つか、おそらく現代の学者でも説明できないであろう生命体は、何かから必死に逃げている様子である。

狭い道を、息を切らしながら四つの脚で必死に走り続けている。

「……ッ……ッ！」

ピンク色に輝いている、光の弾が白い生命体の命を脅かす。白い生命体は、後方を確認しながら確実に攻撃を回避していった。だが、次第に攻撃は激化してゆく。

やがて全てを避けきれず、白い生命体は一発だけ被弾してしまっ

た。被弾した生命体は、砂埃を立てて硬い床をゴロゴロと、投げ出すように転がる。それでも必死に逃げようと、まるで命を危機を感じているように、再び立ち上がって走りだす。白い生命体は暗闇の中に紛れたが、それを追う存在なのだろうか……新たな人影が現れた。それは長い髪の、スカートを穿いている……女の子のようである。少女と思われる人影も、黒い髪を靡かせながら暗闇の奥へと突き進んだ。

それも、人外の速さで。

SGB

まどかとさやかは【いつもの場所】へたどり着くと、早速CD選  
びを開始する。元々まどかは買う気はなかったのだが、こう言う所  
に来ると無性に音楽を聞きたくなるのは、ひよっとすると人間の本  
能なのかもしれない。彼女もさやかと同様、視聴用のヘッドホンを  
装着する。

ヘッドホンから聞こえる音楽は、次第にまどかのテンションを上  
げていく。

につこりと、笑顔になりながら、気付けば頭部が上下に動いてい  
た。

『たすけて……ッ』

「……っ?」

その時、どう考えても音楽とは思えない音声が聞こえてきた。耳  
に聞こえた、というよりは脳に直接聞かされたと言っ感じた。いま  
でに聞いたことのないタイプの音声である。

まどかはヘッドホンの不調か、と思ってヘッドホンを取り外す。  
声は……聞こえない。

やはりヘッドホンの不調であったか、と、再びヘッドホンを装着  
しようとした、

『助けて……まどかッ!』

「……っ!」

瞬間、再び同じ声が、さっきよりもハッキリと聞こえてきた。し  
かも、今度はその声で自分の名前を呼ばれたのだ。まどかはヘッド

ホンを戻すと、思わず振り返って周囲を見回す。

さやか……ではない。そもそも、まどかの周囲にはあまり人がいない。殆どの人々はCD選びに夢中になっているか、さやかのよう  
に音楽視聴中である。

声をかけているとは思えない……。

まどかは不安げに迷っていた。

『僕を……助けて……ッ！』

なんとなく、その声が何処から聞こえてきたか……わかったの  
よ気がした。

助けに行くべきか行かぬべきか、そもそも声の主は誰なのか。ま  
どかは迷いながらも無意識に足を進めていた。そんなまどかに気付  
いたさやかは、不思議そうにまどかを見つめ、

「……まどか？」

S G B

上条当麻は今日も絶賛不幸であった。

宿題がない事に気づき、絶望していた上条を気遣おうと、インデ  
ックスはとりあえず見滝原を歩くことを提案し、そんな流れで2人  
はショッピングモールを訪れた。しかし、沢山のお店が並ぶショッ  
ピングモールは、まさに暴飲暴食シスターにとっては禁断の場所  
である。

ハンバーガーにアイスクリーム、パフェなど、美味しそうなもの  
が沢山。

その光景を目にした瞬間、インデックスの腹の虫が大地の怒りの

よくに鳴り続け、

「で、テメエは俺の財布が空になるまで食いやがったと……?」

「おいしかったよ、とうま!」

「ふっざけんな! テメエはアレか、俺を財布だと思ってるんですか!?」

「とうまもおいしかったよね?」

「それはそうだけど……じゃなくて! テメエ、今月一切の余裕がねえの知ってんだろ! 2人分の食費に入院費にその他諸々……ああもう、上条さんの今後の生活はどうなっちゃうんでせう!??」

基本的に学園都市は奨学金制度が充実しており、生徒たちの生活も、殆ど前述の奨学金や保証金などで賄える賄えるようになってい。当然、レベルによって金額の差は生じ、例えば超能力者<sup>レベル5</sup>と無能力者<sup>レベル0</sup>では貰える額に相当の差がある。

それでも一応、普通に生活していれば無能力者<sup>レベル0</sup>でも生活には困らない。

だが、上条家は事情が違う。

インデックスという、大食いな上に収入0のニートシスターが居候している上に、上条自身もしょっちゅうトラブルに巻き込まれ、入院する為に出費が普通よりも激しいのである。

もし上条が超能力者<sup>レベル5</sup>の能力者であれば、苦勞はしないだろう。しかし、あまりお金を貰えない無能力者<sup>レベル0</sup>となると話は別。

上条家は今 自己破産の危機にあるのだ。

「とうま、そんなにイライラしていたら体に悪いんだよ。もっと落

ちついで、楽にすればいいと思うんだよ」

インデックスは上条を気遣い、上条の頭に手を置き、優しい言葉をかけるのだが、

(お前にだけは言われたくない！)

渾身の突っ込みを、心の中で言い放った。実際に叫びたい気持ちはあったが、それを言うとは噛みつかれる可能性がある為、ここは仕方なく 心の中で我慢した結果だ。

上条がはあ、とため息をついた、

その時。

一瞬、桃色の髪をツインテールに結んだ、見覚えのある制服を着た少女が、上条とインデックスの前方10メートル付近を横切った。

「ん、まどか？」

上条の知る限り、その人物は鹿目まどか。

現在お世話になっている家の長女であり、自分の幼馴染を名乗る少女だ。

「間違いないんだよ。あの子はまどかなんだよ」

インデックスがそう言うなら、間違いなくまどかだろうと上条は思う。インデックスは眼に映る全ての物を完全に記憶してしまう『完全記憶能力』という特異体質を持ち、その名が示すように世界中のありとあらゆる魔道書・邪本悪書103000冊をその頭に記憶している……らしい。

最も、上条は記憶喪失なので、全部後から知った事なのだが。

とにかくも人影はまどかだと分かったが……その挙動が不審であ



った。

「なんだか違和感があったね」

「ああ、行ってみる……か？」

「うん」

あまり女子中学生の後をつけたくはないが、それでもまどかが気になったので、上条とインデックスはまどかの後を追うことにした。そこまで急いでいる感じではないので、おそらくすぐに追いつけるだろう。

2人は気配を察知されないよう、身長にまどかの後を追った。

第6話 頭の中に響くような……（後書き）

どうも、作者の作戦参謀です！

まだまだマガ1話の内容終わってないよ……展開遅すぎるでしょう  
か？

さて、次回から【多分】、上条さん達が一連の騒動に深く関わって  
いく予定です！

## 第7話 魔女

時を同じくして、上条やまどか達が訪れていたシヨッピングモールの裏側を、ステイル<sup>II</sup>マグヌスがルーンを刻んだカードを右手に持ち、何やら焦った様子で走っている。

元々、魔術に特化した彼は身体能力が低く、走るのも不得意だと言うのに。

(くっ、僕とした事が……まさか魔女だけを逃がしてしまうとはね)

<sup>インケンテイウス</sup> 魔女狩りの追うを用いて戦っていたステイル。使い魔こそ瞬時に倒して見せたが、肝心の魔女という存在を取り逃がしてしまい、その為彼は慌てているのである。

一刻も早く魔女を退治しなければ この世に大きな災いを齎<sup>もたら</sup>す可能性がある。

そこにかつて、ステイルが淡い想いを抱いたあの子が巻き込まれる可能性がある。

意地でも魔女を退治しなければ。そんな使命感だけが今の彼を動かしていた。

「……ッ!？」

何者かの気配を感じ、ステイルはその足を止めた。

自分の数十メートル先に、制服のようだが微妙に違う服装の少女が佇んでいる。

ステイルは彼女が誰か分かった途端に眉をひそめる。

「君は確か、<sup>……</sup>暁美ほむらだったね」

「ステイル」マグヌス、イギリス清教の魔術師ね」

「僕に何か用かい？ それとも、君も魔女狩りを手伝ってくれるのか？」

「それもやる。でも、私にはもつと重要な役目がある」

「重要な役目、ね……」

ステイルは啞えていた煙草を床に投げ捨てる。だが、それでお終いというわけではなく、彼は服の裏側から新たな煙草を取り出す。ライターで煙草に火を灯し、再びそれを吸い始めた。神父とは思えないほどのヘビースモーカーな彼を見て、ほむらもあからさまに嫌そうな表情を浮かべた。

「あなた、余程煙草が好きなのね」

「君も吸いたければ一本あげるよ。ただし20円戴くよ。この煙草1箱400円だからね」

「いらないわ、私には必要ない」

「そうかい、それじゃあ僕は魔女狩りを続けるけど？」

「その必要は無いわ」

感情が全く籠められていない、無表情な彼女に言われた一言。その言葉が耳に入り、ステイルは苛立ち始めていた。

「もうあの魔女はかなりの帰還逃走し続けているんだ」

「知ってるわ」

「だったら、もっと危機感を持って欲しいね。君は魔女を甘く見過ぎだ、素人の魔法少女が」

「魔女の恐ろしさは知ってるわ。この身を何度も犠牲にしてね」

「だったら君は　ッ」

「大丈夫。この地区に、もう一人の魔法少女が潜入したわ。あなたは万が一に備えて、外周でルーンの準備をしていて欲しいわ」

自分はこれでもプロであり、素人の魔法少女に指示をされる事。何より、あの子の為に倒す魔女を魔法少女何かに横取りされる事が、ステイルはどうしても納得が出来なかった。

だが、確かに魔女が再び逃げる可能性はある。

魔法少女が取り逃がした魔女を殺すのも、重要な役目である。

「全く、君は僕をイラつかせるのが得意みたいだね」

「単に怒っているは何も始まらない。私はそろそろ行くわ」

そう言い残すと、彼に背を向けたほむらが暗闇の中に姿を消す。取り残された彼は、不機嫌そうに齒軋りをしながら、

「アークヒショップ最大主教……魔法少女と手を組む選択は本当に正しかったのか？」

彼はただただ悔しそうに　誰にも届かないであろう文句を呟いていた。

鹿目まどかは『関係者以外立ち入り禁止』と貼られた扉を超えた。シヨツピングモールの裏は薄暗く、人気もなくて不気味だ。一步表へ出れば見滝原でも有数の賑わいを見せていると言うのに、裏に潜るとまるで廃墟のように静かである。まどかは「助けて」という謎の声を聞き、その声の主を探すためだけに　ひたすら人気のない店の裏を歩く。

『助けて！』

再び、まどかの脳に直接声が響いてくる。

その声はさつきよりも大きく、ハッキリとしていた。

(声が近くなってきている)

それは紛れもない事実、決して彼女の錯覚などではない。それを確信し、近くに声の主がいると思ったまどかは、小走りで不気味な空間を奥へ奥へと進む。

「どこにいるの!？」

腹から大きな声で叫んだ　刹那。

ガラッ! と、彼女の頭上から嫌な金属音が響いてくる。

小さな天井のカスが降り注ぎ、恐怖のあまりまどかは2、3歩後退りする。

「きゃああつ！」

次の瞬間、天井から金属の板のようなものが落下してきた。突然の不意打ちと恐怖、そして板と一緒に落下してきた白い何かを見て、まどかは腰を抜かして床に尻餅をついた。

それでも、恐る恐る目を開けると　眼前にボロボロの生物が横たわっていた。

「……………あつ！」

まどかは咄嗟に前へ飛び出し、白い生物を抱きかかえる。相当の重傷だ。具体的になんという種類の生き物かは説明がつかないが、その生き物は全身にひどい怪我を負っており、あまりの苦しさから呼吸まで荒々しい。抱きかかえただけで、ベタリと鮮血が体に染みしてきた。

それでも構わず、まどかは必死に白い生き物を抱きかかえて、

「あなたなの!？」

『たす、けて……………っ』

どうやらこの子のようだ、とまどかは確信する。生き物に口というパーツはなく、代わりに生き物のものと思われる声が脳に直接入ってくる。

と、その時。

ジャリジャリ、という異音が響き渡り　天井から鎖のようなものが落下してきた。

「……………ッ！」

恐怖もあるが、負傷している生き物を守ろうと、まどかは咄嗟に身を屈める……。

が、鎖はまどかに命中せず、ウネウネと曲がりながら床に落ちていた。

さらに目を開けると 信じられない光景がまどかの瞳に映り込んだ。

「ほむら、ちゃん……?」

それは見滝原のものとは違う、制服のような……でも、どちらかと言えば、日曜早期のアニメでやっている魔法少女モノのコスプレのような、不思議な服装の暁美ほむらの姿。

左足で緑色の何かを踏みつけ、冷たい視線でまどかと、彼女が抱える生き物を睨む。

「そいつから離れて」

「え、えと……だって、この子怪我して……っ」

その時、ようやくまどかは気付いたのだ。

この生き物を怪我させたのは 暁美ほむらであると、それに気付いた瞬間、まどかは生き物を庇う様に体を屈めて、

「だ、ダメだよ！ ひどいことしないで！」

「あなたには関係ない」

と言いながら、ほむらは静かにこちらへ向かってくる。

「だってこの子、私を呼んでた！ 聞こえたんだもん、助けてって



「！」

「そっ……」

必死の叫びであったにも拘わらず、ほむらの返事は素っ気ない一言であった。

その後ほむらは無言で、妙に威圧的な雰囲気放ちながらまどかを睨み続ける。

まどかの体が震えていくのがわかる。嫌な汗も同時に噴き出てきた。

「……ッ！」

その時、ほむらに白煙のようなものが吹きつけられる。正確には白煙ではなく、それは炭酸水素ナトリウムの薬剤。おそらく、消火器の中に入っている粉末の消火薬剤だ。

「まどか、こっち！」

消火薬剤が噴射されている方向から、少女の声が響いてきた。振り向くと、そこにはABC粉末消火器を構え、ほむらに向かって噴射している。美樹さやかの姿が瞳に映った。

実は、さやかはまどかの行動に気づいており、先程から後をつけていたらしい。彼女はまどかがコスプレ変質者のほむらに絡まれていると思い、そこでたまたま近くにあった消火器へ手を伸ばし、まどか救出の為に粉末薬剤入りの消火器でほむらを攻撃したのだ。

「く……ッ！」

「さやかちゃん！」

ほむらは視界を奪われ、怯んでいる。  
逃げるなら確かに今のうちである。

まどかは白い生き物を抱きかかえ、消火器を捨てたさやかの後を追った。

「くっ……逃げさ　ッ!？」

まどか達を追いかけようと、構えたほむらであったが　その時  
異変が発生する。

蝶にもリボンにも見えるモノが視界に移り、世界が明らかに一変  
したのだ。

やがて、ほむらの眼前に　幻想的な工場みたいな風景が広がっ  
た。

「こんな時に……相手にしている場合じゃないのにッ！」

こんな事になるのなら、ステイルも一緒に連れてくるべきだった  
と、ほむらは若干の後悔を感じながら空間の奥を睨み付ける。彼女  
には強い信念があり、それを諦めるつもりはない。

目的を果たすべく　暁美ほむらは次の行動へと移った。

S G B

鹿目まどかと美樹さやかは、不気味な赤い光が灯る廊下を全力疾  
走していた。早くこの場から逃げ出したい、早くここから逃げなけ  
ればという気持ちで彼女達を支配する。



ているのは幻想的な不思議すぎる空間である。それはあまりにも奇抜だが、一言で表せば夜道よりも不気味であった。

さらに感じたのは不気味な気配。

それは人間のものとも違う。感じただけで背筋の凍るものであった。

「な、何かいる……っ!？」

「へ、なにこれ……冗談でしょ!？」

ケラケラと割らす、毛玉に髭の生えた異形の生物。それはまどか達が知っている生き物とは全く違うと言うより、この世に存在するハズのない生物に見えた。簡単に表現すれば化け物、まどか達は化け物を見ていた。見渡せば彼女達を包囲するように。全方向に化け物が沸いている。

カイゼル髭を生やした化け物が、揃って左右に揺れている。

そんな中、ジャキジャキという音が聞こえてきた。

「じよ、冗談だよね……あたし、悪い夢でも見てるんだよね？ ねえ、まどか!」

思う様に動かない。身を寄せて、時々叫ぶのが精一杯。

恐怖で体が動かず、逃げる事さえ困難だ。

そんな中 ジャキジャキと、彼女達の頭上でハサミが鎖を髪の毛感覚で切っている。

やがて鎖は真っ二つに切断され 二人の頭を狙って落下してきた。

「……ッ!」

思わず目を閉じる、2人は死を確信した。  
それでも、こんなに醜く悲惨な現実でも　　まだまだ救いと希望  
は残っていた。

「鎖を交差<sup>CN</sup>、衝撃は吸収<sup>SA</sup>、人命を優先する<sup>GPL</sup>」

少女の声。

まどかでもさやかでもない　　第3者の声が聞こえた。

瞬間、2人を押し潰そうとしていた鎖が空中で交差し、2人を避けるように、殆ど金属音や衝撃もなく地面へ落下する。鎖はこの空間でありえない動きをしたのだ。

「た、助かったの……？」

「ま、まだ！　また来るよ　　まどか！」

殆どの鎖は今の言葉によって軌道が変わった。2人はどこも怪我せず済んだのだが、一本だけ鎖が2人の脳天を狙い、ウネウネと重力に任せながら落下してくる。

「お、おおおおッ！　まどかアアアああああああああああ  
ッ！」

まどかにとっては聞き慣れた、さやかにとっては初めて聞く、少年の声が耳に届いた。

その声は彼女達の後方から。絶叫にも聞こえる声と同時に聞こえる、全力疾走をしているのが分かるテンポの早い足音。2人は体ごと後ろへ振り返り、走ってくる少年の姿を確認する。

向かって来ているのは、中肉中背でツンツンした黒髪の少年。

まどかはその少年の名前を知っている。

こんな時に助けに来てくれる　ヒーローのような少年の名を。

「当麻お兄ちゃん！」

「は、はあ？　とうま……？」

嬉しそうなまどかの叫ぶ、当麻と言う人物。

その人物を知らないさやかは、若干肩から力が抜けて呆れているようだが……。

次の瞬間、まどか達を助ける為に駆けてきた少年が大きく跳躍し

ドゴン！！　と、拳と鎖が衝突した。

鎖が完全に碎け散る。それは少年の腕力によるものではなく、少年の右手に宿る、不思議な力が効果を発揮したからだ。

まどか達の前に右腕を上げ、立ち続ける少年。

その少年の横にもう一人　真っ白い修道服を着ている銀髪の少女が並んだ。

「当麻お兄ちゃんに……インデックスさん！」

上条当麻とインデックス。

街中で偶然まどかを見かけた2人は、まどかの後を追ってここまでやってきたのだ。

「危ない所だったね。私も最初はわけがわからなかったんだよ」

「い、インデックスさん……」

「えっ？　ちょ、なに……コイツら？」

「でも大丈夫なんだよ。ここからは私ととうまに任せて」

さやかにとつては謎の2人が現れ、さやかが困惑している中  
まどかにとつては最後の希望である上条とインデックスが、2人を  
守るように2人の前にて戦闘態勢に入る。

「インデックス、お前も戦えるのか？」

「私には魔術は使えない。でも、術式を仕掛ける頭脳がある以上  
私の強制詠唱スベルインタイセラトで割り込めるんだよ」

「インデックス……」

「とうま、後衛は任せて欲しいんだよ」

「……わかった、行くぞ　インデックス！」

「うん！」

魔女に襲われたまどかとさやか。

その2人を助けに来た上条当麻とインデックス。

2人はまどか達を救うために　未知の敵へ戦いを挑む。

## 第7話 魔女（後書き）

後書き

どうも、作者の作戦参謀です！

行こうと思っていた所までいかなかった……。

そしてインデックスの強制詠唱スベルインターセプトですが、ノタリコンが分からないから難しいです……。

次回！多分あのお方登場です！



## 第8話 強制詠唱

奇妙なメルヘン空間に、真ん丸い毛玉に髭の生えた不気味な化け物に囲まれ、上条当麻とインデックスは異形の生命体の様子を窺っている。まどかやさやかに戦闘能力はない。この状況下で頼れるのは2人の実力のみだろう。しかし、上条は心の奥で不安を覚えていた。

(前にもコイツらとは戦った事があるけど、右手で全部は消し切れない)

考えながら、上条は五本の指を限界まで握り締める。痛々しい関節の音と、ギリギリという皮膚が締め付けられる音が響いた。獲物を捕える猟犬のように、上条は化け物を睨み付ける。

(後ろはインデックスに任せて、一気に突っ込んでみるか?)

タツ、と、左足を一步前へ踏みつける。

殆ど同時にケラケラと笑う異形の生命体が、何十も一気に上条へ迫る。

上条が立てた足音が開戦の合図だったらしい。

「ぐああっ!」

その瞬間、焦燥に駆られた上条も走り始め、叫びながら右手を突き出す。多くの毛玉は上空へ舞うなどして、上条の拳を回避したが、毛玉の一体と上条の拳が僅かに接触する。

瞬間、拳で叩き付けた毛玉の化け物は、形を崩して四散した。

それが異能の力であれば、何であろうと打ち消してしまう、彼の

右手に宿る幻想殺イマジンプレイカーがその効果を遺憾なく発揮したのだ。

(やっぱり右手コイツで打ち消せる。なら、恐れる事はねえ！)

自信をつけた上条が駆け始めると、化け物たちは上条を押し潰すべく、空中で集合して大きな毛玉を形成する。それが上条目かけて重力任せに落下してきた。

思わず、上条の足がそこで止まる。同時に嫌な汗が全身から噴き出てくる。

「毛玉APを四散、左方CTLへ変更、下方SITGへ降下し地中TDDDへ沈め」

だが、毛玉の集合体はいきなり四散して、その上不自然な軌道を描いて、上条やまどか達をつまく避けながら地面へ叩きつけられた。叩きつけられた毛玉が再び浮き上がり、続けてターゲットをインデックに変更。インデックスを押し潰す為だけに再び集合する。

「集合DCを中止、右方TTRへ歪曲せよ」

やはり毛玉の動きはインデックススベルインターセプトの強制詠唱により、強制的に変更される。彼女の口から放たれたノタリコンは、毛玉が上条達へ攻撃する事を許さない。

「この毛玉はおそらく使い魔。毛玉を操る術者は魔女。紀元前から続く、人間の絶望や呪いから勝手に組み立ててしまう悲しみゆ憎しみの術式だね」

10万3000冊もの原点を脳内に抱えるインデックスは、その豊富な魔術知識によって敵の扱う魔術、それに必要な術式、零装、儀式場など、一度目で見ただけで理解する事が出来るという脅威的

な頭脳を持つ。その原点全てに触れれば、魔術を極めた魔神に至る事すら出来るらしい。

だからこそ、彼女を狙う魔術師の数は多いのだ。

実際、彼女は魔法少女達の殆どが正体不明としてきた、目の前の使い魔や、それを操る魔女の仕組みなどを完全に理解していた。それはおそらく、彼女が脳に記憶している10万3000冊もの魔道書の中に、魔女に関する記述のある魔道書が存在していたのだろう。

「術式は魔女文字という、魔女固有の複雑怪奇な文字で組まれているね」

魔女文字という、誰もが聞いたことのない単語さえ、瞬時に頭に浮かんでくる。

それが、彼女がインデックスと呼ばれる所以であろう。

「とうま！ わかったんだよ！」

「お、ああつ！ な、なにがだよ!？」

バゴン！ と全体重を乗せた拳を毛玉に叩きつけ、毛玉を打ち消した上条は、上から何重にもなつて落下してくる鎖の大軍を、避けたり右手で打ち消しながらインデックスへ接近する。

「この毛玉達は魔女が操ってるんだよ」

「ま、魔女!？」

上条が呆れた。

今までの魔術師や錬金術師だって、本来なら理解し難い話なのだ。それが今回、どう考えてもおとぎ話や神話レベルのお話が、インデ

ツクスの口から放たれたのだ。

「絶望や呪いから生まれた異形の生命体だよ。多分、とうまの右手で触れたら打ち消せると思うんだよ」

「でっ、要はその魔女つてのを倒せばいいのか!？」

「毛玉を退ける為には、毛玉を全て排除するか、毛玉を操る核を倒すの二つの方法があるんだよ」

これほど多くの化け物を相手に戦えるハズがない。それは常識的な判断と、上条の路地裏での経験がそう脳に呼びかけている。インデックスが言うには、魔女を倒せば万事解決。それでこの毛玉達は消滅するらしい。それなら、上条が取る行動は一つしかない。

最も手っ取り早いかつ、勝率が高い方を選ぶ。

上条が選んだ選択は

「インデックス、テメエは大丈夫なのか？」

「私には使い魔を倒すことはできない。でも、スベルインターセプト強制詠唱で割り込む事はできるから、とうまが魔女を倒しに行く間の時間稼ぎは出来るかも」

だが、上条は一瞬躊躇った。

インデックスはまだか達を守りながら、なおかつ自分の身を守る必要があった。インデックスは他者への干渉など、その類のものであればある程度は行える。しかし、ちょっとした事情で生命力を練って魔力を作れない為、彼女は魔術というものを使う事が出来ない。そんな状況下で、まだか達を守りながら戦うのは、か魔女にとっても厳しい事だろう。

だが、彼女は真剣な目で上条を見つめている。  
「ここは私に任せて、私を心配せずに魔女を倒して、と言わんばかりに。」

「わかった。まどか達を頼んだぜ」

「とうまも、無理はしないでね」

「それはお互い様だ！ 頼りにしてるぞ、インデックス！」

2人は別れを告げて、それぞれの道を走り始める。

共に鹿目まどかと美樹さやか、そしてまどかが抱える生き物を助ける為に。

S G B

上条当麻は全てを理解しきっているわけではないものの、インデックスが言う使い魔を操っている中核的な存在　魔女を倒すべく、一旦インデックス達と別れて、空間の奥へ突き進んだ。

何処まで進んでも幻想的な風景が広がり、重苦しい異様な雰囲気  
を放っている。黙っていればその圧力に負けてしまいそうな、ひどく  
重く哀しい空間だ。

そんな中、上条は必死に走っているが、複数の毛玉が上条を追っ  
て迫ってくる。

(くそ、やっぱり何匹か追ってきてやがった！)

そもそも上条は魔女がどんな存在なのか、どこにいるのかさえ分

かかっていない。居場所もわからない敵を倒すべく、その敵が操る使  
い魔とも交戦しつつ、先へ進まなければならぬ。

「ぐああ！」

咄嗟に振り返り、叫びながら硬く握り締めた右の拳を突き出した。  
バギン！ と、ガラスを鉄パイプで砕いたような音が炸裂し、毛玉  
は四方八方へ弾け、綿のようなものが飛び散る。

しかし、次に上条の瞳に映ったものは 迫りくる毛玉の大軍で  
あつた。

「が……あ……ッ！」

上条の左右へ毛玉が突進し、それだけで凄まじい衝撃が生じる。  
さらに、上条本人にも腹部に毛玉が突進し、彼を3メートル以上も  
後ろへ吹き飛ばす。それでも上条は持ち堪え、脚力をフルに使って  
立ち続けたのだ。咄嗟に右手を薙ぎ払うように振るい、自分の周囲  
の毛玉を打ち消した。

だが、たったそれだけの動作が上条を苦しめる。  
ズキツ、という腹部の鋭く、その直後に襲ってくる鈍い痛みが上  
条を苦しめる。

奥歯を噛み締め、思わず右の<sup>まいた</sup>瞼を力強く閉じてしまった。

(くそつ、数が多すぎる……相手にしきれねえ！)

右手で口から流れ出てくる血を拭い、再び毛玉達を睨み付ける。  
その数、一目見ただけでも軽く10は超えている。自分が置かれて  
いる状況は、インデックス達に比べれば遥かにマシなのかもしれない。  
いものの、上条はどこにでもいそうな、単なる高校生でしかない。  
路地裏で不良と喧嘩をするにしても、1対1なら勝てて、1対2

ならギリギリ、1対3なら迷わず逃げるといふ、その程度の腕前しか持っていないのだ。

『ケタケタケタケタ』

「ち、くしょおおおおおおおおおおおッ！」

半ばやけくそ気味に叫び、殆ど捨て身の突撃をし掛けた。これだけ数が多いと、考えながら戦った所で無駄弾に終わる可能性が高い。それなら、いつその事玉砕覚悟で突っ込んで、デタラメに戦ったほうが勝ち目はあるかもしれない。そう信じた上条は、思い切って突っ込んでみたのだ。

使い魔達はケタケタと、不気味な声をあげながら、上条へ再び突進を仕掛ける。

上条の右拳と、毛玉の大軍。その二つが衝突しあう、寸前に。

10匹全ての毛玉に小さな穴が開き、力を失った毛玉は地面へ落下する。

動かなくなった毛玉はやがて粉のように舞い上がって消滅した。

「な、んだ……？」

上条は思わず自分の右手を見つめるが、今のは右手が触れたからではない。殴った感触もその後味も感じず、そもそも毛玉に一瞬穴が開いたように見えた。

とてもじゃないが、上条の拳に貫通力があるとは思えない。

と、その時。

カツカツと、後ろから誰かが近付いてくるような足音が聞こえた。振り向けば、軽機関銃のような物を持った、長い黒髪の少女が佇んでいる。

「お前が……やったのか？」

「……」

少女は答えない。軽機関銃で武装した少女は、不思議な服装をしていた。黒のような紫とも言えるコスプレのような服装に、左腕には怪しげな盾が装備されていた。

上条が聞いても少女は答えず、黙って上条の事を見つめている。

「……ッ！」

しばらく上条を見つめた末、少女はとても人間とは思えない速度で、あるいは時間が飛んでしまったかのように、素早くこの場から離脱してしまった。

「お、おい！」

上条は呼びとめようとするも、その時、既に少女の姿は見えなくなっていた。

(なんだったんだ……今の?)

魔女か……とも思ったが、インデックスの話によると、魔女というヤツも使い魔と同じで人の形はしていないらしい。そもそも、さっきの少女は使い魔から自分を助けてくれた。

ひょっとして、あの子は味方なのだろうか、と上条は思う。それ



と同時に、上条の脳内にもう一つのことを思い浮かんだ。

(あつちは確か、インデックス達がいた所だよな……まさかッ!?)  
咄嗟に嫌な予感がした。

もしも、あの子が使い魔を倒す為に現れたのだとしたら、あの子が向かった先 インデックスやまどか達がいる場所に、魔女と呼ばれる存在が移動したのではないか。

ふと、そんな最悪の展開シナリオが頭に浮かんだのだ。

「くそっ！ インデックス、まどか！」

自分の考えが正しいかはわからないが、少女がそちらへ向かったと言う事は、何かが起きているはずである。少なくとも、少女の目的になる何かが存在しているはずである。

何かは知らないが、そこにヒントがあるかもしれない。

上条は少女の後を追い始めたのであった……。

S G B

上条当麻が去った後、インデックスは単身 まどか達を守りながら戦っていた。

彼女の口から放たれるノタリコン。アルファベットの頭文字のみ発音する事で、詠唱の暗号化と高速化を同時にこなす発音方法。それは確かにまどか達を守り切り、自分自身の身の安全さえ守っているのだが、いくらなんでも 言葉だけでは限界があった。

毛玉の数は減るところか増える一方。

いくら言葉で軌道を逸らしたりしても、毛玉を撃破するには至ら

ない。

即ち敵はどんどん増えていく。インデックスは叫べば叫ぶほど疲れてゆく。

「げほっ！ はあ、はあ……毛玉は右方へ、鎖を交差、逆方向へ進め」<sup>D</sup>

ぐわん、と毛玉の塊は右方へ逸れて、鎖は交差しながら逆方向へ落下する。落下し、地面へ叩きつけられたせいか、大量の砂埃が舞っているのがインデックスの目に見えている。

（まずいかも。長引けば長引くほど不利になる）

ジワジワと毛玉達が集まっていき、次の突進をし掛けようと様子を窺っている。大量の鎖も空中を舞っており、いつハサミで切り落とされるかわからない。

そんな恐怖からか、後ろでまどかが、居合わせた友達と大声で何かを話している。

「ま、まどか……ねえ、まどか！」

「な、なに。さやかちゃん？」

「ここから逃げよう。じゃないとあたしら死んじゃうって！」

「で、でも……当麻お兄ちゃんとインデックスさんは？」

「だから、あの人達が時間を稼いでいる間に　ッ！」

こんな状況でも恐れず逃げないのは、上条やインデックスなど、

特殊な環境に慣れているか余程根性があるか、あるいはただの馬鹿なのかのいずれかであろう。まどかやさやかはごく普通の女子中学生であり、こんな状況で怖いと思うのは当たり前前の事。

本能的に逃走を呼び掛け、すぐにでも走りだしたい気分であった……が、

「私から離れないで！」

その時、大きな叫び声がまどか達の耳に入ってきた。

まどかとさやかはびくん、と体を震わせる。不意に声をかけられたので、驚いてしまったのもあるのだが、それ以上に 逃げるな という命令に彼女達は反応したのである。

逃げるな。常識的に考えればありえない命令だ。

しかし、今はインデックスが術式に干渉し、制御を一時的に乗っ取っている。

それは即ち インデックスの傍が一番安全という事だ。

(でも、どうしよう。私もそろそろ限界かも)

何度も大きな声で叫び、時には鎖の攻撃を避ける為に動きまわっていた。そこらの女子高生にさえ腕相撲で負けそうな、華奢な体を持つ彼女には、あまりにも荷が重すぎたのだ。

喉の痛みと単純な体の疲れ。酸素を必要としても、肺がそれを受け付けられない。心臓が極限までバクバクと脈を打ち、それがまたとても苦しい。

(とうま……ッ)

彼女は願った。

祈りを奉げた。

救いと言つ名の祈りを、奇跡と言つ名の祈りを。

(私、信じてるんだよ。とうまが 魔女を倒してくれるって)

だけど、その祈りは届かない。

届くはずが無い。そう思った所で 上条当麻は単なる人間なのだから。

だが、その時 奇跡は起こった。

爆発的な何かが起こると、包み込む膜のようなものが、使い魔達を一気に吹き飛ばす。

呆然とするまどかとさやか。何が起こったのかを解析しようとするインデックス。

「あなた達、危ない所だったわね でももう大丈夫」

それは何処かの出入り口と思われる場所からだ。優しく、全てを抱擁し、それでもしつかりとしている少女の声が聞こえてきた。声と同時に足音が聞こえ、インデックスやまどか達の目には、そこから姿を現す金髪の少女が、落ちついた表情を浮かべながら近づいてくる。

「あら、キュウベえを助けてくれたのね」

少女は笑顔を浮かべて言いながら、まどかのほうへと近づいてくる。まどかもさやかもインデックスも、キュウベえなどと言つ言葉など聞いた事もない。

だが状況から察するに、この白い生物の名前と考えるのが妥当な所だろう。

「ありがとう、その子は私の大切な友達なの」

「私……呼ばれたんです。頭の中に直接この子の声が……」

まどかはキユウベえと呼ばれる生き物と、どうやって出会ったのかを説明する。金髪の少女は何を理解したのか、優しげに微笑んで、

「ふうん、なるほどねえ」

そして、もう一つ　少女はある事に気付いた。

「その制服、あなた達も見滝原の生徒みたいね。2年生？」

「あ、あなたは……ッ」

さやかが聞こうとしたその時　。

「ちょっと、どこの誰かさんか知らないけど、私を無視しないで欲しいんだよ!」

「あら、あなたは……?」

少女はインデックスを見て困惑する。彼女は見滝原の生徒ではなく、その服装はどう見ても修道服である。しかし、教会のシスターにしては派手な服装だ。白を基調とし、所々に金の刺繍が施された高級なものだ。一般的に認知されている、黒い地味な修道服とはまるで別物である。

それに彼女はもう一つだけ、気になる事があった。

白い修道服の彼女も、魔法の類を扱う者なのだろうか。

言葉で軌道を逸らす彼女の戦法は　見たことも聞いた事もない

ものだ。

「私の名前はインデックスって言うんだよ！」

「インデックスさんね」

どう聞いても偽名としか思えないものの、一応はそれで納得しておこう。少女は見た目通りなのかもしれないが、まどか達よりは大人なので、そこらへんは理解しているつもりらしい。

とりあえず、自分の名前を名乗る事にした。

「そうそう、私も自己紹介をしないとね　　っと、その前に」

と、思いきや。

その場で優雅にくるりと、スケートのように回転し、その手に持っていた黄金に輝く不思議な物体を投げる。やがて、落下してきた物体をキャッチすると、ポーズを決めた少女は　　。

「ちよつと一仕事、片付けちゃっていいかしら？」

一言告げた瞬間、少女は神々しく輝いた。さらにそれだけではなく、彼女が着ていた見滝原の制服がどんどん変形していく。インデックスがいつも見ているアニメ、マジカルバード超機動少女カナミンリ変身シーンのようなものが、たった今　　目の前で現実に起こっている。

光が収まり、目を開けると　　少女は本当に魔法少女のような恰好をしていた。

「……ッ!？」

インデックスは驚愕していた。

何故なら、今までこのような魔術は見たことがない。  
自身の10万3000冊の魔道書の中にも　こんな魔術は記憶  
されていないからだ。

「……ッ！」

変身した金髪の少女は、身を屈めながら一瞬で20メートル以上は飛び上がった。おそらく魔術によるものであるが、もしも肉体の力だとすれば　聖人に匹敵する力の持ち主かもしれない。

「はっ！」

右腕が大きく振るわれると、無数のマスキット銃が、少女の周りに次々と現れる。インデックスはカバラを用いた魔術が、あるいはアルス・スマグナ黄金錬成を初めとする錬金術の一種と考える。

だけど、原理は殆どわからない。魔術に関する事なのに　理解が追いつかない。

インデックスが分析に夢中になり、まどかとさやかが啞然とする中、無数のマスキット銃が一斉に火を噴いた。無数の弾丸が使い魔へ雨のように降り注ぎ、大爆発を発生させる。

それだけで。

たったそれだけで　使い魔達は一掃された。

最後に少女は優雅に着地し、こちらへ微笑みかけてきた。

「す、すごい……っ」

まどかがそう口にすると、やがて空間が歪み　元の世界に戻っていた。

「も、戻った……っ！」

さやかが喜びを露わにし、まどかと2人で笑顔を浮かべている。使い魔を一掃した少女も勝利の余韻に浸っているのか、なにやら微笑んでいる様子だ。

そんな中、インデックスは一人だけ笑わず　少女の事をずっと考えていた。

それとほぼ同時に。

青い袋に被せられた木材の上に　左腕に盾を装備した黒髪の少女が降り立った。



## 第8話 強制詠唱（後書き）

次回、マミさん回！

ついでに、あの白熱し、白濁し、白狂したロリコン野郎が登場するかも……。

## 第9話 意外な再会

金髪の少女は瞬時に魔法の使い魔達を倒してみせた。

インデックスですら理解が追いつかない、謎の力を用いる事によって。

その直後、暁美ほむらがまどか達に前に降り立つ。

先程の事もあってか、ほむらとまどか達の間で不穏な空気が漂っている。

「魔法は逃げたわ。今回はあなたに譲ってあげる」

静寂を突き破り、最初に口を開いたのは金髪の少女であった。少女は優しく微笑み、見下ろすように睨みつけてくるほむらに近付きながら話を続ける。

「仕留めたいならすぐに追いかけてなさい」

「私があるのは」

「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの」

ほむらが言いかけた所で、金髪の少女が警告ともとれる発言をする。ほむらに全てを言わせないで放った少女の言葉は、一見穏やかそうに聞こえながら、どこか刺々しい。今、金髪の少女がほむらに對して抱いている感情は、言うまでもなく敵意であろう。

「お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」

言葉の直後、再びその場に沈黙が訪れる。

インデックスは口を挟みたい様子だが、事情が分からず何も言えない。その少し後方ではさやかがまどかを守るように、まどかの一步前に出て、ほむらに厳しい視線を向けていた。

彼女もまた、ほむらを警戒すると共に 彼女に対して敵意を向けているようだ。

「……………」

すると、沈黙を突き破って ほむらが悔しそうにくるりと背を向け、素早くブルーシートに被せられた木材から飛び降りる。

ほむらの姿は既に見えない、どうやらこの場から去ったようだ。

「はぁ」

「ふうっ」

まどかとさやかが大きいため息をつく。

一触即発の事態の中、極度に緊張していた2人はようやく安堵したようだ。

一気に場の空気が和らぎ、まどかとさやかに笑顔が戻る。使い魔を撃退し、ほむらとの大きな争いもなく、どうやら一件落着のようである。

それから数分後、まどか達は非常口付近まで移動した。元々、ここは関係者以外立ち入り禁止区域なので、早急にこの場から出たほうがいい。金髪の少女がそう言ったのだ。

こうしてまどか達は外に出ようとしたのである。あの男を1人残して……………。

「はぁ、はぁ……………おい、インデックス！」

置いてかれそうになった不幸な少年　上条当麻は、鈍く痛む体に鞭を打ち、疲れて呼吸を乱しながらこちらに駆け寄ってきた。

インデックスとまどかは、何やらお疲れな様子の上条を視界に捉えると、

「あ、とうま！」

「当麻お兄ちゃん！」

2人で揃って彼の名前を叫び、上条を出迎えるように上条へ駆け寄る。3人の距離が2メートルほどまで縮まると、上条は膝に手を突き、呼吸を整えようとしていた。

「ったく、どうなってるんだよ！　結局魔女ってヤツは見つからなかったし、お前達はどこ探してもいなかったし、上条さんは毛玉に襲われる恐怖の中、スキルアウトの連中に追われる気分を味わいながら走り続けて、もうお疲れだぞ！？」

「まあまあとうま！　危機はマミのおかげで脱したから、結局は大団円なんだよ？」

「……………マミ？」

はて、どこかで聞いた名前だな。と上条は思いつつ、周囲に目を配ってみた。インデックスとまどかの他には、まどかの友達と思われる少女と、

もう一人、何処かで見覚える少女が佇んでいた。

上条が少女　巴マミは視線を合わせた瞬間、マミの表情が一気に豹変する。

「あ、あなた……っ」

「えっ、お前……巴？」

それは意外な再会であった。

しかし、2人が知り合いである事を知らないまどかとさやかは、あまりにもぶっ飛んだ展開に困惑している様子だ。そして、インデックスは真っ白い歯をギラリと剥いて、

「とうま、また見境無しに女の子と知り合ったんだね」

妙に微妙に平淡な声でそう言った。

歯の準備はいつでもOK、頭に噛みつかれてはまずいと思った上条は、

「ま、待て待てインデックス！ 巴は前に俺が変な空間に迷い込んだ時、ピンチだった俺を助けてくれただけだ！ と、とにかく違うんですよインデックスさん！」

上条が両手を掻き<sup>か</sup>振りながら叫ぶと、さやかはため息をついた。

「あれがあんたの兄貴分……？」

「う、うん……」

「まどかも大変そうねえ」

「さ、さやかちゃん！ 当麻お兄ちゃんは見かけに反して本当は力ツコいい人なんだよ！？」

見かけは違うのかい！ と。上条は心の中で突っ込みを入れ、実際にさやかに向かって叫びたいとは思っていたが、これ以上騒ぐと収集がつかなくなりそうなので自重した。

それよりも、と上条はまどかが腕で抱えている、白い生物のほうを見た。

「なあまどか、その白いの相当苦しそうだけど、病院連れてったほうがいいんじゃないか？」

「えっ！？ あ、うん！ これからそうするつもりなんだけど……」

「大丈夫よ、ここは私に任せて」

慌てるまどかに、妙に落ち着いた声でマミが離し掛けた。任せてと言っているのです、まどかは衝撃を減らすため、ゆっくりとマミに【キュウベえ】と言う名の白い生物を手渡した。

マミはゆっくりとキュウベえを床に寝かせ、そのまま優しく両手で生き物に触れる。

それだけだ。

マミが行った動作はそれだけである。

それなのに、包み込むようにマミの右手とキュウベえの体を光が包んで、

「怪我が……治っていく？」

言葉に出して驚いたのは上条だけだが、当然他の三人も驚きを隠せずにいた。インデックスは魔術に関する知識はあるものの、この回復術式も自分の知識で説明できるものではない。

マミのそれは、偶像の理論を用いたものでもない、全く未知の回

復術式であるのだ。

『ん、あ……っ』

やがて、傷が治るとキュウベえが目を覚まし、むくりと起きあがった。

『ありがとうマミ、助かったよ』

「お礼はこの子達に、私は通りかかったただけだから」

くるり、とキュウベえはまどか達のほうへ振り返り、

『どうもありがとう！ 僕の名前はキュウベえ！』

「むっ！？ とつま！ あのキュウベえって生き物、通信用の術式で話しているねー！」

「えっ？ そ、そうなのか……？」

「……やっぱり、とつまには聞こえないの？」

「ああ……アイツ、何言ってるんだ？」

上条にはキュウベえとまどか達が何故、会話を出来ているのか理解が出来なかった。

まどかも言っている事だが、どうやらキュウベえは頭の中に直接声をかける、言わばテレパシーのようなもので相手に喋り掛けるようだ。ところが、上条には全く聞こえていない。マミやまどかが独り言を言っているようにしか見えなかったのだ。

やっぱり、この右手のせいなのだろうか？ と上条は疑問に思っていた。

「あなたが、私を呼んだの？」

と、そんな時。

一番キュウベエの近くにいたまどかが、キュウベエに確認しようと迫った。

『そうだよ、鹿目まどか。それと、美樹さやか』

「ええっっ！？ な、なんであたし達の名前を……ッ！？」

さやかはこの世の終わりでも見てしまったかのような、凄まじい驚き方をしていた。

確かにキュウベエと2人は初対面。常識的に考えて名前を知っているのはおかしい事だ。

『ボク、君達にお願いがあつて来たんだ』

「え……お、お願い？」

まどかがぱつと目を見開き、訊き返す。

それに答えるように、もふもふと柔らかそうな頭を横に傾げて、キュウベエは笑顔で、

「僕と契約して、魔法少女になって欲しいんだ！」



時を同じくして、ここは東京都の3分の1ほどの面積を誇る、科学技術の結晶とも言える学園都市のほぼ中心、上条達が住んでいた、名門常盤台中学が存在する第7学区である。

そして、ここは第7学区の中でも別名【ケンカ通り】と呼ばれている、第7学区39号線こと木の葉通り。表面上は賑やかながら、大きな通りを外れば裏の顔を覗かせる。そんな道路の比較的賑わっている場所を、細くて白く、白く、白い印象を持つ少年が歩いていた。

彼はコンビニの袋に大量のコーヒーを詰め込み、気だるそうにしながら、ポケットに手をつ込んで歩いていく。そんな彼に近寄るものはおらず、むしろ人は彼を見かければ離れていく。

そしてそれは、本人も望んでいる事だ。

そういう人物なのである。

学園都市最強の超能力者<sup>レベル5</sup>、一方通行という人物は。

「……はア」

一方通行<sup>アクセラレータ</sup>が小さくため息をつく。

気がつけば、一般の人達は一方通行<sup>アクセラレータ</sup>からかなり遠くへ離れており、変わりに彼へ自ら近づいていたのは柄の悪い不良達。彼らは路地裏で活動する不良集団であろう。

「……来な、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>」

「テメエの命運はこれで尽きたぜ……へへへッ！」

はア、とため息をつきつつ、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>は不良達の言葉に従う事にした。それは彼が弱いからというわけではなく、むしろ強さなら彼

に及ぶ者はいないだろう。

単に 彼は自らの力を証明したかっただけであつた。

そして数分後、コンクリートに囲まれた路地裏でただ一人、最強と謳われていた一方通行アクセラレイタが立ち尽くしていた。その背後には、汚い地面に倒れる不良の人達。そして、不良達が使っていたと思われる金属バットや木刀、ナイフなどの武器が散乱している。

勝負はあまりにも一方的であつた。

運動量、熱量、光、電気量などと言つた、あらゆる向きをベクトル観測し、それを触れただけで変換するという能力を持つ一方通行アクセラレイタ。そんな彼は、そこで倒れている無能力者レベル0どころか、同じ超能力者レベル5の超電磁砲レールガンすら及ばない、まさに最強の存在である。

ただし、ただ一人のイレギュラー。

8月21日、操車場で対峙したあの無能力者レベル0を除けばの話だ。

（未だに理解出来ねエ……あの無能力者レベル0が強エのか、俺が弱くなつちまつたのか）

少なくとも、今、彼の目の前に倒れている馬鹿共は同じ無能力者レベル0でも雑魚。何の能力も持たなければロクな信念を持っておらず、決して一方通行アクセラレイタには及ばない存在だ。

しかし、あの時の少年は違う。

（しっかし、これで何回目だ？ 馬鹿共に貼つたレットテルつてのは中々剥がれねエな）

全くおかしい話だ、彼の能力に変化は一切ないハズなのに。

それでも、街の不良達は無能力者レベル0でも彼を倒せると信じて疑わない。

実際、彼は1週間前の操車場で 無能力者に敗北したのだから。

「あん？」

ふと自分の近くに誰かがいる事に気づき、一方通行は太陽の光が中々入ってこない薄暗い路地裏で、上や前後左右と目を配り始めた。気配はすぐ近く。また馬鹿共か？ と一方通行は思っていた。

(……そこか)

馬鹿共にしては気配の殺し方が上手だ……と一方通行は疑問に思う。

先程、表通りで取り囲まれている所を誰かが風紀委員に通報したのだろうか、とも考えたが違うかもしれない。風紀委員ならもつと堂々と登場するハズだ。  
街の不良でも風紀委員でもない、新たな気配に一方通行は身を固める。

ただそれだけだ。

他には何もしない。

能力さえあれば する必要もないのだから。

「……あん？」

さらに、一方通行はとある事に気づく。

先程、能力でぶっ飛ばした不良達の首筋に 不思議な模様が浮かんでいた。

そういえば、戦え前から不良の様子がおかしかったと一方通行は思い出す。

威勢があつたわりには目が虚ろで、しかも行動も妙なものだ。

(そついやコイツら、自分の身の危険すら考慮しねエ捨て身戦法だったな)

いくら馬鹿な不良でも、多少は考えて戦うハズだ。少なくとも、長い間こういう馬鹿共に襲われ続けてきた一方通行は、勘アクセラレータでその事を覚えていたハズである。

しかし、この不良達にはそれがなかった。

まるで、敵う筈のない相手に 自ら死を望むように突撃していたのだ。

(不良共も神風つてのを覚えやがったのかア?)

そうは思ったものの、正直彼らはどうでもいい存在である。そんな事よりも、先程から身近に感じている異様な気配が気になる。一方通行は気配のする方向へ歩き始め、一体誰が潜んでいるのか確認して、ソイツが敵なら軽く痛めつけておこうと考えていた。

「…………ツ!?!」

ところが 次の瞬間。

どろりどろりと、コンクリートとコンクリートに挟まれた空間が変化し始めたのだ。

「…………チツ、クソ暗部にいる能力者の悪戯いたずらかア?」

空間そのものが完全に変わり果てている。コンクリートとコンクリートに挟まれていたサツパリとしていた空間が、どろどろとした赤紫色の背景に、大量の鋭利なガラスが牙を向いている。

大量のガラスの破片は、まるで一方通行の命を狙っているかのようである。

（精神系能力の使い手……いや、待て。コイツはどう考えても超能力者並だ）

学園都市には確か、心理掌握メンタルアウトという超能力者レベル5がいたはずであるが、その能力者の能力は確か精神に関する事ならなんでもできる、十徳のナイフのような存在。

しかし、いくらその能力者でも、空間そのものを変貌させるのは難しい事だ。一方通行アクセラレータの記憶を操作し、過去の光景を強制的に見せている可能性はある。だが、それを行うのは難しい上にその能力者は確か、常盤台中学の生徒で 暗部とは殆ど関係のないはずだ。しかし、それ以外の精神系能力者では、これほどの規模の能力は扱えない。

そもそも、仮に能力だとすれば、一方通行アクセラレータにとっては信じられない事が起こっている。

（不自然だ、反射が効いてねエ……）

そう、彼が最強と呼ばれる理由の一つ ベクトル変換が働いていないのだ。

どんな処理を行おうが、反射はされていない。精神がおかしいのかと思ってもそうではないようである。そもそも、一方通行アクセラレータは既に精神的におかしい人物であろう。

『オツホホホホホホ……』

さらに、不自然な事に 鏡から変な連中が出てきやがったのだ。目の錯覚などではなく、本当に鏡から湧いてでてきたようである。その変な連中はもはや人の形を留めてはおらず、赤と黒と紫色の醜い八工のような顔面に、頭から羽が生えている。その羽も鳥や虫の

羽と言うよりも、神話などに出てくる悪魔のようなです黒い羽であった。

異形の生命体達が、徐々に一方通行へと近づいていく。

「面白エ、何処の誰の悪戯か知らねエが」

ぐわつと、一方通行が笑みを浮かべた。

それは単なる笑みではない。もっと狂氣的で、虐殺的な血みどろの笑い、

「とりあえずオマエら ミンチ確定だクソ野郎オ！」

S G B

魔女こそ取り逃がしてしまったものの、巴マミの活躍により、死の危機に瀕していたインデックスやまどか達は救われた。最も、上条の努力は無駄に終わってしまったが……それでも、上条はある意味では貴重な情報収集に成功したのかもしれない。

先程の空間で自分を助け、まどか達の所へ向かっていた謎の少女。彼女が何者かは知らないが、それでも彼女の存在を知る事は出来た。

その事をみんなに伝えるべきか、上条はさつきからその事を考えていた。

「そうそう、自己紹介がまだだったわね」

と、そんな上条を差し置いて、マミが突然まどか達に話を振った。

「私の名前はバマミ。あなた達と同じ見滝原中の三年生。そしてキユウベえと契約した魔法少女よ」

「ま、魔法少女？ 魔法少女って何！？ カバラ！？ エノク！？ ヘルメス学とかメルクリウスのヴィジョンとか近代占星術とかっ！ 【魔法少女】なんて曖昧あいまいな事言っていないで専門と学派と魔法名オウダーと結社名を名乗るんだよオバカあ！」

あれー、どこかで聞いた事のあるセリフだなー、なんて上条は思った。しかし、そんな軽いノリの上条に対して、インデックスにそんな事を言われたマミは困っている様子だ。

まどかやさやかはもちろんの事、魔術師と共闘した事のある上条でさえ、ちっとも理解できない専門用語のオンパレードに、マミは何も言い返す事が出来ないらしい。

「ま、まあまあ！ そのくらいにしとけて。要は魔女ってヤツと戦うのが魔法少女で、別に魔術師とかそういう連中とは無縁なヤツらなんだろ？」

「とうま……明らかに私の時とは態度が違うかも」

「別に巴は何かを企んでいるわけでもなさそうだし、イギリス清教とか、そういう連中とは何の関わりもねえんだろ？ だったらもう、それくらいでいいじゃねえかよ」

「むう……っ」

インデックスはご機嫌斜めの様子で、頬を膨らませてしまった。まあ、彼女のことだから食べ物でも与えれば、まるでお犬様のように態度が180度くらい変わってしまうのだろうか。

「えっと……上条くん、だったかしら？」

「ええっ！？ あんたも上条って名字なの！？」

「さやかちゃん……っ」

上条って名字が余程気がかりなのか、さやかが過剰とも言えるくらいに反応をする。

それでも上条もマミも彼女達よりは大人だ。

テキストに愛想笑いを浮かべ、さやかの突っ込みをスルーする事にした。

「上条くん、あなたも一緒に戦ってくれたのよね？」

「えっ？ お、俺はその、魔女ってヤツを追って、結局逃がしちまつただけだけど……」

「それでも、生身で魔女に立ち向かおうとしたのよ。それだけで十分立派だわ」

「そうか？ 巴のほづがよっぽどすごい活躍したと思っただけかなあ」

「上条くん」

上条の名前を呼んだマミは、ゆっくり手を差し伸べてきた。

相当の鈍感である上条でも、それが握手を求めている事くらいは理解出来たらしい。



「ありがとう。あなたの活躍もあったから　手遅れにならずに済んだわ」

「えっ、どうも」

やはり彼も男。

一瞬驚いたが、意外にも上条はあっさりともミミの手を握ったのだ……右手で。

その細い指と一緒に、少しサイズが大きめの魔法少女の服を握った途端、

ビリビリ、と。

ミミの魔法少女の服が完全に破けてしまった……。

「……えっ?」

思わず上条の目が真ん丸になってしまった。驚いているのは上条だけではなく、まどかやさやかは我が目を疑っているかのように、ミミと上条の右手を交互に見比べていた。

そしてミミ自身も、一瞬の出来事に何が起こったのか理解が追いついていない。

だが、そんな事は上条にとってはどうでもいい。

それより最も重要な事は、今　ミミが下着だけになってしまっている事だ。

上もフリフリのスカートも、服という完全に破けてしまっている。下着だけになってミミのボディラインがハッキリと瞳に映る。中学生としては大きすぎるかもしれない聖人級だ。

そこでミミは下を向き……ようやく己の姿に気づいたらしく、

「きゃああああああああああああああっ!?!?」

「うわあっ!?!」「ぐ、ぐめん巴!」

一瞬で悪寒と、嫌な汗が噴き出してきた。

上条は咄嗟に後ろへ飛び退き、電光石火の如くマミへ土下座を敢行した。

「うわぁ……大胆! 同じ上条でも恭介とはやっぱり違うねえ!」

「マミさん……大きいっ」

まるで、その恭介にもその大胆さを求めるかのようにさやかが叫ぶ。

まどかは顔を赤らめて、じろじろとマミの胸の大きなまんじゅうを見つめていた。

そして、

「うがぎぎぎ……と〜う〜まあああああっ!」

「ちょ、ちょっと待ってくださいインデックスさん!? 事故ですよ事故! まさか魔法少女の服が異能の力で出来ているとか思わなかったし、超偶然のトンデモイベントってヤツですから! ってか、これで怒られるなんて……理不尽だよっぱり不幸だあああああああああああっ!」

唇をゆっくり動かし、ギラリと輝く鋭い歯を見せつけていたインデックス。そんな彼女が一方通行の攻撃をも避けていた、脅威の反射神経を持っているかもしれない上条ですら、反応不可能なほどの超不意打ちで 彼の頭に向かってぐわっと、飛びかかった。

その直後、かぶり、と。とてもいい音が上条の頭を中心に響き渡

る。

結局、騒動が鎮静化したのは

この後5分後の事であった。

## 第9話 意外な再会（後書き）

どうも、作者の作戦参謀です！

ちなみにどうでもいい話、今回初登場のロリコ（ry……げふんげふん！<sup>アクセラレータ</sup>一方通行と対峙したのは、なんとなく思いついたオリジナルっぽい魔女です。いや、ありがち故に先に誰か考えていたかもしれないですが……。

次回！ 学園都市最強vs魔女と使い魔。

そして時々 あんこちゃん。

## 第10話 学園都市第1位

不気味な背景に、殺人兵器のようなガラスの破片と、醜い異形の生命体。

灯りが無いのに何故か適度な明るさを保っていて、しかし第一印象は暗い。

そんな絶望しか残されていないような空間に、轟！ と、周囲に漂っていた異様な妖気を蹴散らしながら、白い少年は砲弾のように異形の生命体に向かって駆け出した。両者の距離は何メートルもあつたのだが、たったの二、三步でその距離は縮められた。

これが一方通行のベクトル変換。

足にかかる運動量の【向き】を変更させ、高速移動すら可能にしてしまう脅威の能力。

その動きは水面を飛び跳ねる石のようであつた。

『ツ！？』

アクセラレータ

一方通行の左右の手が、赤と黒と紫色の醜い異形の生命体に触れた。その力が異常に強く見えるのは能力のせいだろう。指先がぐちゅり、と生命体の体内へ押し込まれている。

「さアて問題です。俺は今、血液の流れに触れている。では、血液の流れの【向き】を逆流させると、オマエが人間と同じ様な体をしてるかまでは知らねエが、常識的に考えたら生き物の体はどうなっちまうでしょうか？ ギャは、正解者には安らかな眠りを」

瞬間、生命体の体が四方八方に弾け散った。

ボテ、と。さっきまで命のあつた赤黒い汚物が地面に落下する。

「へエ、血は赤色でしたってなア？」

ニヤリ、と。アクセラレータ一方通行は裂けるような笑みを浮かべる。久々だ、この虐殺的な感覚は実験が中止された8月21日以来のものである。久々に彼は虐殺を堪能していたのだ。

『オホホホホホ………』

しかし、相手の生命体達はそれほど恐怖してもいないようだ。むしろ、アクセラレータ一方通行の行った行動に対して、怒りという感情すら向けているかのようである。

ハア、と。アクセラレータ一方通行は気だるそうなため息をつき、

「面倒臭エ、面白くねエなア………楽しめねエならそろそろ掃除するけど、文句はねエよなア!？」

地面は大理石だ。この空間は大理石の床を使った屋内をイメージしているらしい。

フツ、と虐殺的な笑みを浮かべ、アクセラレータ一方通行たん、と。は小さく地面を踏んだ。

ゴッ!!--と。

瞬間、アクセラレータ一方通行の足元の大理石が、地雷でも踏んだかのように爆破した。大理石は細かく無限に砕かれ、四方八方にその破片を飛び散らせた。例えるなら、何発も同時に放った散弾銃ショットガンを用いて、あまりにも一方的な大量虐殺を行っているようなものだ。

破片に触れただけで、生命体の体に風穴が開き、鮮血を噴射させている。仮に破片を上手く回避したとしても、空間内に配置されている銅像に破片が当たり、爆発を起こす。今度は大理石以上に数の多い銅像の破片が生命体を襲い、結局生命体は体の至る所に風穴を

開けていた。

「クソつまシねエ……シケてやがる」

勝敗は一瞬にして決した。

数の上では圧倒的であった生命体が、アクセラレータ一方通行に虐殺されるとい  
う結果で。

一方的な虐殺であった。完勝という言葉以外、当てはまる言葉が  
思い浮かばない。

だが、

(どオなつてやがる?)

アクセラレータ一方通行は勝利の喜びを味わう以前に、深く考え込んでいた。

もし、これが能力者の悪戯いたずらであるとすれば、完成度があまりにも  
高すぎるのだ。目の前に立ち塞がった生命体達は、どれもこれも触  
れる事が出来た。とても、自分の精神を操作されたとは思えない。  
まるで、本当に空間が誕生したかのようにリアルである。

(ハッ、試作兵器の性能を、俺を使って暗部のクソ野郎が試したつ  
て所かア?)

それが現在、最も現実味のあるアクセラレータ一方通行の出した回答であった。  
闇の世界の研究者は、常に怪しげかつ非人道的な実験を繰り返し  
ている。そんな世界の連中が開発したクサレ兵器である可能性は、  
事情を知る者にとって、十分考えられる事なのだ。

「ッ!？」

思考は一瞬で止まった。

ぼん、ぼん、と言う可愛げな、しかし空間には不似合いな異音が響く。その異音が聞こえる先へ首を向けると、一方通行は顔色を変え、思わずその場に固まってしまった。

先程、殺したハズの生命体のうちの一体。

その遺骸から ドレスを身にまとった道化師ジエロのような人型生命体が現れたからだ。

表現するならば、それは卵から孵化する子供のようでもある。

「ハッ」

しかし、

「面白エ」

第一位と呼ばれる最強の化け物は、未知の存在に驚きはしても決して恐れない。

一方通行は最強である。常識的に考えれば、負けるハズがないのだ。

「最ッ高に面白エぞ、オマエはア！」

そうして、毒々しい空間を支配する未知なる敵を撃破するために、咆哮と共に一方通行は拳を握って駆け出した。例の、地面を蹴る足の力の向きを変更して。

砲弾じみた速度で、未知なる敵との距離は一瞬で縮まる。

勝利。

既に一方通行アクセラレータの頭には、その二文字が浮かんでいた。むしろ、それ以外の文字を思い浮かべる事そのものが、彼にとっては馬鹿馬鹿しい事なのである。

勝利を確信し、血の流れさえ操作する左右の手を突き出して、



「ッ!？」

10メートルは超える、巨大なガラスの破片が一方通行を襲った。普通の人間なら、それを見ただけで動きを止め、喰らえば粉々に吹き飛ぶ一撃。しかし一方通行は動じなかった。彼の場合、その程度の攻撃でダメージを受けるハズがないからだ。

あらゆる向きを操作できる彼は、その力の使い方次第では戦車よりも頑丈で、核シェルター何かよりも頼りになる盾となる。反射、つまりベクトルの反転に設定された彼なら、攻撃を受けても反射する事が可能だ。

ただし、それは普通の場合だ。

今、一方通行は僅かに眉をひそめている。

ガラスの破片が七色の光と化し、斜め後方へ逸れて流れていった事実、

(……………何だア……………?)

不可解だった。

反射が成功していれば、ガラスの破片は未知なる敵へ正確に弾き返され、道化師ピエロのような生き物の頭は粉々に吹っ飛んでいたハズなのだ。にも拘わらず、破片は逸れた。しかも七色というメルヘンな色の光に分解されて。それはとても、おしかな現象であった。

「……………チッ!」

光に分解されたプロセスが、学園都市第一位の脳を以つてしても理解できない。さらに指先にぬるりという、おかしい感触を感じていた。空間移動系能力者の攻撃を反射すれば、そこでも不可解な現象が起こる事を一方通行は知っていたが、それともまた違う。

出来れば、この現象の原因を解明したかったが、考えている余裕はなかった。

道化師レヒエロのような生命体が、次の攻撃を放ってきたからだ。

「……面白エ」

数多のガラスの破片が一方通行アクセラレータへ激突し、七色の光へ分解される。反射がともに作用していないという、科学的には不可解かつ危険な状況でも、彼は薄く笑った。

「けど違うんだよなア……未知の能力使った所で 結局俺には届きやしねエンだよ」

ドン！ という、腹に響くような爆音が炸裂した。

一方通行アクセラレータが軽く地面を踏みつけ、大理石を大津波のように持ち上げた音だ。大量の大理石は信じられない速度で飛翔し、道化師レヒエロのような生命体の命を脅かす。

圧倒的な速度。

大柄な上に、鈍重な敵は回避も出来ず、大理石の絨毯爆撃じゅうたんばくげきを直に受けてしまった。

ドバアツ！ という莫大な音と同時に、ぐちゅり、としたものが飛び散る。それは一方通行アクセラレータに限らず、敵を殺したと言う最大の証拠肉片だ。

おそらく今の爆発で、先程の生命体はバラバラに飛び散ってしまったのだらう。

「……チツ、人ビビらしとしてこの程度ですかア？ やっぱシケてやがんな」

とは言うものの、一方通行アクセラレータの頭の中で再び思考が始まった。毒々

しい空間は敵の撃破と同時に元に戻り、今ではいつも通りのコンクリートに囲まれた窮屈な空間が広がっている。

この空間には戦いの余波はない。地面だってアスファルト。先程の空間のように、大理石の床が広がっているわけでもない。結局、今のは何だったのだろうか、幻覚か？

彼は必死に分析を行っていた、

「……なんだ、これ？」

ふと地面を見ると、自分の足元に異物が落ちている事に気づく。

金ではない、銅銭でさえここまで暗い色はしていない。球体に剣が突き刺さっているかのような、不思議な形状だ。それが何の物質で出来ているのかさえ、科学を熟知した一方通行アクセラレータにも理解出来ない。

一方通行はそれを拾い、よくよく観察してみる。模様のようなものも入っているが、その意味が理解出来ない。古代文明以上に不可解な物体である。

しかし、常識的に考えればアクセサリーか何かであろう。

チツ、と舌打ちし、彼はそれを投げ捨てようとした、

「なあアンタ、ちょっと待ってくれない？」

「……あ？」

彼の後ろに立っていたのは、見慣れない少女だ。

上は水色のパーカーシスターズのようなもの、下は短いジーパンタイプのシヨパン。歳は恐らく妹達と同じくらいであろうか。長く、赤い髪を黒いリボンで束ねた少女が、不敵な笑みを浮かべながら一方通行アクセラレータへ徐々に歩み寄る。右手を広げ、何かをくれと言わんばかりに。

「アンタさあ、何者なの？ 魔法少女でもないのに魔女を倒すって、

普通じゃないよねえ？」

それはこっちのセリフだ、と一方通行は内心思っている。一方通行にとっては目の前に立ち塞がる少女の方が、よっぽど非科学的かつ不可解な存在であった。

「誰だ」

「けど、アンタって感覚はしっかりしてるね。ちゃんとグリーンフィード持つてる魔女を潰すってさあ、時々それが理解できていないヤツがいるから困るんだけど……まっ、アンタは上出来だ」

「オマエは誰だっつってんだろオが」

一方通行は明らかに彼女を警戒している。

何かしらの事情は知っているみたいだが、どうも信用し難い口調と態度なのだ。

「アタシは佐倉杏子って名前だけど……正直アンタにとってはどうでもいいでしょ？」

佐倉杏子。

有名な能力者であれば、彼も知っているかもしれないが、全く聞き覚えが無い。

「……答える、オマエの目的はなんだ？」

「やだなあとゲトゲすんなよ。アタシさあ、アンタと取引がしたいんだよね」

「取引だと……?」

自分と取引して何の得になるのか、一方通行には理解できない。  
ひよっとして、見た目に反して佐倉杏子という人物は、研究職の人間なのでは、とも彼は考えた。

ありえる。

学園都市の裏では、女子小学生でさえ研究者の為に働く者がいるのだ。

「アンタがさつき戦った相手の情報を、アタシが教える。それで、アンタがその手に持っているグリーンフィードをアタシが貰う。ほら、対価交換でしょ?」

グリーンフィードというものは、おそらくこのわけの分からない物体の事なのだろう。

一方通行に悩みは無い。アクセラレータ 答えは杏子の言葉を聞いた直後に決めた。

「いいだろう」

こんな物体を持っていた所で、一方通行には使い道がない、得もない。アクセラレータ

だが、そんな使い道のないものでも、杏子に渡せば不可解な敵の情報を知る事が出来る。

ひよっとすると、それは素晴らしい使い道なのかもしれないが、

「ただし条件がある」

「な、なんで? アンタにとってもいい話でしょ?」

「確かになア……だが、俺も暇じゃねエンだ。オマエと話してる時

間はねエよ」

「…………交渉決裂か？」

「そうは言つてねエだろオが…………そうだな、2日後の午前1時にもう一度ここに来い」

実験が中止されたとは言え、後始末の問題もある為、アクセラレータ一方通行は暇ではない。

しかしその日のその時間なら、多分コンビニでコーヒーを買い漁っている頃であろう。

その時間帯なら、不良を相手に戦いながらも、杏子と話す時間はあるはずだ。

「随分遅い時間だね」

「言つただろ、暇じゃねエンだよ…………」

「つで、その時間にここに来れば、本当にグリーンフシードくれるんだよね？」

「使い道がねエからな…………オマエにくれてやる」

言いながら、アクセラレータ一方通行は歩き始める。行き先は研究所、見知った顔の人物がいる場所で、実験が中止された今でも、まだ出入りが可能な場所でもある。

今日はそこで調整があるらしい。調整と言っても、会話だけなのだが…………。

「約束だからな、それまでグリーンフシード孵化させるなよ」

何言っ  
てんだ……  
と思いつつ、  
一方通行は街の喧騒に姿を消して  
いった。

## 第10話 学園都市第1位（後書き）

・後書きトークコーナー（まどかサイド）。

さやか「一方通行さんマジクール！」  
アクセラレータ

まどか「さやかちゃん……上条君は？」

さやか「なっ！？ ばっ、そ、それとこれとは話が別よ！」

マミ「それにしても、相変わらずテンポ悪いわねこの小説……」

まどか「マミさん、まだ死んでないもんね」

マミ「ええっ！？ ちょ、私ってもしかして……死ぬの？」

QB「まったく、わけがわからないよ」

次回：再びマミさん回、そして土御門がとある計画実行の為に……。



## 第11話 / 魔法少女体験学習？ 1

バミミ。

そう名乗る女の子が自分達の前に現れ、あつと言つ間に使い魔達を撃退してしまった。

自分達を助けに来てくれた上条当麻やインデックスも、使い魔を相手に全く引けを取らぬ戦いを演じていた事は確かだが、バミミと言う少女は明らかに彼らを上回る実力の持ち主。しかも彼女は自分達と同じく見滝原中の生徒で、学年は自分達よりも1コ上の3年生であるらしいのだ。

魔法少女。

確かに彼女はそんな事を言っていたが……。

「……はあ、また夢オチ？」

ぱちっ、と。まどかは目覚まし時計が鳴り響く中、むくりと起きあがる。昨日は確かに変な体験をしたような気がするが、それは夢だったのかもしれない。そう思っていた矢先、

『おはようまどか！』

「はわあっ!？」

棚の上。そこには、ぬいぐるみ達に紛れて不思議な生命体があった。脳内に直接響かせるように人間の言葉を喋る生命体 キユウベえ。その姿を見ると、昨日の事が本当のようにも思えてきた……いや、真実だったんだろう。

今日は8月30日、上条当麻とインデックスの見滝原滞在最終日である。まどかは母である詢子と一緒に並び、鏡の前で歯を磨いていた……その時、

「まどかぁ……ゆーべは帰りが遅かったんだって？」

一体なんなんだこのだらしない親は、と偉い先生が言いそうなほど、眠そうに歯を磨いている詢子なのだが、一応娘の事は心配しているようである。

「うん……先輩の家にお呼ばれしちゃって……」

「うかが……ぺっ！ まあ……門限とかうるさい事は言わないけど、さ。晚メシの前には一本入れなよぉ……いくら当麻くんと一緒に、当麻くんが高校生だからってさぁ、夜遊びは関心しないぞぉ」

「うん、ごめんね」

軽く許してくれたので、一言謝罪の言葉を入れたその後、まどかはふと右手を向いた。

『ぶはあ〜〜っ』

「いででででっ！ ちょ、タツヤさん！？ 痛いっす！ 痛いっすばーっ。」

「たつや、とうまの頭がウニに見えたんだねっ！」

「冗談じゃないっすよ！ タツヤがインデックスさん化したら上条さんハゲちまうぞー!？」



らずご立腹だ。

(触らぬ神に祟りなし……だな)

まさにその通りなのかもしれない。下手な事を言えばインデック  
スに噛みつかれ、もしかするとママが魔法少女化し、銃口を上条へ  
向けるかもしれない……考えただけでも恐ろしい事である。

「……」

一応関係者なので、貴方も来て……と言われたのでついてきた上  
条だが、案内された場所は見滝原市内にあるマンションだ。学生寮  
ではないらしいが、ひよつとしたら第7学区にある我が家よりも立  
派かもしれない……と、上条は無能力者の待遇の悪さを痛感してい  
た。

「あの、いいんですか……？」

まどかが控えめに聞くが、

「私、一人暮らしだから遠慮しないで」

おお、と。まどかもさやかも驚いた。

大人だ、その余裕が彼女達には大人にしか見えなかった。

「あのさ巴。俺、男なんだけど入ってもいいのか？」

「あ……」

さっきの事でも思い出したのか、ママの顔が段々赤みを帯びてゆ

く。落ちつこうとした所で余計落ちつけなくなるし、先輩キャラを確立しようとしているのに、上条の事を直視できない。

(いけないわ！ それは上条君のほうが年上だけど……で、でも。今、あの子達にとって私は頼れる先輩なのよ。このイメージは壊しちゃいけないわ……ふあ、ふあいと……マミ！)

まどか達には見えないよう、ぶんぶんと首を激しく横に振り、

「ええ、構わないわ」

何事も良かったかのように、いつもの落ち付いた雰囲気を持ちながらそう言った。やっぱりマミさんは大人だなあ、と。まどかとさやかはますます憧れたのか、彼女へ憧れの視線を向けた。

(まずい……マミさん、年下を除けば包容力ある女性……どストライクじゃん!?)

年上おねーさんが好みの上条さえ、マミは思わずいいなと思ってしまう存在であった。

一方、インデックスは飼い猫のスフィンクスを抱くと同じ感覚で、謎の生物であるキュウベえを可愛がっていたが……彼女は動物なら何でもよいのであるうか、と上条は思っていた。

そんなこんなで巴家に入った上条ら。マミの部屋は予想以上に片付いており、埃が一つもないと言う超クリーンルーム。穀潰しが居候する上条の部屋とは大違いである。

「うわあ〜」

「素敵なお部屋っつ」

「ろくにおもてなしの準備もないんだけど、ゆっくりしていったね」  
「ママはそのまま台所へ向かう。」

お茶でも用意してくれるのだろうか、と思っていたその時だ。

「おやつ おやつ」

「インデックスさん早っ!？ もう食う気満々がよっ!？」

インデックスは早速床に座り、テーブルを叩きながらおやつを待っていた。行儀が悪い事この上ないし、本当にシスターさんか疑わしくなるような光景だ。

「お兄ちゃん……インデックスさんって本当にシスターさんなの？」

「一応そうらしいけど……？」

「へえ、あの子がシスターさんになれるんだったら、あたしは神様になれるそうだなあ」

「さやかちゃん……っ」

そんな簡単なものじゃないんだよ、と。インデックスも怒りそうなものだが、今の彼女の脳内には食べ物という三文字しかないのだろつ。さやかの言葉など、聞いてもいなかったよつだ。

「はい、こんなものしかないけど……」

台所から現れたマミは、ティーカップと皿を持っている。お茶の香ばしい匂いと、皿に乗っているケーキの甘く、おいしそうな匂いが部屋を支配してゆく。

そんな匂いと、食べ物<sup>(?)</sup>の気配(?)をインデックスレーダーが探知したのか、

「おやつっ！ とつまあっ、おやつだよ！ おやつが来たんだよっ  
っ！」

「はいはい、礼なら巴に言えよ」

「うん！ ありがとうなんだよ！ そしていただきますっ！」

流れ星のように素早くお礼をいい、窃盗犯のように素早くお茶とケーキを取ると、もしやもしやもぐもぐという音を立て、インデックスは満面の笑みを浮かべておやつを食べていた。

「マミさん、すっごくおいしいです」

「うん〜めっちゃうまですよー！」

「……おおっ！ なんだこれ！？ 土御門舞夏<sup>つちみかごまいか</sup>が作ってくるヤツ並の味だぞ！？」

「とうまがたまに買ってくるハンバーガーの1000倍は美味しいんだよ！」

「テメエに言われる筋合いはねえけど、でもホントにうまいからどうでもいいやー！」

「ありがとう、みんな。キュウベえに選ばれた以上、他人事とは言えないものね。ある程度の説明は必要かなと思って」

マミが上条達を自宅に入れてあげたのも、すべてはそれを説明する為なのだ。しかしむしゃこらとおやつを食べるインデックスは、そんな本題など覚えてもいなさそうであるが……。

「うんうん、なんでも聞いてくれたまえ」

「さやかちゃん、それ逆……っ」

「うふふっ」

微笑ましいやりとりを見て笑ったマミは、握った手を差し伸べてくる。

その手が開かれると、中には黄色い結晶が輝きを見せていた。

「うわあ、綺麗……っ」

「これがソウルジェム。キュウベえによって選ばれた女の子が、契約によって生み出す宝石よ」

マミが変身する際にも取り出していた、この結晶の名前がソウルジェムらしい。

と、そこへ さっきまでおやつに夢中であったインデックスが少しマミに近付いて、

「要は魔法少女が魔法を使う為には、魔力の源のそれが必要なんだね」



「そう、これがなければ変身も魔法の行使も出来ないわ」

そこがいわゆる、魔術師と呼ばれる人達との決定的な違いなのだろう。魔術師は自らの生命力を魔力というものに錬成する。分かりやすく例えると、人間の体に元々流れている生命力が<sup>エネルギー</sup>原油であり、錬成された魔力はガソリンというわけだ。

それに対して、魔法少女はソウルジェムという霊装のようなものを魔力の源とし、それを使用することによって、魔術師のようにバンバン魔法を使えるらしい。

どちらが効率的かと言うと、それまた熱い議論が交わされそうなのだが……。

どちらにしても、素人かつおバカの上条には理解出来ないレベルの話である。

「なるほど、大体仕組みはわかったんだよ。という事はそのソウルジェム、定期的に何らかの処置を施さなかったら大変なことになっちゃうね」

「あら、理解が早いよね」

「わたしは10万3000冊の魔道書を持つ、<sup>インデックス</sup>禁書目録なんだよ！」

その10万3000冊の中に、魔法少女のデータが無いのも不自然な話ではあるが……仮にも10万3000冊の魔道書を持っているだけに、魔術に関する知識は豊富なのだ。その魔術知識を応用すれば科学、例えば超能力に関する知識だって覚える事は可能であろう。

最も、それをすれば大変な事になるかもしれないが……。そんなインデックスに感心しつつ、マミは話を続けようとする。

「そう、ソウルジエムにも限界があるわ。でもその話はまた今度にするわね」

「ねえママさん、契約ってなんですか？」

インデックスの質問が終わると、続いてさやかがママへ質問する。まるで読者の質問コーナーのようだ。

『僕は君達の願いごとを何でも一つ叶えてあげる』

しかし、その質問に答えたのはママではよく キュウベえであった。

「えっ、ホント!？」

「願いごとって……」

『なんだって構わない。どんな奇跡だって起こしてあげられるよ』

「うわぁ……金銀財宝とか、不老不死とか満漢全席とかぁ！」

「さやかちゃん……最後のはちょっと」

「食べ物……とうまが一生食べさせてくれないくらいの、食べ物がいいいいいっばいっ!？」

「インデックスさんも、流石にそれはちょっと……」

欲望まみれなお二人さんだが、片方は腐ってもイギリス清教のシスターさんなのだ。

しかし、インデックスには禁欲の【き】の字すらないのだが……。そんな夢いっぱい希望いっぱい……。かもしれない契約なのだが、

『でも、それと引き換えに出来るのがソウルジエム。この石を手にした者は魔女と戦う使命を課されるんだ』

契約。

つまり願いごとを叶えた対価と引き換えに、魔法少女は魔女と戦わなければならない。

それが魔法少女のシステムであり、キュウベえとの契約の大まかな内容なのである。

「ま、魔女……？」

「魔女ってなんなの？ 魔法少女とは違うの？」

やはりまどかとさやかは魔女と言う言葉に食い付いた。

魔女。

それは先程まどか達を襲い、上条達を苦戦させ、マミによって撃退された異形の生命体だ。

『願いから生まれるのが魔法少女だとすれば、魔女は呪いから生まれた存在なんだ。魔法少女が希望を振りまくように、魔女は絶望を撒き散らす。しかもその姿は普通の人間には見えないから夕子が悪い。不安や猜疑心、過剰な怒りや憎しみ、そういう災いの種を世界に齎しているんだ』

それが魔女と呼ばれる異形の生命体の正体。だからこそまどか達を襲い、陰からこの世界を滅ぼそうと言わんばかりに、表の世界の人々を嫌らしく見つめているのである。

「理由のハッキリしない自殺や殺人事件は、かなりの確率で魔女の呪いが原因なのよ。形のない悪意となつて、人間を内側から蝕んでいくの」

「マミが言うに、魔女は外部からの攻撃はオマケ程度。本当の恐ろしさは内部から徐々に人間を蝕んでいき、犯しつくし、やがては命さえ奪ってしまうものなのだ。」

「そんなヤバイヤツらがいるのに、どうして誰も気付かないの？」

「魔女は常に結界の奥に隠れ潜んで、決して人前には姿を現さないからね。さつき君達が迷い込んだ迷路のような場所がそうだよ。あそこを見破れるのは魔法使いと、この世界のもう一つの闇に潜んでいる、魔術師と呼ばれる存在くらいかな」

「魔術師？ 魔法少女や魔女のほかにも、そんなヤツがいるの？」

「いるよ。魔術は才能の無い人間が、それでも才能ある人間と対等になる為の技術で、それを使用したり開発、改良するのが魔術師なんだよ。その性質上個人的な願いの為に動いている人が多いから、味方の時もある敵の時もある人達なんだよ」

魔術師について語つてのはインデックスであった。

彼女は魔法少女こそ専門外でも、魔術師についてはキュウベえよりも詳しいだろう。

己の信じる事に忠実に生きる魔術師……故に敵の時もあれば、味方の時もある存在だ。

「世界って、いろんな人達がいるんだね……」

「それにしてもあなた達、危ない所だったのよ。あれに飲み込まれた人間は普通は生きて帰れないから」

その言葉を聞き、所々がチンプンカンプンながらも、上条は自分の握った右拳を見た。

イマジンプレイカー  
幻想殺し。

これまで数々の幻想を打ち砕いてきたその右手でも、あの空間では殆ど無力。結局マミが助けに来なければ、上条は今頃お墓の下で眠っていたであろう。

それほど魔女やあの空間は危険な場所なのだ。

「マミさんは……そんな怖いものと戦っているんですか？」

「そう、命がけよ。だからあなた達も慎重に選んだほうがいいわ。キュウベえに選ばれたあなた達には、どんな願いでも叶えられるチャンスがある。でもそれは、死と隣り合わせなの」

願いと引き換えの死。

決して死ぬとは限らないが、あまりにも恐ろしい等価であった。

「うわぁ……悩むなぁ」

「うう……」

流石にそれを聞いてしまえば、まどかもさやかも乗り気で契約する事が出来ない。むしろ聞かなきゃよかったかもしれない……が、それが魔法少女になるという事なのだ。

そこで提案なんだけど、とマミは一言置くと、

「2人ともしばらく、私の魔女退治に付き合ってみない？」

「ええっ!?!」

「魔女との戦いがどういうものか、その目で確かめてみればいいわ。その上で、危険を冒してまで叶えたい願いがあるのかどうか、じっくり考えてみるべきだと思うの」

執行猶予……ともまた違うのであろうが、確かな宣告である事は変わらない。それだけの覚悟が必要なほど、魔法少女になるという意味は重たいものである。

「もちろん、上条君とインデックスさんも一緒に来てもいいわ。特にインデックスさんは女の子だし、魔法少女になれると思うわ」

「それじゃあ……私も一緒に」

と、そこまで言いかけた所で、

「ダメだ」

インデックスの口を塞ぐように、上条が言葉を挟んだのだ。

「ふえ……とうま、なんで？」

「なんでって、俺達明日には学園都市に帰るんだぞ？」

「むう！とうま！世界の危機かもしれないのに、その言葉はとうまらしくないんだよっ!」

「あのなあ！俺だつてなんとかしたいとは思つけど、宿題も終わつてねえ上に出席日数もヤバいし、とにかくこのままだと日常生活に支障を来すんだよ」

心根の熱い上条としては、マミと一緒に魔女退治に付き合いたい所なのだが、やはり現実的な問題が絡んでくると、そちらを優先したいと思うのが普通の人間。上条は成績最悪、出席日数もギリギリな上に夏休み宿題も終わつておらず、本当に留年ギリギリの状態なのだ。

留年と世界の崩壊阻止。

上条としては後者を優先したいが、阻止した所で留年と言つのも嫌だし、笑えない話だ。

「……じゃあ、明日だけでもどうかしら？」

「ほらとうま！明日だけだよ、流行に乗り遅れないように勉強するのも大切なんだよ？」

「ぐぬぬ……こんな不思議シスターに流行とか言われた……っ」

「お兄ちゃん、大丈夫だよ……明日だけだから」

「そーつすよ……え〜つと、上条当麻先輩？」

ここまでみんなに迫られては断れない。

はあ、とため息をつきつつ、仕方ないという感じで上条は頷いたのだった。しかも上条は魔法少女や魔女、ソウルジェムに関する事情など殆ど理解していない状態である。なんで上条が説明を受けても理解していないのかと言うと、それは、キュウベエの会話方法に原因がある。

キュウベえはテレパシーで喋る生き物だが、そのテレパシーは異能の力で、上条の右手は異能の力なら神の奇跡だつて打ち消してしまふものである。

そう、彼の右手が　キュウベえの【声】を打ち消しているのだ。キュウベえの声が聞こえない彼が　詳しい事情など知っているハズがないである。

(仕方ねえ……後でインデックスに聞くとするか)

インデックスならキュウベえが言っていた事を全部覚えているだろう。

完全記憶能力という羨ましい頭を持つインデックス。

こういう時だけ我が家の穀潰しは役に立つなあ、と上条は思っていた。



第11話 魔法少女体験学習？ 1（後書き）

・後書きトークコーナー（さやかサイド）。

さやか「なんか滅茶苦茶更新遅れたよねー」

当麻「しかも、土御門出てきてねえし……」

禁書「とうま、まいかは出てたんだよ」

当麻「同じ土御門でもそっちじゃねえし、しかも名前だけじゃねえか！」

さやか「はあ、読者にまで指摘されたのに相変わらずテンポ悪いわ……っ」

次回：今度こそ土御門が裏で……そして、ほむらがまどか達の目の前に。

さやか「あたし大活躍！」

当麻「俺の出番なさそうなんだが……」

## 第12話 / 魔法少女体験学習？ 2

8月30日の午前1時ごろ。

【外】より数十年ほど文明の進んだ学園都市では、超能力や最先端科学技術など、出来れば流出させたくない情報が蔓延まんえんしている。その為警備は非常に厳重で、【外】から学園都市に直通するバスや鉄道は存在せず、加えて高さ5メートル、厚さ3メートルの壁が学園都市を囲んでいる。

さらに3機の人工衛星じんこうえいせいによる監視も常に行われている。

その為【外】と学園都市の行き来は非常に難しいハズだが、つい先ほどまで見滝原にいたハズの土御門元春は、どういうルートで侵入したのか、現在は学園都市である人物を待っていた。

「いつも悪いにやー」

ヒュウ、という僅かな音と共に現れたのは、長い髪を二つに結んだ薄着の少女だ。突然土御門の前に鞆を持って現れた少女は、薄く笑いながら土御門に近づいてゆく。

「はい、例のブツよ」

「恩に着るぜい、結標むすじめあわき淡希」

結標と言うらしい少女は腕を組みながら、ニヤニヤと笑い続けている。

「……にしても、【外】の中学校の制服なんて手に入れて、貴方は何をするつもりなのかしら？」

「正確には俺じゃなくて、いつも通り【上】からの指示だぜよ」

「あら、学園都市の上層部も面白い事を考えるのね」

「まっ、学園都市としても見逃せない騒動が【外】でも起こってるみたいだからにゃー」

ふうん、と結標は頷く。最もその騒動が何であるか、結標には知る由もないであろうが。

いや、イギリス清教のエンジニアであるステイルや、ここにいる土御門など、VIP連中を窓のないビルの内部へ運ぶ仕事をしている彼女は、その関係でアレイスターのプランの一部を知っている、もしかしたら知る機会があるかもしれない。

「さて、俺はまた【外】へ行くぜい？」

「あら、もう行くの？」

「こちらにもやるべき事は山積してるんだ。特に外じゃあ色々制約があつて厄介だぜよ」

「ふうん……まっ、精々頑張りなさいよ」

「へいへい、それじゃあそろそろ戦いに行つてきますぜ」

結標に手を振りながら、土御門は闇の中へと消えていった……。

やがて日が昇り、8時10分ごろ。昨日の事を思い出していた鹿目まどかは、とりあえず学校へ行くために外へ出た。いつもの通学路を歩いていると、前方に見覚えのある2人が歩いている。

「おはよー!」

まどかが元気よく挨拶をすると、仁美とさやかが振り返り、まどかの挨拶に返す形で2人は挨拶をするのだが……何故か、さやかの動作がそこで止まってしまった。

彼女はまどかではなく、まどかの肩に乗っている白い生き物を視界に捉えた。

『おはよう、さやか!』

その生き物はさやかを視界に捉えた直後、何気なく挨拶をしてきたのだが……。

「え、あ……っ」

「……? どうかしましたか、さやかさん?」

明らかに様子のおかしいさやかを心配し、仁美は声をかける。しかしそれに答える事もなく、さやかは素早くまどかの傍に寄り、

「……やっぱそいつ、あたし達にしか見えないんだ」

「そつみたい」

さやかの問いに、まどかは苦笑いで答える。キュウベえは自分が認めた相手以外には見えないらしいのだが、そんなキュウベえにとっても不思議な事態が発生しているらしい。

最もその事態が何であるか、まどかとさやかには知る由もないであろつが……。

「あの……?」

「ああいやあなんでもないから！ 行こっ！ 行こっ……っ」

仁美はさやかに背中を押される形で再び歩き始めた。

『頭で考えるだけで、会話とかできるみたいだよ』

『うえ!?! あ、あ……あたし達、もうそんなマジカルな力が!?!』

『いやいや、これ僕力だから』

頭の中で会話をする2人+1匹だが、第3者から見るとまどかもさやかも変人にしか見えず、仁美もそんな2人を怪しく思っていた。

「お二人とも、さっきからどうしたんですの？ しきりに目配せし  
たますけど……」

「えっ!?! いや、これは……そのっ」

言い訳に困った……が、その時であった。

すとん、と仁美が鞆を地面に落とし、

「まさか2人とも……既に目と目で解かり合う間柄なのですか……」

？ 咲夜の間で急展開！？　これが近代の愛！？　いつも通りの下校でまどかさんがピンチに……そこへさやかさんが王子様のように現れ、まどかさんを救出し、そのまま結ばれて淫靡いんぴなる夜を

「

「いやいや微妙に合ってるけど流石にそれはねーよ！」

「確かに色々あつたんだけどね……？」

「いけませんわお二方！　女の子同士でだなんて……いや、ですが私聞きましたわ。確かそういうジャンルは色々な層に需要がありまして……ああ！　いつかまどさやは俺のジャスティス！　なんて言われる日が来てしまうのでしょうか！？」

「ひ、仁美ちゃん……なんか今日変だよ？」

「仁美いー戻ってこいっ！？」

たとえキュウベエがまどかの肩にいたとしても、今日も3人はいつも通りであった。

S G B

「はあ……朝からなんたる不幸」

上条当麻は見滝原の市街地を一人トボトボと歩いていた。

理由は単純。折角朝ごはんが出来たのにインデックスが行方不明で、まどかは学校だし知久はタツヤの面倒をみなければいけないし、

詢子もこれから職場に行かなければならなかった。そこでインデックス搜索には暇人である上条が駆りだされる事になり、詢子の指示を受け、現在に至る。

(くっそ……大体インデックスのヤツ、なんで朝飯がもうすぐなのに家から消えるんだよ?)

などと不満に思いながらも、何だかんだ言って彼女が心配な上条は、わりと真剣になってインデックスを探していた。そうしているうちに、見滝原で最も規模が大きいショッピングモールに辿りついた上条は、まだ人の少ないこの場所で、飲食店付近を中心に彼女を探し続けたが、

「……いない」

大食いシスターさんであるインデックスなら、今日のように行方不明の場合、大抵は飲食店の窓に張り付いているハズなのだが……今日はそんなお子様のような彼女の姿が見られない。

まさかステイル……なんて事も一瞬考えたが、それなら何らかの証拠を残すハズである。

「おっ、アンタはあの時の」

「……はい?」

突然声をかけられ、インデックスかな?と思って振り向いた上条だが……そこに居たのは大食いシスターさんではなく、赤い髪の見知らぬ少女であった。

(いや待て、この子どっかで会ったような……?)

記憶力ゼロ赤点ボーイの上条は、その乏しい頭の回転をフルにするも、見覚えがあるというだけで全く思い出せない。自分はいつ、目の前の女の子と知り合ったのであろうか？

「……………誰？」

「覚えてねーのかよ！？ あんたさあ、どんだけ記憶力悪いんだよ？」

若干不機嫌そうに怒る少女であるが、その顔を見て上条はようやく思い出したらしい。確かインデックスに餌を与えていて、自分に食い物を粗末にするなど説教したあの子であろう。

「すまん、今思い出したよ。えーっと……………お前ってどう見ても学生だよな？」

「それはアンタにも言ってる事だけど……………アタシは学校なんて行ってないの」

「おい……………」

いくらお馬鹿な上条でも、最低限学校には通っている。まあ、色々なトラブルに巻き込まれ入退院を繰り返しているうちに、出席日数はかなり危なくなり、実質不登校の子と大差なくなっている状態ではあるが……………しかし、赤髪の少女はそもそも、学校に籍さえ置いていない雰囲気であった。

「っで、アンタはこんな所でなにやってるの？ もしかしてアンタも学校通ってないの？」



「俺は夏休みだ……っ！かお前、インデックスって覚えてるか？」

「インデックス？ ああ！ ソイツなら今あそこで」

あ？ と上条は赤髪の少女が指差す方向を向く。そこには比較的大きな喫茶店があり、まだ8時代だというのに早々に店を開けていた。

そんな開店の早い喫茶店の中で、

「むしゃむしゃもぐもぐ………あっ！ きょうこ！ それにとうま！」

穀潰しシスターさんはケーキを食べていた。

上条は盛大に転んだ直後、八工もビックリなほどのスピードで彼女に接近し、

「ごらあああっ！ テメエは朝飯前に家抜けだして何食ってたんだよ！？」

「気晴らしにお庭に出たらね、きょうここと会ってお菓子奢ってくれたんだよ！」

「そ、それで俺はインデックスさん探しをさせられたの？ う、ウソだ………こんなのあんまりだ！」

頭を掻きながら叫ぶ上条当麻。

果たして彼が報われる日は来るのであろうか？

「……さて、アクセラレータ一方通行が待ってるし、そろそ学園都市に行こうかな

「？」

そして、聞いていれば必ず上条は突っかかるのである事を杏子は咳くが、あまりの不幸さに自棄になっていいる上条には、そんな杏子の咳きは聞こえなかった……。

ただし、おいしそうにケーキを食べていたインデックスは、

「……………あくせられーた？」

第12話 魔法少女体験学習？ 2（後書き）

次回予告！

次回：マミさん頑張る！

……どうでもいいけど、仁美の口調って黒子に似てますよね。

### 第13話 / 魔法少女体験学習？ 3

まどかとさやか以外には姿が見えないというキュウベえは、授業中もまどかの傍にいたものの、早乙女先生を始め誰もその存在に突っ込む事はなかった。

ただ一人を除いては……。

まどか達が登校してから数時間が経過し、待ちに待ったお昼休みが訪れた。まどかはさやかと一緒に屋上に行き、青空を眺めながら購買で購入し紙パックのジュースを飲んでいた。

「にしても、やっぱりアイツ睨んできやがったな」

「う、うん……」

それは今から数時間前。登校し席についたまどかはキュウベえを抱えていた。確かにキュウベえはまどかとさやか以外には見えていないようだが、どうやら晧美ほむらという転校生の少女には丸見えのようである。彼女はキュウベえの姿を見るや、不良のメンチよりも怖い視線を向けてきたのだ。

「ママさんがいるとは言え、不安だなあ……」

「そ、そうだね……」

内心、まどかも転校生とは仲良くしたいと思っている。それでもやはり、今朝のあの厳しい視線や昨日のママの話が心に残り、どうやら戸惑っている様子であった。

ママの話によれば、魔法少女は他にもたくさんいるらしいが、な

んでも魔法少女同士が全員味方であると言っわけではないらしい。中には己の私利私欲の為に動く者もあり、他の魔法少女が手に入れたグリーンフシードを横取りしようとする、ハイエナのような者もいるらしいのだ。

「はあ……私、どうすればいいんだろう?」

「どうすれば思い出したんだけぞ。まどか、願いごと何か考えた?」

「ううん、さやかちゃんは」

いきなり話題を変更され、まどかは一瞬ビククリするがすぐに聞き返した。

「あたしも全然たわー。命懸けてまで叶えたい願いつかって言われるとねえ……」

『意外だなあ。大抵の子は二つつ返事なんだけど』

「きつとあたしらがバカなんだよ」

「そ、そうかな……」

「そー、幸せバカってヤツ?」

確かに、と一瞬まどかは思った。

確かにお金持ちになりたいとか、憧れの人と結ばれたいとか。人として、また乙女として叶えたい願望はある。しかし、それに命を懸ける価値があるかどうかは別の話。

そう思うと、確かに自分達は幸せ者なのかもしれない。  
まどかもそう思っていた、その時、

「……なんで、あたし達なのかな？」

「……？」

屋上に設置されている金網に手を掛け、さやかは静かに話し続けた。

「命に代えても叶えたい願いがある人って、きっと世の中に沢山いるはずだよ」

そこで、さやかの脳裏に浮かんだとある少年の姿。

彼のように救いを求めている者がいるのに、何故自分達が選ばれてしまったのだろうか？

「なんか、不公平じゃないかなーって思ってさ」

「さやかちゃん……」

そこで、2人は異変に気付いた。

普段から人が少ないとは言え、昼休みの屋上には通常、何人かたむろしているハズだ。

だと言うのに、何故今日という日に限って 自分達以外の人がいないのだろうか。

（ま、ずいっ！）

異常事態に最初に気付いたのはさやか。直感的にまずいとは思っ

たものの、この世のものとは思えない重圧感と、奥底から湧いてくる恐怖心で全く何もできない。

それどころか、行動を起こす暇すらなかった。

「不思議ですか？」

突然聞こえてきた女の声に反応した2人は、ふと屋上にある出入り口のほうを向く。

「仲間の魔術師が人払いのルーンを刻んでいるだけですよ」

ドアの向こうから現れたのは、どう見ても中学生には見えない女であった。それも街中に居るような普通の女ではなく、短いTシャツに片脚だけ大胆に切ったジーンズという、エロい服装だけなら許容範囲かもしれない。しかし、腰からぶら下がっている物は 2メートルを越える刀であった。

刃こそ鞘にしまっているんで見えないが、その鞘を見ただけで【本物】と判別できるほど、その古臭い漆黒の鞘からは普通とは思えない空気が放たれていた。

「だ、誰……アンタ？」

「かんざき神裂火織と申します。今日はお一人に話があつて来ただけですよ」

『ネセサリウス神裂火織……聞いたことがあるよ。確か必要悪の教会所属の聖人だね』

「えっ？ ネセサリウス必要悪の教会？」

まどかもさやかも、そんな組織なんて名前すら聞いたことがない。

しかし、キュウベえはその組織の事を何か知っているらしく、そんな彼の反応を見た神裂の表情も少し厳しくなった。

「流石、貴方はこちらの世界に関しても詳しいのですね」

『それが僕の仕事だからね。ところで、必要悪の教会が僕に何の用だい？』

「本来でしたら、貴方を今すぐ刺身にしてあげたい所ですが……本日は貴方に用はありません。貴方が目をつけているそちらのお二人に忠告しておきたいのです」

ある程度予想していたとは言え、立ち上がったさやかは一步後ろへ下がった。

キュウベえを殺す。それは即ち　あの転校生の味方であるという意味だ。

「忠告って何さ……アンタ、あの転校生の知り合いなんですよ？」

「確か、美樹さやかでしたか……鋭い勘の持ち主ですね」

「やっぱり……なんの用だよッ」

そうだと判明した瞬間、さやかの目付きも一変する。

まるで相手を威嚇する猛獣のように、さやかは神裂を睨みつけたのだ。

「本当なら、暁美ほむらが直接あなた方にお伝えした方がいいのでしょうが……あなた方、特に美樹さやかは彼女の事を快くは思っていない。ですから私が代わりに忠告しようと思ったのです」



「何の忠告だよ……っ」

「鹿目まどか」

「は、はいっ！」

いきなり厳しい視線で名前を呼ばれては、まどかも驚かずにはいられなかった。

「私の聞く話では、確か貴女は昨日暁美ほむらとお話されましたよね」

「は、はい……っ」

「その内容、覚えていますか？」

「え……はい」

「なら、その言葉を忘れないでいて欲しいのです。そのキュウベエという生き物の言葉を信用すれば、あなたや美樹さやか、そしてバミミさえ絶望の道を歩む事になってしまいます」

同じだ。

暁美ほむらが言っていたことと、同じことを言っている。そこまでしつこく言われれば、果たして本当にほむらや目の前に現れた神裂が悪なのだろうか……まどかは迷う様になっていたが、

「折角の忠告ありがたいただけとき、アンタも結局アイツの仲間なんでしょ？ 正直、あたしはアンタの言葉が信用できないんだけど

「？」

「そうだよ。大体僕達の話に君達必要悪の教会は元々関係ないハズだ。特に君のような強大な力を持つ聖人に干渉されると、あらゆるバランスが崩れてしまうよ」

「ええ、そのバランスが崩れれば 多くの人類が救われると思いますすが？」

その言葉で遂にさやかの怒りが爆発し、大声で叫ぼうとしたまさにその瞬間だった。

バゴツ！ と。

唐突にオレンジ色に輝く弾丸が、神裂に向かって放たれたのだ。

感覚としては銃撃そのもので、弾丸の速度は人の目で追えるものではなかった。まどかとさやかにはただのオレンジ色の光線が、無数に見えるくらいにしか思えなかった。あまりにも速く、そして遠くにおいても熱を感じるほどの莫大なエネルギー。普通の人間には回避不可能……と思われたが、

シャカ、と言う僅かな音。

神裂の右手が一瞬ぶれたように見えた瞬間、轟！ という爆発的な風の唸りと共に、恐るべき速さの何かが銃弾を掻き消していった。

「！？」

まどかとさやかにとって、それは悪夢としか思えなかった。動作かどうかすら判別しにくい神裂の一瞬の手の動きと、高速の弾丸を全て掻き消した恐ろしい【何か】。ただ解かる事は、一本二本三本

四本五本六本七本……無数の【刃傷】が屋上のタイルに刻まれているのだ。

そして、最後に響いたのはチン、という刀を鞘に収める音。

「愚かとしか言いようがありません、巴マミ」

神裂がそう呟くと、空から金髪の少女が舞い降りてきた。

巴マミ。

既に彼女は魔法少女の姿に変身しており、降り立った後も銃口を神裂に向けていた。

「ま、マミさんっ!?!」

「ていうかアイツ何なの!?! マミさんの攻撃が効いてなかったよ  
うに見えたけど……ッ!?!」

喜ぼうにも喜べない状況である。

本当なら喜びを隠せないはずだが、どうも今回だけは喜べない。

それほどまでに、あの神裂という女から放たれるオーラは 凄まじかったのだ。

「鹿目さんと美樹さんに何をするつもりだったのかしら?」

「忠告だけですよ。出来れば貴女にもしておきたいですね」

「結構よ。それより、貴女はこれからどうしたいのかしら?」

「巴マミ。私は貴女と交戦するつもりはない……ですが、貴女がそのつもりならもちろん応戦させていただきます。ただ……私に魔法名を名乗らせないでください」

両者、そしてまどかとさやかに妙に緊張が走る。本来戦う必要がない者同士が、本来戦ってはいけない者同士が今　目の前で衝突しようとしているのだ。

マミは魔法を行使したのか、無数のマスキット銃が彼女の背後に現れる。しかしどれも銃口は神裂に向けられており、何時でも発砲できるという状態であった。

対する神裂も鞘を握り、右手が柄に触れている。両者全く隙がなく、迂闊うかつに動くことが出来ない。

ただ、不気味な緊張だけが屋上という空間を包みこんでいた。

(私の七天七刀しちてんしちとうが織り成す七閃ななせんの斬撃速度は、一瞬と呼ばれる時間に七度殺せる破壊力……必殺と言っても過言ではないですが、不思議ですね)

神裂は聖人だ。

聖人とは神の子に似た身体的特徴、魔術的記号を持つ者。即ち偶像の理論により神テレスマの力をその身に宿せる、まさに恵まれた天才と呼ばれる存在なのだ。その実力は一般の魔術師が何人束になっても苦もせず一蹴いっしょくし、世界の軍隊を相手に戦っても決して負けぬレベルだ。にも拘らず、マミを一方的に蹴散らす事が出来ない。

ほむらに対しても感じていた事だが、明らかに通常の魔術師とは何かが違うのだ。

才能、それはあるかもしれない……しかし、いくら才能があったとしても所詮は人間。神の子に似た身体的特徴を持つ聖人なら、苦もなく屈服させられるハズである。

対するマミも、

(どついう事？　魔女とは違う……隙が全くないわ)

聖人の凄まじすぎる潜在的なパワーを、ただ立っているだけでビリビリと感じ取っていた。

直接戦いを交えたわけではなく、さっきの一撃だって戦いとは言えない。マミも本当に神裂に当てる気はなく、僅かに照準をずらし、弾丸が神裂に命中しないように射撃を行った。にも拘らず神裂は常識外の速度で弾丸に反応し、自分に当たるわけがない弾丸を全て撃墜したのだ。

マミにも見えなかった 謎の動作を利用して。

「そこまでにしてくれるかしら？」

戦いはヒートアップする事もなく、突然に終わりを告げる。突然放たれた少女の声が、2人に武器を収めさせたのだ。神裂は刀を構えるのを止め、マミは空間からマスケット銃を消す。

その直後。

まどかとさやかが不安げに見守る中、黒い髪を靡かせ 入口から少女が姿を現した。

「ほ、ほむらちゃん……っ？」

「げっ、転校生……」

「……暁美ほむらですか」

それぞれが別々の反応をしているが、ほむらはあまり気に留めていない様子である。

少しずつ彼女達に接近し、まずほむらは神裂に目を向けた。

「神裂火織。あなただつて知っているでしょう?」

「……魔法少女の仕組みですか?」

「ええ、わかっているならいいわ。だから、魔法少女にあまり魔力を使わせないで」

それを言われ、しばらく神裂は黙りこんでいたが……、

「……わかりました。私は一旦退く事にします」

「あなた、私を気遣ってくれたみたいね……それは感謝しておくわ」

「私はただ、貴女の話聞いて色々許せない事があつただけです。それでは失礼します」

そう言い残すと、神裂は凄まじい跳躍力で飛び上がり、金網を超えて飛び降りる。それを見ていたまどかとさやかは慌てた様子で、眼下に移るグラウンドを見るが……既に神裂はいない。

恐るべき速さで神裂は戦線を離脱したようだ。

「なんだか……あなたに救われるなんて、不思議な気分ね」

「……別に。改めて礼を言われるほどの事でもないわ」

そのままほむらは長い髪を靡かせ、背を向けて立ち去ろうとするが……、

「ほむらちゃん!」

まどかが彼女を呼び止めると、始めてほむらは人の話を聞いたかのように立ち止まる。どうやら人の話を全く聞かない、というわけではないらしい。

「ほむらちゃんはその……どんな願いごとをして魔法少女になったの？」

しばらくまどかの事を見つめた末、回答はせず、すぐに屋上から立ち去った。

ただし一瞬、ギリっと、思いつめた表情を浮かべて……、

「はあ……っ」

「なんだ、あいつ？」

あの聖人との戦闘も、そこへ現れたほむらとの魔法少女同士の争いも起こらずに済んだ。まどか達は安心したのか安堵のため息をつき、強張<sup>こわば</sup>らせていた体を解していく。

多くの者が神裂やほむらに対し、不満しか覚えていないようであるが……そんな中、

（ほむらちゃん……やっぱり、悪い子には見えないよっ）

まどかだけがそう思っていた。

本当に自分達と敵対しているのなら、あそこまでしつこく言うてくるはずがない。あの神裂という聖人にしても、先程の行動は他人を想つての行動であった事には間違いない。そう考えると、果たして彼女達がそこまで悪い人達なのだろうか、だとすれば本当の目的は何なのであろうか。

考えれば考えるほど、まどかの中での疑問は深まってゆく。

「不幸だ……」

上条当麻はインデックスを見つけ出し、その時出会った佐倉杏子という少女と別れを告げると、とりあえずインデックス搜索指令を出した詢子に電話をかけた。そこで、今見滝原のショッピングモールにいたと言ったのが間違いだっただろう。

詢子にお使いを頼まれてしまった上条は、泣く泣くショッピングモールにあるお店の開店時間まで待つことになり、開店後すぐに野菜を買うべくお店に入ったはいいが……、

「ああもう！ 財布は何処なんだよ！」

「と、とうま！ あんまりカリカリしちゃダメなんだよ。お財布くらゐすぐに見つか」

「らねえから困ってんだよ！ ちくしょう、これが学園都市ならもうネコババされてるぜ」

まったく、どこまでも不幸な男だ。

財布を落とした上条は買い物も出来ず、帰るに帰れない状況に陥っていたのだ。

「とうま、朝通った道を探してみるといいかも」

「今からそうするつもりだよ……」



それで見つかる可能性は果てしなく低いだろうが、やらないよりはマシだろう。不幸に愛されていると思えない日常生活を営む、上条にとって財布を落とすのは日常茶飯事だ。しかし今まで財布を見つけた事はなく、結局学園都市の偉い人から保障を受ける羽目になるのだが……。

学園都市の外に　そんな保障制度があるわけがない。

やがて上条達が訪れた場所は、見滝原の市街地の裏にある廃ビルである。学園都市ではこういった場所には、必ずと言っていいほど武装無能力者集団の姿があり、上条にとって出来れば近寄りたくない場所N01であるが、インデックスが拉致されたという可能性もあった。

だから上条はショッピングモールを訪れる前、ここの目の前を通ったのである。

ここに潜む不良に財布をスラれたのかもしれないと、上条は意を決してここを訪れた。

「あつ、とうま。ドアから誰が出てくるよ?」

「あ?」

インデックスに言われ、俯いていた顔を上げて前を見る。廃ビルのガラス張りのドア……と言ってもガラスは全て割られているが、そこから一人の男が姿を現す。

白い制服を着たりーゼントパーマの男だが……その服装は何処か見覚えがある。

(あの制服……確かまどかと同じ学校、だよな?)

街で何度か見かけた事があるが、あの学校でああいう人種は珍しいのかもしれない。始めてあの制服を着る者で、いわゆる不良に力テゴリされる人を上条は目撃したのだ。

だか、もしかするとあの少年が上条の財布をすったのかもしれない。

「俺はクズだ……どうしようもねえ。何したって大人から文句しか言われねえ」

寂しげな表情を浮かべ、不気味に独り言を呟く少年。

そんな少年に、上条が声を掛けようとした。

「ハハッ、だったら全部滅茶苦茶してやるよ　この世の中をなあ！」

瞬間。

「シャカ！」と、腰から提げていた伸縮式の警棒を構えた少年は、まるで動物の如く咆哮し、全力疾走をして上条に接近してきた。そこで危険を察知して上条は、

「下がってる！ インデックス！」

インデックスの危険から遠ざけるべく、左手で彼女をど突いた。しかし、そのせいでコンマ数秒ほど反応が遅れ、上条が前を向いた時には既に、少年は警棒を大きく振り回していた。

上条は咄嗟に身を守るべく、左腕を上げて顔の横に持ってゆく。

「ッ！？」

打撃音、金属音が響き渡ると同時に、上条の腕の骨がミシッ！

と嫌な音を立てた。あまりの激痛に上条は口元を歪ませ、短く息を漏らした。

さらにドスッ！　と言う音と同時に、鈍い痛みと胃液が込み上げてくるような感覚に陥る。

恐る恐る視線を下に向けると、少年の膝が上条の腹部にめり込んでいたのだ。

「あ、が……あッ!？」

さらに少年は上条を追撃し、バゴン！　という痛々しい音と共に勢いよく拳を下ろし、上条の後頭部を叩きつけたのだ。その勢いで地面に叩きつけられ、上条は顎を打ってしまった。脳が揺さぶられ、目もぼやけてきた。

しかし、上条は意識を失わない。

「とうま!」と叫ぶ声が彼に戦う勇気を与え　確かに力と自信が湧いてくる。

と、そこで　上条の目にあるものが映る。

(なんだ、あの模様……?)

よく見ると、少年の首筋には不思議な模様が浮かんでいたのだ。目もぼやけているし、その正確な形は今の上条にはわからないが、何処か宗教的な模様に見えなくもない。

ただ、第一印象はその模様　とても不気味であった。

「……次は、テメエだっ!」

上条をやったと勘違いしたのか、少年の矛先はインデックスに変更される。猛獣の如く駆ける少年の姿に怯えているのか、インデックスは後退りをするので精一杯の様子だ。

しかし、それを見た上条は、

「テメエの相手は俺だクソバカッ！」

上条は勢いで起きあがると、地面に落ちていた小石を拾い、それを少年に向かって投げつける。

コン、という音と同時に小石が弾け、地面に落下する。しかし確かに小石は少年の後頭部にクリーンヒットしており、その衝撃で少年を怯み、警棒を持っていない左手で後頭部を押えていた。

その隙を狙ったかのように、上条は大地を力強く蹴って走り始める。上条の咆哮に気づいた少年は振り返り、警棒を構え直そうとするが、その反応は僅かに上条より遅かった。

上条は固く握った五本の指を少年の顔面に叩きつけ、バゴン！という壮絶な音が響いた。

上条はそこまで喧嘩が強いわけではない。

一度に相手二出来る人数は、精々2人くらいまで。それでもかなり苦勞し、相手が3人となれば迷わず逃げる。その程度の腕っ節しか持ち合わせていないのだ。にも拘らず、少年はまだ若く、体重も軽くて喧嘩にも慣れていなかったのか、素人の拳一発で気を失って倒れ込んでいた。

ただし。

少年を殴り飛ばした上条も、右手に違和感を感じていた。

(右手が何かを打ち消した……？)

打撃音と同時に、ガラスが割れるような音が響いていた事と、右手に感じた僅かな違和感がそれを物語っている。上条の右手、イマジン幻想殺しは確かに何かを打ち消したのだ。

そこで上条は右手を見るのをやめ、もう一度少年のほうを見る。

「ッ!？」

すると、信じがたい事に 首筋の模様が完全に消えていたのだ。

「とうま、大丈夫?」

「ああ、俺は平気だけど……」

「……魔女の仕業だよ」

しばしの沈黙の後、インデックスは静かに呟いた。  
魔女。

それは今までに何度か遭遇し、いずれも取り逃がしてしまったあの魔女の事であろう。

「ま、魔女って……どういう事なんだ、インデックス?」

「魔女の口付け。それをされた人は突然自殺したり、殺人事件を起こそうとするんだよ」

「……こういう事かよ、魔女が内側から俺達を蝕むって事は」

「しかもこれが発生するって事は……魔女は近くにいるんだよ」

「近く? まさか、このビルの中とか……?」

出来れば早く魔女を捕まえ、倒したいと思った上条。確かに右手さえあれば魔女を打ち消し、全てを解決できるかもしれない。しかし、上条も所詮はただの人間、魔女と渡り合う事は不可能だ。

自分はいかに無力なのだろうか思った上条だが、それと同時にある事にも気づいた。

(そういえば巴って、まどかと同じ学校だったよな?)

そう思った上条は即座に携帯電話を取り出し、アドレス帳を開いた。幸い鹿目家に居候する事になったその日、上条はまどかとメールアドレスを交換した。プロフィールごと交換した為、そこにはまどかの携帯電話番号も登録されていたはずだ。

まどかに電話をすれば マミを呼んでくれるかもしれない。己が無力だからこそ、思いついた最後の手段である。

(頼む 出てくれ!)

上条はアドレス帳の【鹿目まどか】を選択し、ゆっくり音声電話のボタンを押した。

### 第13話 魔法少女体験学習？ 3（後書き）

・後書き！

どうも、作戦参謀です！

言うほどマミさんねーちに喧嘩売っただけで、言うほど活躍してない気が……。

長くなって&予告詐欺してごめんなさい。

次回こそ、マミさんが魔女相手に頑張ります！

あと、作者がねーちん好きなのは内緒の方向で！

・次回予告

次回！皆様の  
がティロ・フィナーレ！

## 第14話 魔法少女体験学習？ 4

見滝原市にはいくつかのマックが存在するが、ここはまどかやさやかの行きつけであり、ここにマミも加わって3人はおやつを食べていた。マックでおやつを食べる学生は比較的多く、まどか達以外にも見滝原中の生徒の姿が見える。

なので、パツと見彼女達も他の中学生同様、単なる中学生にしか見えないのだが……、

「さて、それじゃあ魔法少女体験コース第1弾。いってみましようか」

マミは笑顔だが、ある意味恐ろしい事を言っているのかもしれない。そして、一般大衆には絶対理解できない事を言っているのだろう。

「準備はいい？」

「うむ、どんと来い！」

そう調子よく答えたのはさやかだ。ごそごそと何かを取り出しているが、それは布に包まれた比較的細い棒状のものである。さやかはそれを取り出すと、布をゆっくりとついでいき、

「じゃじゃ〜ん！ さっき体育館から拝借してきたわ！」

「うん、まあ……意気込みはいいわね」

さやか曰く、体育館から拝借してきた物とは木製のバットである。



どう考えても見滝原中の野球部の備品で、言ってしまうえば盗品である。流石にマミもまどかも呆れて苦笑いしていた。

「まどかは何か用意してきた？」

「えっ！？ え、ええっと私は……こんなを考えてみた！」

それは絵だった。

可愛らしい衣装に身を包んだ自画像であった。

丁寧な事に武器まで描かれているが、この場は何とも言えない沈黙に閉ざされた。

「さ、さあて準備もできたし！ そろそろ行くかぁ！」

「そうねっ！ あ、後は上条君が来たら行きましょう！」

「か、上条！？ ああ、あっちの不幸なほうね！ うん了解了解！」

「ひ、ひどいよぉー！ マミさんまで！？」

笑いをこらえるマミとさやかだが、全く堪えきれていないのはここだけの話である。あまりの恥ずかしさに顔を赤らめ、慌てた様子でまどかは叫んでいた。それもまた、周囲から見たら中学生が恋愛関係の話をしているようにしか見えないのだろう。

「にしかも上条恭……ああもう紛らわしい！ もう当麻でいいや！」

「さ、さやかちゃん！？ もしかしてお兄ちゃんの事が」

「流石にねーよ！ ていうかまどかもまどかよ。その年になってお

兄ちゃんって……プツ！」

「ひどいよぉーさやかちゃん！ だって今更呼び方なんて変えられないよぉ……っ」

「ふふっ、鹿目さんらしいわね」

「もう、マミさんまでっ」

話が前進しているようで前進していない。これから戦いに行くとは思えない空気だが、一応上条当麻も彼女達にとっては重要なパシリ……もとい戦力なのだ。

イマジンプレイヤー彼の幻想殺しは正直便利だし、待つ価値はあるのだが……、

「……にしても遅い！ あんの野郎、折角お美しいマミさんがいるのに。鼻の下伸ばしすらないなんて……もしかして当麻って枯れてるの？」

「えっ？ ちょ、ちよっと……美樹さんっ？」

「さ、さやかちゃん!？」

「あっははは……冗談冗談っ」

「もう」

なんだかマミの顔が赤い気がしたが、まどかはあえて突っ込まない事にした。

うん、多分気のせいだろうと、まどかは自分に言い聞かせる。

「でも、ほんとに遅いね。どうしたのかな……？」

「そうね。上条君は鹿目さんの家に居候しているのでしょうか？」

「はい。色々都合があるみたいですよ」

「学園都市って私も聞いた事があるけど、色々大変そうね」

上条が学園都市の外に来る事なった理由など、微塵も知らない彼女達だが、おそらく知らない方が幸せなのだろう。いかに学園都市の治安が悪いか、外部にバレては学園都市もお終いだ。

魔法少女体験コース開始のハズが、いつの間にか学園都市の話題になっっている。

中々事が前進しない彼女達であった……が、

そんな微妙なタイミングで。

突然、テーブルが不自然に震動する。

「あつ、まどかー携帯唸ってるよ」

その正体は怪奇現象でも魔法でもなく、まどかの携帯電話が鳴っているだけであった。マナーモードのバイブだが、直に机の上で鳴ると意外と響くものである。

誰かな、と思いつつ、まどかは折り畳み式の携帯電話を開け、画面を見る。

「あつ、お兄ちゃんだ」

「出たな遅刻野郎っ、なんてメールよこして来たんだ？」

「メールじゃなくて電話だよ？」

「あら、何かあったのかしら？」

とりあえず電話をしないと何も始まらないので、まどかは通話ボタンを押し、携帯電話を右の頬のあたりに当てた。無事に繋がったようで、向こう側の雑音などが聞こえてくる。

「もしもし？」

『もしもし、まどかか？』

「うん、そうだよ」

『よかった！ ようやく繋がった！』

何やら上条は感激しているようで、さらに小さく「やったねとうま！」なんていう声も聞こえてきた。どうやら彼はインデックスと一緒にいるらしい。

雑音からして彼らは外にいるらしいが、かと言って見滝原シヨツピングモールにいるわけでもなさそうだ。とりあえず、彼らが向かっている途中だと理解したまどかは、居場所を尋ねる事にした。

「どっしたの？ 今どこにいるの？」

『なあ、今そこに巴はいるか？』

「マミさん？ 私達今、待ち合わせ場所にいるよ？」

『そうか。悪い、ちょっと巴に代わってくれないか？』

「えっ、マミさん？ ……うん、いいよ」

「なんでかなーと思いつつ、まどかは一旦顔から携帯を離して、

「お兄ちゃんがマミさんと代わりたいてって」

「えっ？ わ、私？ わかったわ…もしもし？」

「少し驚くマミだが、頼れるキャラを演じたいが為に、彼女は何気なく電話を受け取った。」

『巴か？ 今、例の待ち合わせ場所にいるんだよな』

「ええ、そうだけど…上条君は今どこにいるのかしら？」

『今から教える。だからそこに来てくれ！』

「……えっ？」

「いまいち状況が飲み込めない。ただし上条が妙に真剣に叫びかけてきた事から、何らかの異常事態が発生したとは理解できた。しかし何故上条がここまで慌てているのか、理由が不明だ。」

「えっと、何があったのかしら？」

『いきなりで信じられねえかもしれないけど、魔女が現れたんだ！』

「えっ！？ ちょっと……貴方は無事なの！？」

『インデックスが急に騒ぎ始めたんだ。魔女の口づけだっけか……？ 急に変な模様が首に浮かんでるヤツに襲われて。インデックスは魔女だって騒いでるけど、どうなんだ！？』

魔法少女としてこれまで戦い続けてきたマミにとって、上条の言う人に現れる、その不可解な症状は何度もこの目で見てきたものであった。出来れば見たくもないし、最もよいのはその現象が発生しない事なのだ。しかし魔女が現れると必ずと言っていいほど、その現象は発生する。

マミの表情がさらに強張る。その額にはほんの僅かに汗が浮かび上がっていた。

「間違いなくそれは魔女の口づけ。その近くに魔女がいる証拠よ」

「えっ？ ちょっと、マミさん……もしかして当麻のヤツ魔女に絡まれちゃってるわけ？」

「そうみたいね」

「お兄ちゃん……大丈夫かな？」

唯一の救いは異能の力なら問答無用で無効化してしまう、イマジンプレ幻想殺イカしが上条の右手に備わっている事だ。それにインデックスも魔術には詳しいし、まどかやさやかと言った、全くの素人が襲われるよりは遙かに生存率は高いだろう。

だが、油断は出来ない。

いくら素晴らしい力を持っていたとしても、いくら魔術に詳しくかろうと。

上条やインデックスに 魔女を倒すほどの力はないのだから。

「上条君。すぐに行くわ。場所を教えて」

わかった、と答えた上条は焦っているのか、早口で現在の場所を  
マミに伝えたのであった。

S G B

それからしばらくして、急いで食べ物を片付けたまどか達は、マ  
ミを先頭に上条がいる廃ビルへと向かっていた。しかし見滝原も歴  
史ある街で、近年現代化が進み、現代的な建物が立ち並ぶ未来的な  
都市へと変貌を遂げた場所だ。それだけに使われなくなった廃ビル  
の数も多い。

単に廃ビルと聞いただけでは、何処の廃ビルか特定する事は困難  
である。

それでもマミは迷う事なく、まるで道を知っているかのように走  
り続けていた。

「マミさん、どうして場所がわかるの？」

疑問に思ったまどかが、ついにその事について問う。

「見て、このソウルジェム」

走りながら、マミは後ろから追ってくる2人に光るソレを見せる。  
黄色……というよりは黄金に近いソウルジェムが、まるで宝石のよ  
うに明るく輝いていた。

しかしその輝きは自然のものではなく、何だか不気味な感じでも  
ある。

「光っているのがわかる？」

「はいっ」

「これはね、魔女の魔力が反応しているの。基本はこの反応を頼りに魔女を追うのよ」

「うわあ、結構地味」

つと、呟くさやか。そうは言うものの、確かにそれ以外に魔女を探しだす手段はない。上条やまどか達が以前魔女と遭遇したのは、単なる偶然に過ぎないのだ。

そうしょっちゅう魔女を見つげられる事など ありえないのである。

「魔女の呪いで起こるのは交通事故や傷害事件……自殺なんか多いわ。だからそういう事が起こりやすい所を優先的にチェックするの……が普通だけだね。今回は上条くんが大体の場所を教えてくれたし、いつもよりは魔女を探しやすいわね。それと、弱った人が多い病院に魔女が取り憑くと、生命エネルギーを吸い取られてかなりまずい事になるわ。だから注意したほうがいいわ」

「病院……?」

「……ッ！」

その時、ソウルジェムが激しく輝き始める。例えるならば、それはリーダーと同じようなものであり、近くに反応があればソレは輝きを増すのである。



即ち、この反応は近くに魔女がいるという証拠。

「……近いわ」

「えっ!？」

「ごっちよー!」

いきなり走り始めるマミに、まどかとさやかはあたふたしながらマミを追った。

S G B

見滝原市内に存在する廃ビル。上条当麻とインデックスはその目の前で佇み、未だに目を覚まさぬ少年の様子を見ていた。単に気絶しているだけらしく、病院に搬送する必要はなさそうであるが、万が一の可能性もある。急に容態が悪化する事だつてありえるのだ。

インデックスは魔術に詳しい。イザとなれば偶像の理論を用いた儀式を行い、回復術式を組めば大体の怪我、病気を治癒する事が出来る。だからインデックスが少年の様子を中心的に見て、上条はビルやビルの周辺の警戒に当たっていた。

また少年のように　魔法の口づけの犠牲者が現れるかもしれないからだ。

「上条君!」

自分と呼ぶ声が聞こえたので、上条は反射的に振り返る。ソウルジェムを片手に持つマミに、丸腰のまどか。木製のバットを握るさ

やかの姿が近付いてくる。

「巴、まどか、それに美樹か」

「この人は？」

マミは倒れている少年について、少年を看病していたインデックスに聞く。

「犠牲者だよ。でも大丈夫、口づけ自体はとうまの右手で無効化されたから」

「えっ？ む、無効化って……」

マミにとってそれは信じられない事であった。

少なくともその効果は魔女を倒さない限り 死ぬまで続くハズだからだ。

「ああ、俺がコイツに触れたら首の様子が消えたんだ」

「信じられないわ……でも、様子が無いから本当みたいね」

「ん？ 普通は消えねえのか？」

「魔女を倒さない限りはね。どうやら上条君の右手……かなりの効力みたいね」

「俺もよくわからねえけど、この右手はそういう右手なんだ」

とにかくこの少年は無事みたいね、とマミは安堵のため息をつく。

本来はまだ安心できる段階ではないものの、上条達のおかげで最悪の事態だけは回避できたからだ。  
しかし、

「あつ！ マミさん屋上に誰か……ッ！」

突然にさやかが叫び声を上げる。

その声に反応して空を見上げるように上を見ると、転落防止用の策を乗り越えた、OLと思われる若い女性が地上を見下ろしている。その目は妙に虚<sup>うつろ</sup>ろで、活気のかの字もない。

何より女性が立っている場所がおかしい。それはまるで

「えっ、あの人まさか……ッ」

まどかがそう呟いた、瞬間。

バツ、と。勢いよく女性は策から手を離し、ビルの屋上から飛び降りたのだ。

「ッ！！」

まどかとさやかは驚き、特にまどかは反射的に目を瞑り、両手で顔を覆った。こうなるとインデックスもお手上げ。魔女の口づけは確かに魔女の仕業である。しかし誰かの制御を受けているわけではないので、自慢の強制詠唱スベルインターセプトが通用しないのだ。

上条は馬鹿正直に前へ駆けていた。

救えるはずがないが、それでも彼は女性を救うべく　ひたすら前へ駆けていた。

……だが、

「　ッ！」

「バツ！ と、オレンジ色の糸とも縄とも捉えられる不思議な物が、女性を優しく包み込む。」

それはまるでベットのようで、ゆっくりと女性の落下速度が低下してゆく。やがて女性は地面に落ちるが、速度はなく衝撃も殆どない。ただ静かに女性は眠り続けていた。

そして、女性を助けたマミは 既に魔法少女の姿に変化していた。

「マミさん！」

「巴！ その人は？」

「大丈夫、魔法で助けたわ。衝撃も殆どなかったから無事なハズよ」  
皆がほっ、とする中、マミは女性の首筋を確認する。

やはり首筋には不思議な模様が浮かんでいる。魔法の仕業である事は確実だ。

「やっぱり、魔法の口づけね……」

「口づけ？」

「説明は後。魔法はビルの中よ、追い詰めましょう」

早速入口付近へ移動し、武器を構えるマミ。  
その一方で、

「それじゃあ私はここに残るんだよ」

「ん？ インデックスは行かないのか？」

「こつちの人はともかく、さっき落ちてきた人の模様は消えてないんだよ。まみもさっき言っていたけど、魔法の口づけは魔法を倒すかとうまが触れない限り、絶対に消える事はないんだよ」

「つまり、自殺防止ね」

確かに納得できる理由だ。

一応命を救ったとは言え、女性是不安定な状態である。誰か一人でも監視役がいたほうがいいだろう。

「ここは私に任せて。まみ達は魔法を倒して」

「そうそう、ここは俺らに任せて欲しいぜよ」

「ッ！？」

あまりにも急な声に、一同は驚きを隠せず、マミと上条は咄嗟に構える。言葉を喋る魔法は目撃した事がないが、万が一と言う事もある。特にマミにとっては獲物を横取りしようとする魔法少女にも警戒する必要があったのだ。だが、ここで上条はある事に気がついた。

魔法や魔法少女ではない事にだ。

その理由は単純　どう考えても男の声だったからだ。

そして。

彼らが振り向いた先には　やはり男の姿があった。

身長は180センチ前後であろうか。背が高くてで筋肉質であり、

しかも上条以上にツンツンした頭髪は金色。緑系のアロハシャツに黒い短パン。そしてサングラスを掛けている怪しい男だ。

いかにも不審者か地元の不良ですと言った雰囲気の人に、まどかとさやか、そしてマミは警戒心を強めたが……どうもその人物。上条やインデックスにとっては見覚えのある人物で、

「つ、土御門!？」

その名前を声に出して叫ぶと、まどか達は驚きを隠す事が出来なかった。さやかに至っては「ちょ、知り合いだったの!？」と上条に突っ込みを入れている。

「にゃー! 久しぶりだにゃーカミヤン!」

「な、なんでテメエがこんな所に!？ つか、学園都市からどうやって出たんだよ!？」

「まっ、学園都市を脱出する手段はいくらでもあるぜよ?」

何気なく、とても軽く言い放つ彼だが、やっている事はあきらかに普通ではない。そもそもこのタイミングでこのシスコン軍曹が現れること自体 異常事態なのだ。

「土御門君……よね。あなたは何者なの?」

警戒しつつ、マミが近寄り土御門の素性を探ろうとする。

「まっ、話は後ぜよ。それより早く魔女を倒さないとヤバいんじゃないかにゃー?」

「ま、魔女って……この人マミさんとも知り合い!？」

「いえ、知らないわ」

「つーか土御門。なんでテメエが魔女の事知ってんだよ」

「後で話すぜよカミヤん。それよりここは俺とインデックスに任せ  
て、早く行ったほうがいいぜ?」

相変わらず胡散臭い男であるが、確かに彼の言っている事は正しいかもしれない。魔女はその日の気分によって拠点を移し、不特定多数の人の心を喰らうのだから。

そう判断したマミは、行きましようとして上条達に呼びかける。

一行は土御門とインデックスを残し、廃ビルの中に入っていくのであった。

SGB

鹿目まどか、美樹さやか、巴マミ。そして最もイレギュラーな存在 上条当麻。

4人が魔女の潜む廃ビルへ入った事を確認し、玄関前で土御門とインデックスが待機している事も把握している。ある一人の少女が廃ビルの柱の陰から、彼らの様子を窺うかがっている。

少女は白というか、黒というか、紫というか……とにかくそのようなイメージを持つ、制服にしては派手であり、まるでコスプレのような不思議な服装をしている。髪は黒く、そして長い。服装を除いては極上の美少女である。

さらに少女の横にもう一人 薄い生地で露出度が高い服を着た

お姉さんが立っていた。

「行ってしまいましたね」

「ええ、後を追うわ」

「お供します。暁美ほむら」

盾を装着している以外は丸腰にしか見えない少女、暁美ほむらが走りだす。その後を薄着<sup>あと</sup>で長身の日本刀を腰から提げたお姉さんが追いついた。

S G B

廃ビルに侵入したまどか達は、入口に入るとすぐに魔女の居場所を突き止めた。正確には魔女本体を見つけたのではなく、結界を発生させただけなのだ。

それでも、結界の中に魔女がいる事には変わらない。

そこでマミは、さやかが持っていた木製バットを握り、

バットは突然、白を基調としたマジカルな模様の鈍器へと変わったのだ。

「うお、うわぁ……っ！」

「すごい……っ！」

「気休めだけど、自分の身くらいは守れるはずだわ」



確かにこれさえあれば、ただのバットで戦うよりはマシかもしれない。出来れば上条も武器くらい欲しいなと思っていたが、上条が握れば元に戻るところか、砕け散って消滅してしまうだろう。

仕方ねえ、と思いつつ上条は右拳を握る。彼は拳だけで戦う事に決めたようだ。

「絶対に私の傍を離れないでね」

「はい！」

まどかとさやか元気がよく返事をする、マミは階段を上って結界の入り口へ向かう。一足先にマミが結界へ飛び込み、まどか達も一歩遅れて飛び込んだ。上条はそんな2人を見届け、周囲の様子を窺<sup>うかが</sup>ってから結界へと飛び込む。ここでまた、上条は一つ疑問に思っていた。

結界だって異能の力でできているはずだし、幻想殺<sup>、</sup>しで破壊できるはずなのに、何故か結界は破壊されずに存在し続けている。

彼にその原因はわからない……が、なんとなくの推測は可能だ。

おそらく結界は魔女が存在し続ける限り、永遠に作られ続けているのである。

だから幻想殺<sup>イメージブレイカー</sup>しが働いても、まとめて消去する事が出来ない。

彼はそう推測していた。

SGB

暁美ほむらと薄着のお姉さんは、彼らが結界内に侵入する姿を目撃していた。冷たく、しかし僅かな希望でも目指しているかのよう

に、ほむらは結界を鋭く睨みつけている。

「あれが結界ですね」

「ええ、突破するわ」

「お任せください。極力貴女に魔力は使わせません」

「かんざきかおり神裂火織……あなたの魔法は便利。仕組みが違うところまで違うのね」

「しかし、魔女ですか……聞いた話によると少し手間取りそうですね」

すると神裂は、腰から提げている日本刀の柄を握り、僅かにそれを鞘から抜く。ギリリ、と。白銀に輝く鋭い刃が姿を覗かせた。神裂はそのまま少し腰を下ろし、構えを取る。

「名乗りたくはありませんが　仕方ありません。唯閃ゆいせんの使用と共に、一つの名を」

神裂は魔法少女ではなく魔術師。さらに言えば世界に20人といない聖人だ。魔法少女と違う点は幾つも存在するが、今名乗ろうとしているソレは、間違いなく大きな違いの一つ。

神裂はシュバ！ と、勢いよく七天七刀を抜刀し、

「Salveree000！」

その意味は【救われぬ者に救いの手を】。

かつて女教皇プリエステスの地位に君臨した聖人が、今　戦場へと飛び込ん

だ。

SGB

結界内へ侵入したまどか達は、マミを中心としながら使い魔達との戦闘を繰り返しつつ、魔女が潜む結界の奥へと進み続けていた。マミ達の行動を阻む使い魔達の容赦ない攻撃が、次々と降りかかってくるが、それを次々とマミは撃破してゆく。

敵が現れれば即座に単発式の銃を構え、強烈な一撃を喰らわせて敵を駆逐。なるべく戦わないようにしつつ、それでも確実に敵を撃破しながら4人は前進し続けた。

「うわあっ！ く、来んな！ 来んなっ！」

滅茶苦茶にバットを振り回すさやかだが、一応使い魔の攻撃を防いでいる。完全に無力というわけではなかった。しかし武器を持たぬまどかは格好の餌。<sup>えしき</sup>

次々と使い魔達が襲いかかり、

「きゃあっ！！」

「まどか！」

バキン！ という音が響くと、使い魔は粉々になって消滅する。本来使い魔の強度は、素人の拳一発で死ぬようなヤワではない。だが、上条の右手には幻想殺しが宿っている。<sup>イマジンプレイカー</sup>所詮は使い魔も異能力で生み出されたもの。拳を叩きこめば一撃で消滅する。

一瞬でも右手が触れれば使い魔は消滅する。

なので上条はスタミナの事を気にせず、思いっきり戦う事が出来た。

「あ、ありがとう……っ」

「気にすんな……っか、なんなんですかこの数は!？」

上条はあまりにも多すぎる使い魔達に、少々ビビリ気味であった。いくに上条でも使い魔に効果があるのは右手のみ。一度に相手にできるのは一体までだ。

不良の喧嘩と同じ、使い魔との戦いも人数は相手に出来ないのである。

「みんな！ 先に行くわよ！」

マミもそれくらいの事はわかっているので、一掃しようとはせず、先へ進む事を勧める。

確かにいちいち相手にするよりも、先に本体を叩いたほうがこの場は賢い<sup>かしこ</sup>だろう。

マミに命令されるがままに、3人はマミの後を追いかけた。

「どっ、怖い。みんな？」

「な、なんてことねえって！」

「まあ、別に……」

さやかのは強がりだろうが、上条はそこまで怖いとは感じていなかった。日頃から不幸で不良には絡まれ、最近では錬金術師に右手を切り落とされ、学園都市の第1位と真正面から戦った。

アウレオルスや一方通行アクセラレータに比べれば、この程度の事などどうって事ない。

上条の感覚はある意味、麻痺まひしていた。

「ッ!？」

その時、細い通路になっている場所に、大量の使い魔達が押し寄せてくる。咄嗟にマスケット銃を構えたマミが発砲し、使い魔達は一撃で粉碎される。

「うわっ!？」

その余波で吹き飛ばされた使い魔達が、まどかやさやかの背後に現れ集合する。このままだと間違いなく彼女達は殺される。が、そんな最悪の結末を阻止する右手があった。

「お、アあああッ!」

咄嗟に駆けだした上条は、使い魔達に固く握った右の拳を叩きこむ。右手は便利だ、不良との喧嘩には勝てないし、頭がよくなるわけではない。幸せになるわけでも女の子にモテるわけでもない。たし右手は使い魔を殴る事が出来る。それだけでまどか達を守る事ができるから、大変便利だ。

使い魔は一撃で消滅する。拳が強かったからではなく、イマジンプレイカー幻想殺しの効果だ。

そんな2人の戦いぶりを見て、まどかは何かを感じていた。

(……怖いけど、でも)

やがて辿りついた場所は、少し広くなっているホールのような場所であった。相変わらず結界特有の不気味な光景が広がっているが、このホールだけは何か違った。

そう、そこには文字通り　化け物がいた。

「あれが魔女よ……」

「うわっ、グロい……」

「確かに化け物だな」

蝶の羽と、薔薇の茂みのような頭部を持つその化け物。

人によっては確かに不快に感じるかもしれない、あまりにもグロテスクな外見であった。

「ママさん、あんなのと戦うんですか……?」

「大丈夫、負けたりなんかしないわ」

ママは自信満々だ。

恐らく自分じゃ勝てないだろうし、上条は下手に突っ込む事を諦め、ママに任せる事にした。

「ッ！」

単発式のマスケット銃を構え、ママは一人魔女へと突撃を仕掛ける。一方通行がベクトルを操作し、凄まじい速度で接近してきた時

の事を上条は覚えている。だが、マミの速度はあの時の一方通行にアクセラレータも匹敵するほど速い。常識離れた圧倒的な速さである。

「ッー！」

魔女も黙ってはおらず、マミを迎撃すべくハート型の巨大な物体を突き落とす。マミを潰そうと落下する物体を、素早く後ろへ跳躍する事で回避。その時既に、マミは上を睨んでいた。

魔女は蝶のような羽を飛ばたかせ、かなりの速さで飛行していたからだ。それを見たマミは被っていた帽子を取り、右腕と共にそれを振り回す。

現れたのは複数のマスケット銃。

それを一発ずつ放っては捨て、複数の弾丸が魔女に向かって飛翔した。

しかし、何故か一発も当たらない。

「あっ？」

それどころか、マミは足元に違和感を覚えたので地面を見る。蝶のような、しかし雪虫にも見える小さな使い魔達が、マミの足元に集たかっていたからだ。

隊列を組む使い魔達は、やがてどす黒く変色し、マミの体を縛る一本の縄へと変化する。

「……ッー!?」

シユバアツ！ という風を切る音が響いた。

突然縄が伸び、動き始め、マミは空中で振り回されていた。バン！ と、慌てて銃撃を開始するが狙いが定まらず、外れ弾ばかりだ。地面に無数の穴が開いたが、魔女に当たらないのでは意味がない。

そして、

「あ、アあ……ッ!?」

ゴバアッ! という轟音が炸裂し、灰色の粉塵がマミを包み込む。その粉塵はすぐに風の流れに乗って流される。しかしマミはボロボロだ。壁は破壊され、そこにマミがめり込んでいる。

しかし魔女は容赦を知らず、縄はマミを持ち上げ、魔女の近くまでマミは持ってかれた。

これから処刑される罪人の如く、縛られたマミはただぶら下がっているだけであった。

「巴エええッ!」

「マミさあああんッ!」

「く、そオオ　ッ!」

我慢の限界か、頭の中で何か切れた上条が飛び出そうとする。

……が、その手をまどかが掴み、上条の行動を阻止しようとする。

「まどか! 離してくれ!」

「だ、ダメだよお兄ちゃん! 危ないよ!」

「そうよ! マミさんでも苦戦する相手に、アンタが勝てるわけないでしょ!」

さやか of 言い分は正しい。

上条が飛び込んだ所で状況は変わらない。



基本的に上条は弱い。右手以外はただの人間だ。しかし、

「じゃあ、巴がどうなってもいいのかよ!？」

「そ、それは……」

「でも、アンタが行っても　ッ」

「　大丈夫」

感情的になる3人を動きを止めたのは、マミの優しい声あった。あれだけポロポロになり、なおも余裕そうな表情を浮かべ、マミをこちらを見ながら微笑んでいた。

「未来の後輩に　あんまり恰好悪い所見せられないものね!」

叫んだ瞬間、床から無数の細く、黄色い線が伸びてくる。ただ床から伸びてきたわけではなく、それはマミが放った弾丸が命中し、出来てしまった弾痕たんこんから成長してきた。

やがて、その線は魔女へと伸びていき　魔女を縛り付けたのだ。縛り付けられた魔女は、随分とコンパクトに映る。先程とは大違いの姿であった。

「おしかったわね」

　と呟き、胸元のリボンを解く。縄から解放されたマミは優雅に飛び降り、リボンを美しく回し始めた。ぐるぐる、と巻かれるリボンはやがて　巨大な銃へと変貌する。

銃と言うよりは砲に近く、その口径は戦艦大和の主砲さえ凌しのぐものだ。

巨大なそれを抱えたマミは、魔女に狙いを定める。  
距離は下に15メートル。照準は完璧であり、そして

「ティロ・ファイナーレ!!」

ゴオアアツ! という鼓膜破りの轟音が炸裂する。銃口から放たれた巨大な弾丸は、目にも留まらぬ速さで飛翔する。それが命中したと分かったのは一瞬、魔女に巨大な風穴が開いたのだ。

しかし直後、魔女は不気味にうねりながら、次第に姿を崩していく。

そんな中、マミが爽やかに着地する。使い魔の蝶が慌てながら飛び交う中、彼女は紅茶を飲みながら上を見上げる。そう、見物していたまどか達のほうだ。

につこりと、満面の笑みを浮かべるマミ。

そこから浮かび上がる言葉は一つだけ。

「あ……勝ったの?」

「すごい……っ!」

喜ぶ2人、そして改めて魔法少女はすごいと思った上条。

やがて空間が歪んでいき 次第に元の廃ビルへと戻っていった。

第14話 魔法少女体験学習？ 4（後書き）

・後書き！

今年初更新！

今年もよろしくお願いします！

・次回予告

上条「ちよつと待て！？ そんな展開誰も聞いてねえし得もしねえぞ！？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0613x/>

---

魔法少女まどか マギカ～幻想殺しと魔法少女

2012年1月6日21時48分発行